第四章　心意と生活

第一節　家の神

(一)　家の神と屋敷の神

家でまつる神仏　市域の家々を訪れてみると、多くの家が屋内や屋外に神をまつっている。市域に何世代か住居を構えてきた家では神棚や仏壇のない家はないといっても過言ではない。また屋敷内や近くの所有地に小さな祠を建てて神をまつっている家も少なくない。

しかし、だからといってそれらの家々が特定宗教の特別熱心な信者というわけではない。神棚にはどこでも伊勢の大神宮がまつられている。また、家ごとにまつられている神は唯一の神ではなく、必ずいくつか複数の神がまつられているのである。これは信仰と宗教ということから考えてみると奇妙な現象である。家ごとに神々をまつるけれども特定の教祖や教団とは関係のないものであり、信仰としてよりも生活慣習として神々をまつっているような傾向がある。具体的にいくつかの例を見てみよう。

深良上丹A家　A家の家の中では、ヒロマにダイジングウ(大神宮)、イマにエビス、ニワにコウジン(荒神)がまつられており、屋敷内に稲荷がまつられている。これらのすべての神に次のように供えている。まず、毎月一回花をかえる。そして以下のモノビには餅をついて供える。

正月は丸餅、一五日正月も丸餅、三月一〇日の稲荷の祭りにも切り餅、四月四日の節句にも切り餅、五月三日の節句にも切り餅、夏の盆にも切り餅、一〇月一〇日の鎮守駒形(こまがた)神社の祭りの日にも切り餅である。また、スイカ、トマ

写真４－２　オオドの上の札
（深良）

写真４－１　エビス棚
（深良）

祭日＼神仏	家の中				家の外
	大神宮	エビス	荒神	仏壇	稲荷
正月	丸餅・灯明	丸餅・灯明	丸餅・灯明		丸餅・灯明
十五日正月	丸餅	丸餅	丸餅		丸餅
稲荷の祭り	切り餅	切り餅	切り餅		切り餅
４月の節句	切り餅	切り餅	切り餅	切り餅	切り餅
５月の節句	切り餅	切り餅	切り餅	切り餅	切り餅
盆	切り餅	切り餅	切り餅		切り餅
駒形神社の祭り	切り餅	切り餅	切り餅		切り餅
野菜の収穫	初物の野菜			初物の野菜	
米の収穫	米			米	
彼岸	ぼたもち	ぼたもち	ぼたもち	ぼたもち	ぼたもち
12月25，6日	お茶				
大晦日	丸餅	丸餅	丸餅		丸餅
元旦	雑煮	雑煮	雑煮		雑煮
１月７日	七草粥	七草粥	七草粥		七草粥
エビスの祭り	ヒロマに俵　ミカン・リンゴ・ダイコン２本・赤飯・サトイモ　エビス以外には供えない。				

図表４－１　家の神仏のまつり方（深良上丹Ａ家）

ト、サツマイモ、ダイコンなど新しく野菜ができたときには初物として大神宮と仏壇に供える。米の収穫のときにも同様にする。彼岸にはぼた餅を神と仏壇に一つずつあげる。

暮れの一二月二五、六日頃、家の大掃除が終わると大神宮にお茶をあげる。昔はススハキダンゴ(煤掃き団子)を作ったらしいが今はやらない。大晦日の三一日にすべての神に丸餅のお供えをあげ、夜は蕎麦をあげる。

正月は丸餅が中心である。元旦にはすべての神に雑煮をあげ、夜はご飯をあげる。「夜といっても午後四時を過ぎては遅いくらいで早くあげるものだ」といっている。三が日は男が世話をする。灯明もすべての神に三日間はあげる。七日の七草粥は女が世話をしてすべての神にあげる。七草といってもネギやダイコン、ホウレンソウなどを使う。また、十五日正月のことをニバンショーガツ(二番正月)ともいう。この日はすべての神に丸餅を供える。彼岸は春と秋にぼた餅を作ってすべての神と仏にあげる。節句は四月と五月いずれも切り餅を作ってすべての神と仏壇にあげる。

エビスの祭りは一一月二〇日で、ヒロマに俵を二俵置きその上にのし板をのせてミカン、リンゴ、ダイコン二本、赤飯、サトイモなどいろいろな野菜の煮物、汁物などを供える。エビスは北に飾るものだという。このエビスの日には他の神には何も供えない。

深良町田B家　B家の家の中では、ナカノマに伊勢皇太神宮の神棚、ヒロマに八百万の神(山の神、秋葉、箱根神社が入っている)、チャノマにエビス、ニワに荒神がまつられている。オオド(大戸)の入り口のところに秋葉神社の札がたくさん入っている箱がある。神棚と八百万の神はおおよそ南向きで、エビスと荒神はおおよそ東向きになるものだという。屋敷内では、八幡と天神をまつっている。八幡は屋敷内に、天神は屋敷の西南二〇〇㍍余り離れた、いわゆる組合道に面してまつられている。

神仏 / 祭日	家の中						家の外	
	大神宮	ヤビス	荒神	仏壇	(八百万)	秋葉	八幡	天神
正月（元日）	雑煮	雑煮	雑煮	雑煮	雑煮	雑煮	雑煮	
正月	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	
5月の節句	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯		お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	
	餅	餅	餅		餅	餅	餅	
盆				盆棚				
八幡の祭り	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯		お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	
秋の節句	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯		お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	
	餅	餅	餅		餅	餅	餅	
オヒベスサン		大根・オヒラ 果物 掛けの魚 お神酒・赤飯						
彼岸				団子・精進揚げ 中日におはぎ				
大掃除の日	お汁煮	お汁煮	お汁煮		お汁煮	お汁煮	お汁煮	お汁煮
大晦日	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯		お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯	お神酒・ご飯

図表4－2　家の神仏のまつり方（深良町田B家）

これらの神に供え物をする日は次のとおりである。大晦日から正月の三が日、五月五日の端午の節句、七月三一日から八月一日の盆、九月一五日の八幡の祭り、一〇月一五日、一六日の秋の節句となり、家のすべての神に供え物をする。一一月二三日のオエベスサン（エビス講）にはエビスだけにあげる。「昔はキノエネサン（甲子・大黒）など、神の日には必ずあげていたけれど、最近だんだん減った」という。いろいろの祭りのときにすべての神にお神酒や赤飯

などを供えるので、そのために神供用の器、盆と皿とお神酒徳利がそろっている。ふきんやざるも神供用に決めてあってほかのときには使わない。

暮れのお祓いは一二月二五日にする。それまでに大掃除をしておく。大掃除の日には汁粉を作る。普通の汁粉ではなくて、餅の代わりに米の団子を入れたものである。また、いちょう切りのダイコンとサトイモを白味噌仕立てにしたものを大鍋に作る。それを家の全部の神にあげる。神供用の器に入れその日一日だけ供える。この一二月二五日には深良（ふから）神社の神主に来てもらってすべての神をお祓いしてもらう。そのときに正月の注連を切ったものをもってきてくれる。

正月にも家の神すべてに供え物をする。大晦日の三一日にお神酒とご飯を神供用の器に入れて一対ずつ供える。元旦から三が日は雑煮を供える。B家は多くの使用人のいた大地主だったので、第二次大戦後しばらくは下男のうち一人を年男に決めて供え物のあげさげをさせたという。年男には下男の内の若い者がなり、一年すべての神への供え物をしたものだった。オシメを飾るのは二九日か三〇日で、「七日の風にあわすな」といって六日には下げる。

五月の節句には、餅のお供えにお神酒とご飯を家のすべての神にあげるが、四月の節句には供え物はしない。

八幡の祭りは九月一五日でご飯とお神酒を供える。「八幡さんはB家の氏神様だ。いちばん大事な神様だ」といい、いまでも家族は何かあるごとに、たとえば子供の受験やその発表のときなどにも参る。

天神は丸い自然石がご神体で絹の布の中に入れて納めてある。二月二五日が祭りの日で、オノッペイジル、餅のお供え二重ね、赤飯を供えて、午前中に神主にお祓いをしてもらう。近所の人が赤飯をもらいにくる。食べると頭が良くなるといって、少しずつそれぞれ家へ持って帰って子供に食べさせる。お祓いが終わると、神主を家に招いて昼食

を差し上げる。献立は赤飯、オノッペイジル、ぬたに決まっている。他の日にはオノッペイジルは作らない。オノッペイジルというのはおでんを細かく切ってつゆで煮たようなもので、大豆、昆布、シイタケ、ニンジン、ゴボウ、サトイモ、丸と角の揚げはんぺん、焼き豆腐、油揚げ、ちくわをつゆで煮て片栗粉でどろりとさせたものである。

秋の節句は一〇月一五、一六日で、この日にちは深良神社の祭日にあわせたものではないかと思うという。餅をついてお供えにしてすべての神にあげる。

オエベスサンは一一月二三日の新嘗祭（にいなめさい）のときにまつる。エビスの祭壇の横にダイコンを一本立てかける。両端にリンゴなどの果物を一対ずつ供える。その真ん中にカケノウオ（掛けの魚（うお））をあげる。掛けの魚は腹を合わせるように並べる。その両端にお神酒、そのまた両側に赤飯を供える。オエベスサンの日に平らな椀であるオヒラや供え物をするのはエビスにだけで他の神にはしない。昔この日は下男、下女に赤飯とオヒラでごちそうをふるまったという。油揚げ、レンコン（ななめに大きく切る）、ニンジン（縦に半分に切る）、サトイモ、こんにゃく、昆布、紅白のかまぼこ、ゴボウ（丸のまま一五センチくらいの長さにぶつ切り）などをうま煮にしてオヒラに盛る。

富沢C家　C家の家の中では神棚にシンデンサン、大神宮、金比羅をまつっており、毎朝水と灯明をあげている。シンデンサンはニタンノシロウともいわれているが由来はよく分からないという。金比羅は幕末の安政の頃この家の者が四国遍路に行って受けてきたものだという。また、台所と勝手にエビス、大黒、荒神がまつってあり、毎月一日と一五日に灯明をあげている。エビス、大黒は旧暦一一月二〇日がエビス講の日で、赤飯、ダイコンなどの煮物、尾頭付きの魚などを供え、あとで下げて家内で食べる。家の中の神には正月や鎮守の祭りの日にはみんな一緒にお供えをする。

屋外では屋敷の中にカンノンサマ(観音様)をまつっており、毎月一日と一七日に線香をあげ経をあげている。屋敷から北の方に少しはなれた道路脇の自分の家の所有地にシンメイサマ(神明様)をまつっている。一月一三日が祭りの日でかんたんな供え物をしている。

葛山D家　D家の屋敷内にはイヌカイサン、稲荷、金比羅の三つをまつっている。イヌカイサンはこの家から表鬼門の方角でずっと遠く離れたE家のそばにまつられており石の祠がある。稲荷はこの家から表の通りへ出て少し歩いていった道路脇にある。金比羅はこの家の裏鬼門の方角の山の上にまつってある。これらの神には年末に注連縄(しめなわ)を張り替え、お供えをあげている。

また、この家では畑の中に古い墓がある。何百年も前に山に逃げてきた人が下を見たら一晩中あかりがついている家があり、そこを頼りに降りてきたところ捕まえられてしまった。そのときの家がこの家で、逃げてきた人が死ぬときに「雨露のしのげるところへおいてくれ」と言ったのでここに墓を建てたといわれている。

写真4-3　C家の観音(富沢)

事例五　佐野のF家の稲荷が表鬼門に、地蔵が裏鬼門にある。稲荷は一月一五日にハナとサカキとシバを供える。地蔵は彼岸と盆と正月にコウバナを供える。ハナとサカキを供えるのは男の仕事である。

これらの例から見ると、家の中の神としては、ヒロマの神棚に大神宮、勝手にエビス、大黒、ニワに荒神という組み合わせが共通する傾向がある。そしてそれらの画一的な神とは別にそれぞれの家の何代か前の先祖によってまつられはじめた神があり、それこそがその家にとって大切な神となっていることがわかる。その家ごとに先祖がまつりはじめた大切な神の場合、屋敷内に小さな祠を建ててまつられている例も多い。

(二)　江戸時代の屋敷神

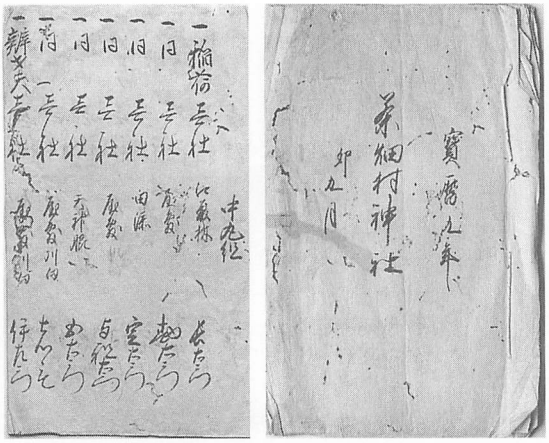
近世の屋敷神調査

茶畑(ちゃばたけ)には、一七五九(宝暦九)年に書かれた「茶畑村神社」という、茶畑村内にまつられている小祠を書き上げた帳面が残っている(柏木家文書)。これによると、茶畑には全部で五七の社があるとされている。その内訳を見ると、もっとも多いのは稲荷社で四四社である。したがって、茶畑でまつる社の七七㌫を稲荷社が占めていることになる。その他の社はごくわずかで、弁財天三社、八幡三社、そして荒神、天王、毘沙門、神明、駒形天神、山王、ホウソウガミ(疱瘡神)が各一社である。これらの社がどのような種類の神を登録しているのかは文書には明記されていない。個々の社の記載形式を見ると、中丸(なかまる)組以下各組ごとに社名を掲げ、その所在地と思われる場所を記し、その下に名前を記しているので、その記載内容に注目して判断することにしよう。するとまずどの社にも個人の名前が記されており、しかも所在地に「屋敷」、「屋敷川向」などの記載が多いことが注目される。これらの点から判断すれば、この帳面に登録された社の大部分がいわゆる屋敷神であると思われる。近世中期の屋敷神を記録した文書は珍しく、貴重なものと言えよう。

帳面は組ごとに記載されている。その組は中丸組、滝頭(たきがしら)組、一ノ瀬(いちのせ)(市ノ瀬)組、中尾組、茶畑ヶ組、そして平松新

田の順番となっている。ここに記された組は、その名称から現在のモヨリに対応するものとしてよいであろう。それぞれの組の登録社数は、中丸組では一八社、滝頭組では九社、一ノ瀬組では四社、中尾組では一四社、茶畑ヶ組では七社、平松新田では五社である。

中丸の屋敷神　具体的に中丸の記載を見ておこう。以下のように記されている。



2　1

写真4－4「茶畑村神社」1759(宝暦9)年
(柏木正男氏所蔵)
1　表　紙
2　中丸組の記載

中丸組

一	稲荷	壱社	江藤林	長右衛門
一	同	壱社	屋敷	勘右衛門
一	同	壱社	田添	定右衛門
一	同	壱社	屋敷	与祖右衛門
一	同	壱社	天神脇	五右衛門
一	同	壱社	屋敷川向	し　も
一	弁財天	壱社	屋敷川向	伊左衛門
一	弁財天	壱社	屋敷川向	し　も
一	八幡	壱社	柿木畑	佐右衛門
一	稲荷	壱社	屋敷川向	源　助
一	弁財天	壱社	屋敷川向	同　人

写真4-5　中丸の屋敷神（茶畑）

一　八幡　壱社　屋敷　庄　七
一　稲荷　壱社　屋敷　平　六
一　同　壱社　屋敷　忠兵衛
一　同　壱社　屋敷　半右衛門
一　同　壱社　屋敷　次郎右衛門
一　同　壱社　屋敷　与右衛門
一　同　壱社　屋敷　次　助

〆十八社

中丸には全部で一八社あると記載されているが、単に屋敷と記された社が九社でもっとも多く、それに屋敷川向と記されたもの五社を加えると、屋敷との関係が明記されているものが一四社にもなる。七七軒となり、やはりここに登録された社が屋敷神であることを示している。そのそれぞれの社は特定の個人のものであることがうかがわれるが、中には一人で二社を持っている場合もある。しもの家は屋敷川向に稲荷社一社と弁財天一社をまつっており、源助も屋敷川向に稲荷社一社と弁財天一社をまつっている。したがって、一八社を一六人がまつっていることになる。これは当時の中丸の戸数の全部であろうか。宝暦九年の戸数は判明しないが、一六七七(延宝五)年の「村明細帳」の記載によれば、中丸組はすでに家数二八軒とされているので、それよりも一〇〇年後の宝暦年間にはそれよりもはるかに多くな

っていたものと思われる。したがって、ここに登録された一八社一六人という数字は、屋敷神が全部の家にあるのではなく、特定の家に限定されていることを示している。現在の茶畑では、古くから居住する農家には原則として屋敷内あるいは屋敷続きに屋敷神がまつられている。しかし、近世中期にはそうではなかったのである。そして社名は稲荷社が一三社で七〇㌫を占めている。それに次いで弁財天が多いことが注目される。弁財天は三社である。

中尾の屋敷神

次に中尾組の記載内容を見ておこう。

中尾組

一	八幡	壱社	屋敷	文治郎
一	稲荷	壱社	屋敷	同人
一	山王	壱社	道上	同人
一	稲荷	壱社	大日ノ上	七郎左衛門
一	荒神	壱社	屋敷	次兵衛
一	稲荷	壱社	屋敷	彦次郎
一	同	壱社	中尾田添	久兵衛
一	駒形天神	両社	大日堂	七郎左衛門
一	稲荷	壱社	屋敷	五右衛門
一	同	壱社	上ノ山	藤内
一	同	壱社	屋敷	市郎右衛門

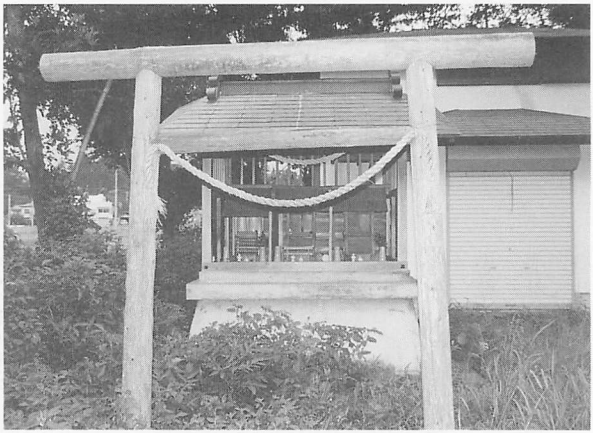


写真4－6　柏木家の屋敷神（茶畑）

一　神明　　壱社　　上ノ山　　かね
一　稲荷　　壱社　　外屋敷　　同　人
一　天王　　壱社　　屋敷　　同　人
　　〆十四社

これらの神社の中で現在判明しているのは、名主文治郎がまつっていた現柏木屋敷の八幡と稲荷、峰下（みねした）の大日堂境内にまつられている駒形と天神である。また、柏木敏夫家でまつるヤマイシテンノウはかね家の天王である。こうして見ると、中尾組というのは名主の柏木家とその分家を中心とした家々が集まっている地域、現在のモヨリで言えば、本茶（ほんちゃ）と道上（みちうえ）の一部、および峰下を含んだかなり広い範囲をさしていたことがわかる。

屋敷にまつられる神は、県内東部や伊豆地方では稲荷、西部地方では地の神という大まかな分類ができる。中部地方はその両方の重なり合った地域であるが、市域は稲荷地帯である。そのため、地の神のように五〇回忌を過ぎると先祖になるという伝承は伴わず、稲荷はたんなる屋敷を守護する神としての意味合いが強い。市域でのまつり方は、御殿場や伊豆地方に見られる特定の家の屋敷神を、複数の家々で共同祭祀するということはない。稲荷の場合、二月初午に各家で供物を供え、幡を立ててまつる程度であるが、子供の名前を幡に書いて近所のいくつかの稲荷に奉納し、子供の無病息災を祈ると

いうことは現在でも続けられている(第三章第三節参照)。

(三)　近隣の信仰を集める家の神

家の神から人々の神へ

特定の家でまつっている神であるが、それが近隣の家々の信仰も集めているような場合もある。信仰が個々の家の枠をこえて容易に拡大するものであることをよく示している。

葛山(かずらやま)中村のG家でまつる金山神社は、もとはG家のオーヤ(本家)の守り神であったが、その場所が分家のG家の所有する地所になったため、現在ではG家でまつっているという。もとのオーヤの屋敷の立地から見てみると、金山神社は表鬼門にあたるという。この金山彦の神は鍛冶の神をまつったもので、オーヤの先祖が葛山備中守の家臣で刀鍛冶であったからだと言い伝えている。ご神体は刀状の金属が三本並んで台に挿してある。このカナヤマサン(金山)のご利益は、物がなくなったときにおがむとそれが戻ってくるというもので、G家の当主の祖母がよく人に頼まれてカナヤマサンへ祈願したものだという。物をなくして困っている人の名前と年齢を言ってお願いしたという。また、G家当主の祖父は、台風で社が雨漏りしシロアリに喰われていて倒壊したので現在のようにブロックを積んで社殿を建てなおしたという。G家の人以外でもこのカナヤマサンに信仰を寄せて参る人は多く、それはカナヤマサンに祈願して失せ物が出てきた人とか仕事が軌道に乗った人たちである。しかし、その人たちというのはまったく不特定で、G家との関係はない。その信仰している人たちから賽銭をもらうこともあるが、それは貯めておいてろうそくを買ったり鳥居の塗り替えなどの費用にあてる。祭りの日は毎月一七日で、G家では一月、五月、九月には赤飯を、それ以外の月の一七日には小豆飯を供える。正月の三が日には雑煮を供える。金山神社なので金粉の入った酒を持って

初詣でに来る人もいる。ふだんは毎日ご飯を供えている。

瘡守稲荷のご利益

宮川橋の手前の道路ばたに稲荷がまつられている。H家が個人でまつっているものであるが、これに参る人は多い。昔はカサッカケといって皮膚病の一種でおできのようなものにかかる子供が多かったが、この瘡守稲荷にはそれを治すご利益があった。祭日は初午の日で昭和の戦前までは参る人も多く出店もならんでたいへん賑わったという。赤青黄緑白に正一位瘡守稲荷大明神と書いたのぼりがたくさん奉納され、戦後になっても一九五〇年頃までではこの家で畑のトマトに立てる竹はこの稲荷へあがるのぼりの竹を使えば十分であったという。のぼりをあげるのは子供が多く、また病気で困っている人も多いという。お供えは強飯と重ね餅と油揚げで、魚は供えない。油揚げも昔はあげたがいまはあげない。その他いろいろな供え物があがるが、あがったお供えはH家でもらう。H家でもたくさんの強飯を炊いて、参る人たちにその強飯や菓子を配る。願かけをしてカサッカケの病気が治った子供はオネガイバタシ(お願い果たし)といって松かさを年齢の数だけあげた。「一年もたつと松かさがいっぱいになった」といい、H家では風呂の燃料などに利用したという。現在の社殿は十数年前に建てたものであるが、古い社殿にあった杉の板には寄付をした近郷の人たちの名前がたくさん書かれていたという。また、昔はこの稲荷の初午のとき、富士山三宝院の版木で作った不動の紙札も配っていたという。

このような個人の家でまつりはじめた神が、そのご利益が顕著であると信じられ、その噂が広まることによって多くの参拝者を集めていくという現象は、市域の信仰の特徴の一つとして注意しておいてよいであろう。

第二節　神社と寺院

(一)　神社と小祠の祭り

重層する神々

市域の各地区には、それぞれ神社がまつられている。大きな神社もあれば、小さな神社もある。由緒の古いことを言い伝えている神社もあれば、新しい創建だという神社もある。一般に市域では地域の中心的な神社をウジガミ(氏神)と呼び、他のさまざまの神社と区別している。しかし、多くの地域では、氏神は一社ではなく、大字とか江戸時代の支配単位でまつる氏神、その内部のモヨリや地区でまつる氏神が重層的に存在している。

そこで、市域のそれぞれの神社についてその神社をまつっている地区を基準として整理してみると、須山(すやま)のように一つの地区で浅間神社をまつり、さらにその内の小さなモヨリ(最寄)とかクミ(組)などを単位として神明神社や十二(じゅうに)神社をまつっているところと、下和田(しもわだ)、今里(いまざと)、金沢(かねさわ)などのように一つの地区で一つの神社をまつっているところがあることがわかる。

1　葛　山

葛山の神々

葛山は江戸時代には一つの支配単位として把握された石高四百石余りの村であった。現在では大字葛山で一つの行政上の単位となっている。そして、その内部には人々の生活上の五つのまとまりがあり、

まつる地区		まつる神	祭日
葛山全体		浅間神社 タケノカミナリサン	4月3日(もとは15日)　10月15日 7月20日
本村（上城・中村・下条の三つのモヨリ）		天王社 八幡神社 山の神	7月14日 9月10日 1月17日(4月，10月，12月の17日)
モヨリ	中里	大六天神社	7月15日
	田場沢	山の神	1月17日(4月，10月，12月の17日)
	上城	水神	4月1日
	中村	ななしし	
	下条	ななしし	

図表4-3　葛山でまつる神

それはモヨリと呼ばれている。このモヨリは区とも呼ばれており、生活上の単位であるモヨリは同時に行政上の単位である区となっている。上城、中村、下条、中里、田場沢の五つのモヨリである。

この葛山では、全戸でまつっている神社が二社ある。一社は中里にまつられている葛山の氏神の浅間神社であり、もう一つは愛鷹山の八合目の高山にまつられているいわゆるタケノカミナリサン(嶽の雷さん)である。その他、地区ごとにまつっている神社や小祠を整理すると図表4-3に見るとおりである。

上城・中村・下条はそれぞれ別々のモヨリであるが、三つがまとまって本村と呼ばれている。そしてこの本村を単位として天王や八幡などをまつっている。中里、田場沢はそれぞれ一つのモヨリで大六天神社や山の神をまつっている。

それぞれのまつり方については次のとおりである。

浅間神社

浅間神社は中里にあるが、中里の家々だけでまつっているのではなく、葛山全体の氏神である。その立地上の特徴として指摘できるのは社殿の後方に富士山をのぞむ立地となっている点である。

祭神は木花咲耶姫命をまつるといい富士吉田市の浅間神社と同じである。

祭りと氏子の組織については以下のとおりである。神主は地元中里の伊藤氏がつとめている。宮世話人が、上城・中村・下条・中里・田場沢の五つのモヨ

リから一人ずつ選出されており、その五人を中心として神主との相談のもとに祭りが運営されている。

祭礼の世話は当番制で、中里→田場沢→上城→中村→下条の順で、当番の引き継ぎは秋祭りの後で行う。春の本祭が四月三日（もとは四月一五日）、秋の臨時祭が一〇月一五日である。

春の本祭はもとは四月一五日であったが、仕事の都合と年度切替えの都合とにより四月三日に変えられたという。祭りにはその年の当番と次の年の当番のモヨリの人たちが参加する。注連縄を新しくし神主による祝詞奏上が行われる。神事のあとで直会の飲食が行われる。昔は、当番のモヨリの家々で餅をついて供え、氏子の家々に配ったという。祭りの費用は今でも当番のモヨリの家々から集めている。余興として、昔は夜に芝居や浪花節などが行われた。春は芝居や浪花節、秋は映画の上映が多かったという。春の芝居や浪花節は芸人をよそから招いていたが、御宿の八幡神社の祭りのときに刃傷沙汰があったことがあり、それ以後自粛ということになり、その後は昼間に小学校と中学校の校庭を借りて親睦のソフトボール大会が行われるようになった。

写真4－7　浅間神社（葛山）

正月は、大晦日から元旦へかけてまだ暗い午前一時頃に初詣でが盛んに行われている。米のおひねりと賽銭を用意していく。当番のモヨリが神社の世話をし、おみくじも用意する。最近では甘酒も振る舞われるよ

写真4-8　タケノカミナリサン（葛山）

うになった。女子高校生のアルバイトで巫女も出る。

ヒャクヒトエといって、新生児の生後一〇一日目には産婦と姑が子供を抱いて参る。米、塩、赤飯、賽銭などを持っていって供える。このとき神社の石段に子供をいったん寝かせてくる。

タケノカミナリサン　これは雨乞いの神で、葛山の氏神ではないが、葛山全体でまつっているものである。愛鷹山の八合目あたりのところに石の祠でまつってある。昔は日照りが続いて雨が降らず農作物への被害が心配される状態となるとよく雨乞いをした。

普通はフジバタノカミナリサンへ参ったが、よほどのときにはタケノカミナリサンへ参った。フジバタノカミナリサンは女で、タケノカミナリサンは男だという。タケノカミナリサンへは葛山の五つのモヨリから必ず一戸に一人ずつ出て泊まりがけで参った。愛鷹山の八合目あたりのところにある石の祠に、蓑笠、アメゴザ(雨莫座)、お神酒などを持って参り、雷神宮ののぼりを立て、一晩中火を燃やしながら、二手に分かれて、一方のグループが「雨降らせたーまえなー」と唱えると、もう一方のグループが「雷さまへの立願(りゅうがん)だー」と唱え、これを繰り返す。少し休んでは何度も唱えた。一九五〇年代頃までよくやったという。日照りが続いてさすがに日数もたっているのでこうする頃にはよく雨が降ったものだという。

このカミナリサンの祭りは七月二〇日で、下条の四つ辻のところで行う。のぼりを立てて飲み食いをし、かつて一九五〇年代頃は草相撲などもやった。祭りの世話は下条がするが、愛鷹山のタケノカミナリサンの石の祠への道の草刈り当番は、氏神の浅間神社の当番と同じく右回りで、中里→田場沢→上城→中村→下条の順につとめる。

本村でまつる神　本村(上城・中村・下条)でまつる神には、天王、八幡、山の神がある。天王は上城の大久保川沿いの場所にまつられており、八幡は北の通称上城通りといわれる道に沿っている小川を渡った山の中にまつられている。山の神は愛鷹山へのぼる山の中にまつられている。

天王の世話は、世襲的に決まっているカギトリ(鍵取り)と呼ばれる家が当たっている。カギトリの家では神社の鍵を持っており、祭りの世話をしたり社殿の掃除をしたりする。祭日は七月一四日で、カギトリの家では赤飯を作って参拝の人たちに分ける。昔は直会の飲み食いはカギトリの家でやったが、最近は一三日の夜に神社で行っている。昔は青年たちの草相撲をやって寄付で集まった景品を出したという。

八幡の世話も天王と同様にカギトリと呼ばれる家が当たっている。祭日は九月一〇日で、最近は一〇日前後の日曜日にしている。費用は上城・中村・下条の各戸から集める。お供えは、鏡餅にお神酒、それに百姓のものとして二升の米、その他、季節の野菜や果物にスルメなどである。天王と同様にゴクウ(御供)といって赤飯を二升ばかり作って参拝者に分ける。昔は草相撲をやったが、最近では運動会をやっている。寄付された品物を景品として出している。

上城から愛鷹山へのぼる山の中に山の神がまつられている。これもカギトリと呼ばれる家がある。カギトリはもと山の神の祠の前にその屋敷があったとも言い伝えており、現在もカギトリが中心となって世話をしている。祭日は一月一七日で昔は早朝からおおぜい連れ立って握り飯や豆腐、こんにゃく、酒などを持って参り夕方まで遊んだという。

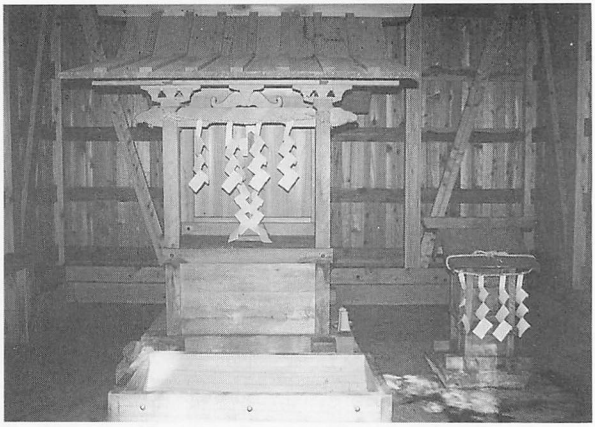


写真4－9　山の神と龍爪神社（葛山）

サイコロ博打で遊んだり、土手に的を作って鉄砲を撃ったりした。山の神は狩猟の神だともいった。祭りは一月だけだが四月、一〇月、一二月と一年に四回やるものだともいう。

各モヨリでまつる神

中里では大六天神社をまつっている。カギトリと呼ばれる家は特にない。中里はもと上、中、下の三つのクミに分かれており、祭りの当番は順番につとめた。現在は一組から八組までに分かれており二組ずつ一緒に当番をつとめている。祭日は七月一五日で、最近はそれに近い日曜日をあてている。神主を招いて神事を行ったあと、公民館で飲み食いをする。昔は青年たちの草相撲をやって寄付で集まった景品を出したという。

田場沢でまつる神には山の神がある。集落の西方の山の中にまつられている。もとは特定の家でまつっていたものというが、いつの頃からかモヨリのものとなったという。現在では当番の家で順番に祭りの世話をしている。祭日は一月一七日であるが、四月、一〇月、一二月と一年に四回やるものだともいう。

本村と呼ばれる上城、中村、下条では、三つのモヨリが一緒になって天王社と八幡社をまつっているが、上城だけでまつっているのが水神である。なお中村、下条にはそのモヨリだけでまつっている神はない。水神は上城の北の小川の近くにまつられている。近くの家がカギトリをしている。この場所はもとの水源の一つで、上城ではここと市川甲

子良家の裏の地点からしか水が出なかったという。祭日は四月一日でお神酒などをあげて上城の家々でまつっている。

以上、この葛山の事例で見ると、葛山全体でまつる氏神浅間神社が一社あり、それ以外にモヨリごとにまつる神があり、それは、本村(上城、中村、下条の三つのモヨリがひとまとまりになっている)で八幡社と天王社と山の神、中里で大六天社、田場沢で山の神となっている。そして、モヨリごとにまつる神というのは中里の大六天社以外はみんなそれをまつるうえで中心的な役割を世襲的につとめてきているカギトリの家があるという点が特徴的である。山の神の場合、本村でも田場沢でもカギトリの家が決まっているが、田場沢の例では、もとはカギトリの家が単独でまつっていたものが後にモヨリでまつるようになったと言い伝えている。モヨリごとにまつっている神の場合、このようにもと一軒でまつっていた神が後にモヨリでまつるようになった例がほかにも少なくないのではないかと考えられる。

写真4－10　水　神（葛山）

2　深　良

二つの深良

深良という地名は二つの意味で使用される。一つは近世における深良村の意味であり、それを継承した大字深良のことである。他の一つは深良村と北隣の岩波村とが一八八九(明治二二)年に合併してできた明治の町村制の深良村の意味である。この場合

は単に深良というのではなく、深良地区と表現する。深良村は一五〇〇石余の大きな村で、岩波村は八〇石に満たない小さな村であった。

後者の深良地区全体でまつる氏神は存在しない。小さい村であった岩波村にあたる現在の大字岩波には氏神駒形八幡宮が存在するが、大きな村であった深良村にあたる範囲の全体でまつる氏神は存在しない。

この近世の深良村にあたる地域では現在四社の氏神がまつられている。その四社は以下のとおりである。

駒形神社　原・須釜でまつる
神明神社　上丹でまつる
赤子神社　上原・新田でまつる
深良神社　和市・南堀・町震・切久保・遠道原でまつる

これは、深良が広大な範囲に広がるために、一つの氏神を共有するのにふさわしくなかったためかと推定される。これら四社に岩波でまつる氏神駒形八幡宮を加えた計五社で神社総代会深良分会が組織されており、氏子総代の代表として、会長が一名選ばれている。この神社総代会深良分会の存在は、深良地区が一つの氏神を共有できないほどに広大でありながらもやはり深良地区としてのまとまりを氏神祭祀の上でも維持しようとする力が働いていることを表すものと見ることができる。

一方、この氏神の五社とは別に、いくつかのモヨリでまつる神社や一つのモヨリでまつる神社もある。図表4－4がそれを整理してみたものである。

これらの各モヨリでまつる神のうち、氏神をまつる地区のつながりとは異なる地区のつながりでまつっている神社

まつる地区		まつる神	祭日	備考
原・須釜 上丹 上原・新田 和市・南堀 町震・切久保・遠道原		駒形神社 神明神社 赤子神社 深良神社	10月10日大祭 10月16日大祭 10月10日大祭 10月16日大祭	
モヨリ	原・須釜・上丹・上原	秋葉神社(原)	10月1日	
	原	山の神	1月17日　10月17日	
	新田	山の神	1月17日	
		耳石神社	10月15日	
		稲荷社		
	上原・切久保・遠道原	山の神(上原)	1月17日　10月17日	もとは特定の家のもの、同姓の別の家が代々カギトリをつとめている。
	和田・市場	山の神	1月17日　7月17日 10月17日	
	町田	山の神	1月17日　7月17日 10月17日	
	南堀	八幡神社	9月15日	もとの氏神
		山の神	1月17日　2月17日 10月17日	山を持っている旧戸でまつる。

図表4－4　深良でまつる神

の例として、原・須釜・上丹・上原でまつっている秋葉神社が注意される。これは氏神をまつる地区の範囲よりも広い。それは、この秋葉神社が、それぞれの氏神の創建とは別の時代に、別の契機でまつられるようになったためではないかと考えられる。つまり、火伏せの神として知られるこの秋葉神社は、原・須釜の氏神駒形神社、上丹の氏神神明神社、上原の氏神赤子神社とは別に、おそらくそれらの創建よりも後の時代に、原・須釜・上丹・上原の各地区の人たちによってこの地に勧請（かんじょう）されたものと推定される。

また、山の神はモヨリごとにまつられている傾向が強いが、集落から山に入るあたりにまつられていることが多い。山を所有する家でまつるという例とモヨリの全戸でまつるという例とがある。もともと個人でまつっていたものをモヨリでまつるようになったという例もある。

写真4－11　赤子神社（深良）

氏神については、以下のとおりである。

赤子神社

上原と新田の氏神である。深良神社が天田下（あまだした）の氏神であるのに対しこの赤子神社が天田上（あまだうえ）の氏神のように思われているが、実際はそうではなく赤子神社は上原と新田の氏神である。氏子総代は上原二人、新田三人で、計五人選出されている。祭礼は上原と新田とで一年交代で担当する。たとえば上原が当番の年には上原の五つの組から一人ずつ祭典委員が出て催し物や費用などについて相談する。

祭礼はもと一月一〇日、八月一〇日、一〇月一〇日の三回あったが、一〇月一〇日が大祭で、二〇年くらい前からこの大祭だけを行うようになった。その二〇年くらい前までは祭典委員というのはなく、区が神社費として一戸あたり一〇円から一〇〇円くらい集め、区長を中心としてその使いみちを決めていた。現在では祭典費として一戸あたり一〇〇〇円ずつ集め、祭典委員がその使いみちを決めて花火や子供の金魚すくい、綿あめなどの代金にあてている。昔は、子供相撲、芝居、映画、ソフトボール大会、花火などをして賑やかだった。現在はテレビなどの娯楽も多いために芝居や映画などはせず、花火大会を行う程度である。子供神輿は一〇年以上も前から行っている。最初にはじめたのは上原で新田がそれに続き、最近では上原団地も行うようになった。家々をまわり賽銭をもらっている。

この赤子神社には神主や氏子総代とは別に、世襲のカギトリの家が決まっている。しかし現在ではカギトリが行う

役割分担というのは特にない。

また、この赤子神社には次のような言い伝えがある。昔、毎夜、この地に光が出て、道行く人が不思議に思って近づいてみると、二体の神の像が見つかった。その後、永禄年中(一五五八～一五七〇)に甲斐の武田信玄が攻めてきたときに、そのご神体がなくなったが、一七七七(安永六)年に再び見つかったという。この赤子神社の神は、手力男命と高照先姫命という男女二体の神で、一社に二体というのはめずらしいという。力が強く良い子を育てようという意味らしいといわれている。

深良神社　町田・震橋(町震)、南堀、和田・市場(和市)、切久保、遠道原の氏神である。氏子総代は町震から二名、南堀と和市から二名、切久保と遠道原から二名、計六名が選出されている。

神社のことを世話する当番の地区も決められており、それを当番区という。それは氏子総代の選出母体とは異なり、町震と南堀とで一区、和市と切久保とで一区、遠道原が単独で一区で、その三区に分かれて一年ずつ交代で当番をつとめている。三年に一度ずつ当番にあたり、年間の祭礼に奉仕する。当番区の仕事は以下のとおりである。

一月　一日　歳旦祭(さいたんさい)・初詣で　当番区で鏡餅のお供え二重ね、赤飯二升、お神酒一升を用意する。前夜の一二時から準備にはいる。元日の午前七時から祭典がはじまり、神主が祝詞をあげる。祭典が終わると氏子総代六人と神主、区長、当番区の人たちで直会をする。

二月一五日　祈念祭　餅のお供え二重ね、赤飯一升、お神酒一升を用意する。

七月一六日　月次祭　餅のお供え二重ね、赤飯一升、お神酒一升を用意する。

九月　一日　ヨシダサンの祭り　赤飯一升を用意する。

写真4－12　深良神社（深良）

一〇月一六日　例大祭　秋祭り　餅のお供え四重ね、赤飯二升、お神酒一升を用意する。戦前は花火をあげ旅芝居の一座を呼んだり、映画や青年相撲をやったりして賑やかだったという。現在は子供神輿が当番の地区をまわっている。

一一月二三日　新穀感謝祭

一二月二五日　大祓祭　大掃除　大掃除をし、古い札を焼く。

最近では、舞台団地　柳端団地も祭礼に参加するようになってきている。

なお、この深良神社は、天田下の各地にあった神社を明治の頃に集めて合祀したものであるという。もとこの深良神社のある場所には神明宮という神社があり、そこへ南堀の八幡宮、浅間社、天神社を合祀したのだと言い伝えており、境内の石碑にもその旨が書かれている。

（正面）「邨社深良神社記

明治三十有九年丙午八月官定神社併
合之制当時遷本邨南堀鎮座之三社合
祀於邨社神明宮三社者則八幡宮浅間
社及天神社也卯十有三年庚戌十月請

官築殿宇設拝殿奉財産若干以為社有
永供祭祀之資於此乎神社合祀之事全
成大正二年癸丑二月奉称邨社深良神
社以其歳五月二日列神饌幣帛供進之
神社嗚呼邨民諸氏之労可謂大矣詩曰
以享以祀以介景福請余辞辞曰
爰相神地　以遷三祠　敬虔不懈　祭
祀以時　神霊赫赫　稜威無私　挙邨
信奉　永享其禧
大正二年九月
　　従五位勲六等矢田部盛次撰」

（裏面）「駿東郡深良邨深良
邨社深良神社
氏子総代　大庭政次郎
　　井沢網次郎
　　勝又菊次郎
　　大庭小次郎

写真４－13　「邨社深良神社記」
（深良・深良神社）

横山乙吉
大庭義真
監督者　松井謙治
社掌　清水寛良
氏子中
大正弐年十月建之
石脇
志村亀吉刻」

この碑文には、一九〇六(明治三九)年の政府からの神社合祀の指示により一九一〇(明治四三)年に神社合祀を実施し、一九一三(大正二)年に完了して、深良神社と名付けたと記してある。一九〇六年の神社合祀は政府の政策として全国的に実施されたもので、静岡県内でも全域で強力に推進された。市域のどの地区でも、それまであった神社が統合された。その際に、中心となる有力な神社があった場合は、その社名が継続して用いられたが、そうでない場合は新たにその地域の名前を社名に採用することが行われた。深良神社は後者の例と言える。

南堀の八幡神社

南堀の氏神は神社合祀によって深良神社となっているが、それとは別に現在でも地元に八幡神社がある。神社合祀によって八幡宮、浅間社、天神社は深良神社に移され、今も浅間社、天神社は深良神社にある小祠にまつられているが、八幡宮だけはもとの南堀の社殿に戻してまつっている。このいきさつについて、一九一四(大正三)年生まれのAさんが子供の頃に年寄りから聞いたという言い伝えがある。

一九〇六(明治三九)年八月、八幡社の御霊代(みたましろ)を深良神社に合祀するため、神輿に安置して夜中に南堀から担ぎ出した。ところが、南堀と町田との境の四反田付近で、どうしたことかこの御霊代が神輿から落ちてしまった。夜中のことで、その後御霊代を深良神社に安置できたのか、それとも南堀に帰ってしまったのかわからないが、そのとき神輿を担いだ人たちはまもなく病気になって死んでしまったという。

なお、もと南堀には八幡社、浅間社、天神社、社口(しゃくち)社、山神社、天白(てんぱく)などがあったという。天白の木札に「南堀町田和田市場遠道原」とあるところからすると、天白は南堀だけでなく広い範囲でまつられていたものと思われる。

以上、氏神として、天田上の各地区と赤子神社、天田下の各地区と深良神社について見てみると、天田上の氏神は明治の神社合祀を行わなかった例、天田下の氏神はそれを行った例とみることができる。そして、神社合祀を行った天田下でも南堀の八幡神社のようにその地区の氏神としてまつり続けられようとする力が働いているという点も注意される。

3　茶　畑

多くの神仏をまつる茶畑

茶畑は近世の茶畑村にあたり、一六七七(延宝五)年の村明細帳には、中尾、瀧頭、中丸、茶畑という組、平松新田、それに、みの下、市ノ瀬の居村が記されている。現在の区分は中丸、天理、滝頭、本茶、道上、峰下、市ノ瀬からなるが、氏神の浅間神社の祭礼の役割は、中丸上、中丸中、中丸下、天理町、道上、滝頭、本茶、峰下・市ノ瀬、和泉(いずみ)の九地区で分担している。茶畑の氏神は浅間神社一社で、ほかにはモヨリごとにまつる神がある。本茶でまつっている金比羅神社、峰下でまつっている駒形神社である。延宝の村明細帳には富士浅間以下一五の神仏が挙げられている。それは八幡二社、十二天(じゅうにてん)、神明、大日堂、駒方、不動堂、天神、金山、舎護(しゃご)神、

まつる地区		まつる神	祭　　日
茶畑全体		浅間神社	10月15日 (合社祭8月25日)
モヨリ	本茶	金比羅神社	1月10日
	上道	十二神社	4月12日　7月12日 10月12日
	峰下	駒形神社	(浅間神社合社祭)
	市ノ瀬	山の神	1月17日

図表4-5　茶畑でまつる神

それに山神四社で、いずれも「村始より御座候様ニ申伝候」と記されている。これらが現在のどの神社に該当するかは必ずしも明らかではないが、モヨリ単位にまつられていたものと思われる。

浅間神社

茶畑の氏神である。中丸上、中丸中、中丸下、天理町、道上、滝頭、本茶、峰下・市ノ瀬、和泉の九地区から一人ずつ氏子総代が選ばれ、その中から総代会長一人が互選で決められている。氏子総代の任期は三年である。なお、鈴原、県営住宅、青葉台は新しい住宅地で浅間神社の氏子会には加入していない。

もともと、この浅間神社は現在の裾野東中学校の南のモトミヤ(元宮)というところにあったのが、安政の大地震により壊れたため現在地へ移建されたと言い伝えている。神社の財産としては茶畑山に山林二町歩がある。神社費は一戸あたり百円程度を各区で集め大区長がとりまとめて神社の会計係へ納めている。神社の修繕や行事の費用などに使う。

神社の祭礼は以下のとおりであるが、これらの祭礼の執行のために、氏子総代とは別に各区から数名ずつの祭典委員が選ばれている。

一月　一日　元旦祭　大晦日の一二月三一日大祓式を行い、夜の一二時つまり元日の零時から氏子の人たちの初詣でがはじまる。氏子会の役員は前日から神社に詰めていて参拝者に甘酒や酒のサービスなどをする。

二月一一日　建国祭

三月　下旬　大区の総会　会計報告

四月　三日　一〇年に一回、吉田神社の祭り

六月三〇日　夏越の祓

八月二五日　合社祭　明治の初めに、それまで中丸、天理、滝頭、本茶、道上、峰下、市ノ瀬の各地区でまつられていた小祠の神々を集めて浅間神社に合祀したことによりはじめられた祭りだという。合祀した神々をゴーシャサン（合社さん）としてまつっている。この祭りの呼び物は子供相撲で、現在も行われているが、特に戦前は盛んで、よその地区からも参加の子供が集まったという。

一〇月一五日　例大祭　午前一〇時から一時間ばかり神事がある。参加者は神職三名、氏子総代、各区長、祭典委員長、裾野市神社総代会長、市議会議員代表、民生委員、老人会代表、農業委員会代表、入田川（いりだがわ）水域水利組合代表、一般代表などである。献饌は、洗米、酒、二段重ねの餅、腹合わせのタイ、ダイコン、キャベツなどの野菜、リンゴやミカンなどの果物などである。そして、これとは別に赤飯一斗八升を炊き参拝者に一握りずつ配る。神事が終わると社務所で直会がある。余興としては、子供神輿を出したり、ソフトボール大会、ゲートボール大会、カラオケ大会などを開催して人集めをしている。余興は青年団が中心にやってきた。

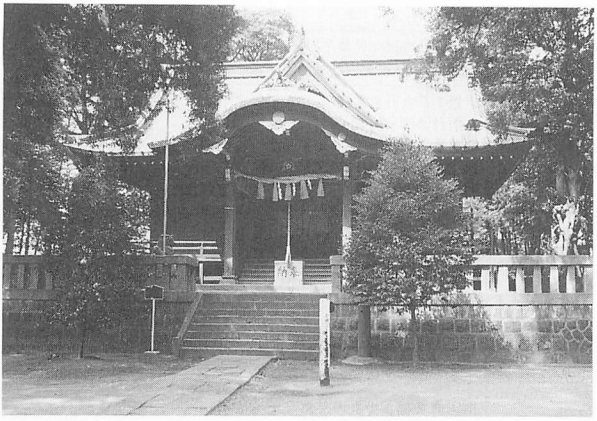


写真4－14　浅間神社（茶畑滝頭）

区	役割、分担	作業内容	予算
中丸上	祝宴、接待	富岳台幼稚園園児菓子、雑用 (書類コピー、案内状発送等)	菓子 16,500円
中丸中	祝宴関係等 赤飯、料理、弁当、酒、ジュース等 つまみ等購入し用意する (注)　当日の人数を確認して注文する	赤飯1斗8升を注文 赤飯台2個を前日14日に給食屋に届ける 祭典委員　　招待者 14日昼食、15日　15日(祝宴用) 弁当　500円×26　弁当　550円×50 ビール　ジュース　酒　2合×50本 直会　16日 弁当　500円×28　弁当　500円×24 酒　10本　酒　4本 ビール　48本　ビール　20本 ジュース　24本　ジュース、つまみ等	赤飯1斗8升 36,000円 弁当 160,000円 酒、つまみ等 60,000円
中丸下	花代　掲示　演芸	花代掲示係は、氏子総代と連絡して、支度をする	ベニヤ板、模造紙、半紙　2,000円
天理町	献供物	供え餅2個、中丸の芹沢茂氏へ依頼(事前に打合わせ必要) 白米1升、塩、酒1升、魚、ダイコン3本、ニンジン8本、リンゴ8個、ミカン20個、キャベツ 榊3尺2本(内1本10日使用) 玉串25本	お供え餅 10,000円 お供え物 13,000円
和泉区	受付　来賓接待	来賓接待について、関係区と打ち合わせる	
道上区	シメ縄並びにおしめり 来賓接待	シメ縄は、清水一雄氏に依頼 おしめりは、宮司に依頼 シメ縄毛ばむしり	シメ縄制作、御礼 50,000円
滝頭区	幟 花棒 献燈 花火 来賓受付	幟、献燈については、氏子総代と打ち合わせて支度 花火、注文届け出　13日昼10発　14日夕方5発　15日昼30発　夜20発 受付は和泉区と打ち合わせる　来賓受付リボン50枚用意する	献燈障子紙 5,000円
本茶区	名簿記載	福引は昼間のみ、商品は前年度を参考に注文 抽選、案内状印刷配布を区長会に依頼 抽選器具2台用意、幸運抽選は夜間に実施(抽選器は商工会より借りる) 赤飯用アルミホイル500枚	花火　65発 155,200円
峰下　市の瀬	福引賞品　幸運抽選		賞品　200,000円 抽選　285,000円

全区協力事項
1　余興、小林ひさしショー
2　祭典費、特別寄付金受領と礼状
3　許認可、申請書類、発進文書
(イ)　花火使用届け
(ロ)　道路使用届け
(ハ)　交通指導員派遣申請
(ニ)　祭典案内回覧(全区)
(ホ)　招待者案内状と礼状(配付)

幸運抽選		
1等	こしひかり5kg	5本×4,000円
2等	米久ハム	10本×3,000円
3等	醤油(大)	50本×1,500円
4等	洗剤(1.8kg)	100本×700円
5等	醤油(小)	300本×300円
		465本 285,000円

図表4－6　平成8年度茶畑浅間神社祭典役割分担表
(茶畑浅間神社祭典委員会の資料による)

昔は芝居や映画などをやった。屋台もたくさん出ていた。今も屋台は少しだが出ている。子供神輿は一〇年くらい前から出すようになったが、同じ頃から福引きもはじめた。

一一月二三日　新穀感謝祭

山の神　茶畑の在来戸のうち茶畑山の山林の権利者である二一一戸でまつっている。茶畑山は本茶から見て県営住宅の方角のずっと奥の方で、山の神はその山の中にまつられている。茶畑山は戦後、山の上の方を藤田観光に売却し、下の方を茶畑のモヨリごとに分割した。そのときの二一一戸でさらにモヨリの山を分けたが、山の神のまわりの土地五反ほどと浅間神社の神社持ちの山とはいまも二一一戸の共有となっている。

山の神の祭日は一月一七日と九月一七日である。各モヨリから総代が一名ずつ出て祭りの世話をする。ミチツクリ(道作り)をしてから、山の神の前で浅間神社の神主を呼びお祓いをしてもらう。そのあと供えた赤飯を食べ酒を飲んで山を下りる。オフルマイはモヨリごとにする。

金比羅神社　現在では本茶でまつっているが、もともとは柏木屋敷の柏木家でまつっていた。一九〇八(明治四一)年に本茶のモヨリが譲り受けてまつるようになったものといわれている。本茶には東組、中組、上組の三つの組があり、順番に祭りの当番に当たっている。

祭りは一月一〇日で、当番に当たった組では一戸当たり夫婦二人ずつ出て女性は料理を作るなどする。費用は寄付や区の会費などでまかない、飲食は神社に集まってする。太鼓を叩いて子供たちを呼び集め菓子や果物を配る。

五月の連休には、神社の下のプールに魚を放して釣り大会などを催す。

夏祭りといって盆には櫓(やぐら)を組んで盆踊りをやるようになった。当番のクミ(組)でおでんやラムネなどを売る屋台を

出す。寄付も集まるのでその寄付者の名前も貼り出す。

この五月の連休の釣り大会と、夏祭りの盆踊りとは最近になってはじめた行事だが、昔から盆のならびには風祭りをやっていた。

本茶では、盆は八月一日で、オショウリョウサン(お精霊さん)を七月三一日に迎えて八月三日に送るが、八月四日に金比羅神社に集まって神主も呼んで風祭りを行ってきた。風の被害がないように、そして五穀豊穣を祈る祭りで、現在では公民館でやるようになっている。

4　富　沢

一集落一ムラの富沢

大字富沢(とみざわ)は近世の富沢村にあたる。深良や茶畑も同様に近世の村にあたるものである。しかし、深良や茶畑がその中にいくつかのモヨリと呼ばれる集落を含んでおり、それらの集合として成り立っているのに対し、富沢はただ一つの集落から成り立っている。富沢にもモヨリと呼ばれている単位がある。上モヨリ、中モヨリ、下モヨリの三つである。しかし、それは深良や茶畑でいうモヨリとは異なり、同じモヨリと呼ばれていても、深良や茶畑のモヨリのさらに内部に見られるクミ(組)と呼ばれている小さい単位と同じものである。富沢のモヨリは深良や茶畑のクミと同じものとみてよい。

現在の富沢は一四班からなっている。下モヨリが一〜三班、中モヨリが四〜六班、上モヨリが七、八班で、この一〜八班がいわゆるキュウコ(旧戸)からなっており、九班〜一七班は新しいいわゆるシンコ(新戸)からなっている。

なお、一五班から一七班はかつて南町として別の行政区となっていた地域で、そこは広報のみのつきあいで村の行

事にはかかわっていない。

富沢でまつる氏神は愛鷹神社である。その祭礼の当番をつとめるのは一二班までである。

まつる地区		まつる神	祭日	備考
富沢全体		愛鷹神社	10月の未の日	
モヨリ	上モヨリ	山の神	1月17日　9月17日	もとは特定の家のもの
	中モヨリ	山の神	1月16日　9月16日	もとは特定の家のもの
	下モヨリ	山の神	1月17日	もとは特定の家のもの

図表4-7　富沢でまつる神

写真4-15　愛鷹神社（富沢）

愛鷹神社と山の神

集落の中央部に鎮座する。境内の改築記念碑によると、一六五八（明暦四）年の建立で一九六八（昭和四三）年に改築したとある。氏子は一班から一二班までで一三班から一七班の家は加入していない。氏子総代はカミ（上モヨリ、中モヨリ）から三名、シモ（下モヨリ）から三名が選ばれて宮の世話をしている。一年ごとにカミとシモとで当番に当たっている。神主は佐野の八幡宮の神主徳田修次氏が兼務している。

例大祭は、一〇月の未の日で「ヒツジ（未）マツリ」ともいわれ、未の日が二回あるときは初めの未の日、三回あるときは中の未の日に行ってきた。最近では第一日曜日にすることにした。

祭礼当番は、区長を中心にカミ（上モヨリ、中モヨリ）とシモ（下モヨリ）が毎年交代でつとめる。当番に当たると九月下旬に全員が集まり

喪中の家を除いてくじ引きで役割を決める。一九六九(昭和四四)、七〇(昭和四五)年頃まではオコモリ(お籠り)も行っていたという。

祭礼当日は、午前一〇時頃から神事が行われ、そのあと直会がある。供物は鏡餅、洗米、酒、魚、昆布、塩、水、野菜、果物、菓子などをあげる。費用は当番に当たった地区の家々で負担する。夕方から婦人会が中心となって屋台を出し、焼きそばやおでんを売ったり、おもちゃを売ったりする。花火をあげたり、カラオケをやったり、賞品のくじ引きをやったりする。富沢の古くからの家の子供神輿と、南町の団地の子供会の神輿が各地区をまわり、祝儀をもらっている。

元旦祭は、正月一日で朝一〇時頃から筆頭総代の服部芳太郎氏を中心に参詣者全員で祝詞をあげる。氏子の者は初詣でにやってくる。

上、中、下の各モヨリで山の神をそれぞれまつっているが、いずれも集落から山の方へと入っていく地点にまつっている点、もともと山林の所有者である特定の家でまつっていたものが、後にモヨリの家々で順番に当番をつとめてまつるようになったという点、とが共通している。

5　その他の地区

公文名

公文名(くもみょう)の氏神は二つに分かれている。一区、二区それに三区の一部は稲荷神社を氏神にしている。この地区はもとの稲荷村で、地籍上も大字稲荷となっている。もとからの家数は十戸ほどで、家がほとんどなかったという。いつ頃から公文名に入ったのか明らかでないが、すでに近世にも二つの村は一括併記されることが多か

った。地域組織としては現在は公文名に入っている。稲荷神社の祭日は三月の彼岸の中日である。個々の家でも屋敷内に稲荷をまつっているが、これも多くの家がこの日にあわせて祭っている。

もともとの公文名は鹿島神社を氏神としている。その範囲は現在の三区と四区である。また新しい公文名団地が五区となっているが、ここも氏子として当番を担当している。以前は久根(くね)の一部も鹿島神社の氏子となっていた。氏子となっていたのは久根のモヨリの一つである久根内(くねうち)である。現在久根内の家数は一三戸である。久根の氏神は八幡宮であるが、久根内は大正初年までは八幡神社の祭りにも関係していたことが記憶されている。明治末から大正初年にかけてはやり病があったときに、鹿島神社の祭りに久根内は参加しないこととした。ところが、久根内の中心人物が病気になり、死者も出た。そこで再び鹿島神社の祭礼に復帰したという。現在も鹿島神社の祭典に久根の区長ともう一人の計二人が参列する。鹿島神社の祭日は一〇月九日であるが、一九七〇(昭和四五)年前後から一〇月九日に近い日曜日に変更している。大区長が中心となって、それに各区の区長が協力して行い、担当の区が具体的な執行を担う。祭典は祭式に基づくもので、そのほかには子供神輿が出る程度であるという。

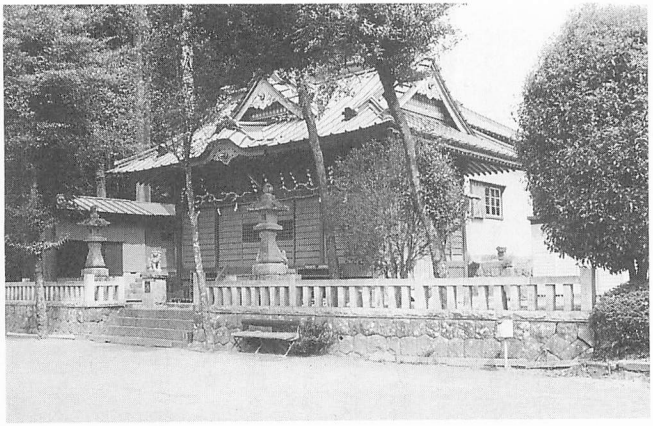


写真4－16　鹿島神社（公文名）

公文名の山の神は二つある。一つはオキノヤマノカミサンといい、こ

れは公文名の中モヨリ、下モヨリ、東モヨリでまつっており、三つのモヨリが交代で当番をつとめる。祭日は正月の一七日と一〇月の一七日である。もう一つの山の神はネノガミノヤマノカミといい、西モヨリと久根内でまつっている。

公文名の中モヨリの公民館には中に庚申塔をまつっている。公民館以前はドウ(堂)と呼んで、昔はここに青年が寝泊まりした。一九七〇年前後に現在の公民館に建て替えた。現在は庚申の祭りはないが、以前は七月に行っていた。そのときには芸能人を呼んで浪花節をやってもらったりした。

麦塚

麦塚の氏神は見目神社である。麦塚を流れる大場川は三嶋大社のミタラシの水となっている。それを守るために上流に見目神社を設けたという。見目神社は麦塚と伊豆佐野にあり、いずれも三嶋大社の末社である。この二社は男女の神で、伊豆佐野が女で、麦塚が男ではないかといわれている。見目神社には鳥居がない。昔鳥居を建てたことがあるが、建てて祝った翌日に倒れた。それについて次のような話が伝えられている。ここの祭神は六尺の大男で、ここを馬で通るときに鳥居が邪魔になるので倒したのだという。

伊豆島田

伊豆島田の氏神は熊野神社である。伊豆島田と堰原の共同の氏神で、祭礼も一年交代で行ってきた。熊野神社の位置は、かつては伊豆島田の集落の中心部にあったという。熊野神社にはミヤダ(宮田)が一反三畝ほどあり、青年団が耕作していた。そのためセイネンノタ(青年の田)とも呼ばれていた。第二次大戦後売却して、その代金で現在の熊野神社の社屋を建てた。この神社は和歌山の熊野神社のナガレ(流れ)だと聞いているという。神主は代々堰原のサカキヤ(榊屋)というエーナ(家名)の家でやっていたが、現在は正式の神主はいない。宮司は佐野の徳田氏がつとめている。熊野神社の氏子総代は四名で、伊豆島田二名、堰原二名である。任期二年で再任も認められ

ている。伊豆島田の氏子総代は比較的長期間やる傾向があり、堰原はよく交代するという。祭日は一〇月一五日であったが、二〇年ほど前から近くの土日に変更した。かつては屋台が一台あったが、後に二本松の若い衆に酒をつけて引き取ってもらったという。祭りには、堰原が当番長のときだけシャギリを行っていたが、最近は中断している。現在は宵祭りに、神社境内に舞台を作ってカラオケを行う。のぼりは現在立てないが、五〇年ほど前までは神社に一カ所のみ立てていた。神輿は昔はなかったが、子供会が盛んになってからタルミコシ(樽神輿)を作って担ぐようになった。現在では、一九八五(昭和六〇)年に作った本格的な子供神輿を使っている。

写真4-17　熊野神社（伊豆島田）

淡島(あわしま)明神は、ここで火事があったとき、焼けてしまわないように川へ投げ入れられた。そのとき首が落ちてなくなってしまったため、頭だけ新しく彫刻してすげ替えた。

以上、市域の氏神について、またモヨリごとにまつられている神々について見てみたところ、いくつかの傾向性のあることが判明した。

第一に、氏神は、市域では葛山や茶畑のように江戸時代の旧藩制村、明治以後の大字にあたるものを一つの単位として一社まつられているものが多い。しかし、深良のように広大な範囲にわたる村の場合にはその広い範囲で一社というのではなく、数社の氏神がまつられている。その場合、近隣のいくつかのモヨリが一緒になってそれぞれ氏神をまつって

いる。

第二に、明治の神社合祀により村内に点在していた小祠が氏神社へと集められた茶畑の例や、そのとき氏神までも合祀した南堀の例が見られたが、前者においてはそれにともない合社祭が行われるようになっている。南堀では形式的には神社合祀をしたものの今でももとの地に八幡神社をまつり続けている。氏神と地区の生活の結び付きの強さを物語る。

第三に、氏神の祭祀の特徴は、正月の初詣でと年取、秋の稲の収穫期における例大祭、新しく生まれた子供のヒャクヒトエ(百一日)の参拝などに示されているように、氏子の生命と稲作の守護にかかわるものであるという点である。

第四に、旧村・大字を祭祀の単位とする氏神だけでなく、より狭い範囲のモヨリを単位とする神々も必ずと言ってよいほどまつられている。その神々の性格はさまざまであるが、それらの中にはもともと特定の家が個人でまつっていたものを後になってモヨリでまつるようになったという例も少なくない。そしてそれをまつっていた家がカギトリとして残っている例もあれば、カギトリが必ずしもそのもとまつっていた家とは限らない場合とがある。

第五に、山の神は多くが集落から山に入る地点にまつられている。山を所有する家もしくは集団でまつっていたものが多く、現在ではモヨリでまつるようになったという例も少なくない。

(二)　寺と堂をめぐる信仰

寺院の分布

市域の各地区には、寺院や堂がある。仏教寺院は市域全体で一七カ寺である。市域の大字すなわち近世の村は二四であるから、一村あたり〇・七寺ということになり、寺院の数が意外に少ないことがわ

かる。その一七カ寺のうち浄土宗六カ寺、曹洞宗六カ寺とそれぞれが三分の一ずつを占め、浄土宗、曹洞宗以外はごくわずかで、時宗二、真宗二である。時宗の寺院があって天台、真言、それに日蓮の各宗が一カ寺もない(一九九五年現在)ことは、市域の一つの特色として注目してよいであろう。

これらの寺院のありかたや堂の存在などについて、いくつかの地区の例で見ておこう。

1　葛　山

仙年寺　葛山では、上城、中村、下条、中里、田場沢の五つのモヨリのほとんどの家、約二百戸が、仙年寺(せんねんじ)の檀家である。仙年寺の檀家はほかにも御宿に約五〇戸、上ケ田(あげた)約二〇戸、金沢約二〇戸ある。寺伝によれば、一四七九(文明一一)年七月一日、文蓮社隆誉上人光岡大和尚が開山となって建立されたと伝える。この隆誉上人光岡というのは、後に江戸の芝の増上寺(ぞうじょうじ)の第四世となった人物であるともいう。仙年寺は、もとは現在地ではなく上城からずっと愛鷹山中へ上っていった所にあったが、一三八四(元中元)年にこの地の領主葛山惟信が現在地に移したと伝える。宗旨はもと真言宗であったのを、葛山氏が浄土宗を信仰するようになったのでこの寺も浄土宗へと変わったという。それが一四七九(文明一一)年のことだという。これらはいずれも寺伝として言い伝えられているものであり、記録が残されているわけではない。

本堂には、中央に阿弥陀如来、左右に観音菩薩と勢至菩薩、さらに両脇に善導大師と法然上人をまつってある。檀家総代は現在二名が選ばれている。寺の住職が適任者を任命する。世襲ではないが実際は世襲に近いものになるものだという。

所　在	寺　号	宗　旨	開　　創	伝　　承
佐野	蓮光寺	時　宗	1278～88年の間(弘安年間)	善栄阿闍梨上人
佐野	法雲寺	真宗大谷派	1624(寛永元)年	釈賢海法師
茶畑	願生寺	時　宗	1356(延文元)年	岩秀和尚(呑海上人弟子)
公文名	光明寺	曹洞宗	1541(天文10)年	明綱英晨大和尚
麦塚	東光寺	曹洞宗		心庵運鉄大和尚
深良	松寿院	浄土宗	15世紀	相蓮社伝誉上人深碩大和尚
深良	西安寺	浄土宗	1492(明応元)年	大森氏憲が現在地へ
深良	文明寺	曹洞宗	1582(天正10)年	英参大和尚
深良	興禅寺	曹洞宗		揚天宗播大和尚
深良	総在寺	法華宗	1996(平成8)年	浦部諦善
千福	普名寺	曹洞宗	1481(文明13)年	安叟宗楞大和尚
葛山	仙年寺	浄土宗	1479(文明11)年	文蓮社隆誉上人光岡大和尚
御宿	荘園寺	浄土宗	1580(天正8)年	国蓮社覚誉良阿存秀上人
今里	浄土院	浄土宗	年不詳	不明
下和田	専修院	浄土宗	年不詳	単蓮社心誉無二上人
桃園	定輪寺	曹洞宗	1430(永享2)年	観之法印(曹洞宗としては)
水窪	長教寺	真宗大谷派	17世紀(寛永頃)	釈常念(俗名渡辺蔵人)

図表4－8　市内の寺院（1996年11月実施のアンケート調査回答をもとに作成）

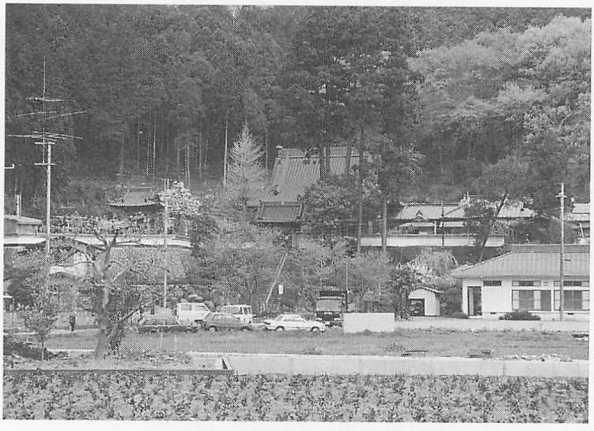


写真4－18　仙 年 寺（葛山）

主な寺の行事としては、八月一五日の施餓鬼法要、九月一五日の十五夜法要、旧暦二月一五日（新暦では三月）の葛山氏の法要がある。

また、念仏講の人たちが、この仙年寺で御詠歌や和讃を教わっている。上達して級をとりたい人は月に二、三回くらいやってきて練習をしている。

また、集落からはずっと離れたかつての街道筋に、寺の名はあるが現在無住で、観光名所にもなっている、富士峰修行者の行場だった施設がある。景ケ島の依京寺である。

景ケ島依京寺

下条から南へ下った佐野川の渓流の中に景ケ島という岩場があり、そこに依京寺という寺が建立されている。本尊は観世音菩薩で、弘法大師の開基と伝え、西行の手植えの松というのもある。現在は仙年寺の管理下にある。葛山では、観音の大祭が毎年四月四日と八月一六日に行われている。八月一六日は地獄の釜の蓋のあく日だといい、境内にある閻魔の口を封じるように団子を三つくわえさせてから一同で石仏群を一めぐりする。そして本堂で景ケ島和讃をあげる。世話は当番がする。田場沢→上城→中村→下条→中里の順に回っている。

この景ケ島依京寺について仙年寺にある縁起には次のように書かれている。

正観世音菩薩御縁起

押当山正観世音菩薩者弘法大師御作也。倩々大師御出席ヲ奉尋、人皇四十九代光仁天皇之御宇宝亀五年有御端生然ルニ延暦年中十八歳ノ御時於南都東大寺学顕密二教既ニ智道兼備聖者タリ。自其為御修行日本廻国於国々所々名所伽藍拝見シ或ハ向テ岩石則チ刻仏像給フ事雖数多シト別而相州箱根山ニ御入被成然ルニ此箱根山ハ狐独ノ地獄依為ニ賽ノ河原ノ地蔵菩薩二十五菩薩ヲ刻ミ亦　殿上ノ小地獄ニ分入給テ奪衣婆鬼ヲ刻ミ以岩石顕シ自其

1

2

写真４－19　景ヶ島依京寺の祭り（葛山）
1　景ヶ島和讃
2　閻魔の口封じ

当国当所此島ニ来給イ岩石ニ掛御腰暫ク有御休息末世為利益思召則此石宝殿正観世音菩薩刻給雖尓世人大師御作不知所本山第二代目日誉上人夢中蒙示現依之尊体ヲ奉ル拝光ノ明放テ照給フ誠ニ弘法大師御作無紛因朝暮尊敬シ奉畢ヌ。而送年月所ニ至徳年中此ニ当村ノ城主葛山次郎太夫惟兼公十代孫葛山備中守惟信公亦不思議蒙告警テ奉尊体拝則守リ崇メ本尊供敬礼拝給コト深シ依之結草庵則景島依京寺号然ルニ此観世音菩薩往昔ヨリ此方考ルニ年符八百六十余年之星霜ヲ雖送ト至今利生新ニテ衆生済度シ給者也仍縁起大旨如件

明暦三丁酉歳三月十八日

日当山仙年寺第十九世音蓮社響誉謹書

これは一六五七(明暦三)年に仙年寺第一九世住職の響誉が記したものである。これによると、この正観世音菩薩は弘法大師の作になるものであるが、世の人はそれを知らずにいた。それが仙年寺第二代目の日誉上人の夢の中のお告げによりそのことがわかり朝夕尊崇してきた。至徳年中(一三八四〜八七)この地の城主葛山惟兼の一〇代の孫にあたる葛山惟信が不思議なお告げを受けてこの正観世音菩薩を深く信仰し、景ヶ島に草庵を結び依京寺と号したという。これにより、江戸初期の一六五七(明暦三)年頃には、この景ヶ島の依京寺は至徳年中にこの地の城主葛山惟信が建立したものだという伝承が存在したことがわかる。

田場沢の薬師堂

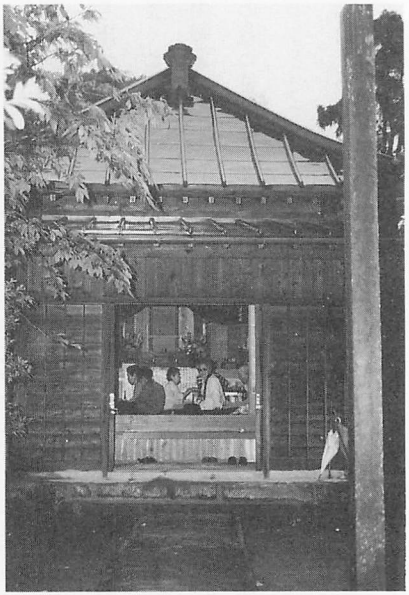
田場沢の家々だけでまつっている薬師堂である。公民館の並びにあり、堂内には本尊と十二神将が安置してある。この十二神将のことを地元では「十二薬師」とも呼んでいる。仏壇の下の方に丸石が二つ重ねにしておいてある。この丸石は昔中野鶴吉家の裏手にこの薬師堂があったのを現在地に移転したときに本尊の下から出てきたものだといわれている。これに触ると病気が治るという。人々は重い病気やはやり病にかかったときにはよくこの薬師堂に願をかけに行ったといい、治ると礼に念仏をあげた。その礼の念仏をオハタシ(お果たし)という。中野家の裏手から現在地へ移転したのはおよそ一三〇年前というがその根拠ははっきりしない。本尊の入っている箱の蓋の裏には「日当山廿五世到誉造立　明和元申歳八月二七日入仏　大工　勝間田平六」とある。日当山とは仙年寺のことでその二五世到誉が一七六四(明和元)年に入仏つまり開眼供養を行ったということがわかる。大工の勝間田平六はその名前からみて現在の裾野市域か御殿場市域の人物と推定される。

現在も田場沢の年寄りが毎月旧暦一二日に団子、菓子、花、水などを供えて念仏と題目をあげている。諸費用は田

場沢のモヨリで出している。

この葛山という一つの地区について見てみると、地区に一つの寺があり、地区のほとんど全戸がその檀家となっている。その寺は由緒の古い寺で檀家の範囲はその地元の地区を超えて外にも広がっている。ただし、その寺は念仏講の年寄りたちに御詠歌や和讃の練習の場を提供してもいる。そして、寺から距離的に少し離れた集落の田場沢では田場沢だけの念仏講の寄り合いが薬師堂で行われている。

また、景勝地に立地している景ヶ島依京寺では四月と八月の特別な行事で年に二回、葛山の各モヨリで順番に念仏



1

2

写真4－20　薬師堂（葛山）
1　天道念仏
2　月並みの薬師講

をあげている。

寺や堂が地域の年寄りたちの念仏の場として機能していることがわかる。

2　深　良

深良の四カ寺

深良には四カ寺がある。切久保の浄土宗西安寺、町田の浄土宗松寿院、町田の曹洞宗文明寺、南堀の曹洞宗興禅寺である。この内、文明寺は興禅寺のインキョデラ(隠居寺)であるという。深良では寺と檀家の関係は入り組んでおり、モヨリごとにまとまって一カ寺の檀家だけで占めるということはない。それぞれの寺の檀家が深良全体に散らばっている。

①西安寺　檀家は深良の地区内が主である。それ以外にも御宿、佐野、茶畑、二ツ屋などにもあり、市外にも若干ある。寺伝によれば、この寺はもとは上原にあったという。一〇六〇(康平三)年八月、甲斐、駿河両国の国司に任じられた藤原惟康が駿河国を治め、この地に荘園を構え、菩提寺を建立した。その後、親家に至り藤原の姓を大森と改め、一四九二(明応元)年大森氏頼が寺を現在地に移したという。これらはいずれも寺伝として言い伝えられているもので記録があるわけではない。

②松寿院　年間の主な行事には、一月一日の修正会、一月二五日の御忌会、二月一〇日の涅槃会、三月彼岸の彼岸会、五月五日の花祭り、八月二日の施餓鬼会、八月二四日の地蔵会・浄焚会、九月彼岸の彼岸会、一一月二三日の十夜法要があり、この内、八月二四日の地蔵会がにぎわう。この日が縁日で、午後二時頃から子育て地蔵の前で念仏があげられる。大勢の人たちが集まり浄焚会つまりお焚き上げも行われ、献灯やそうめん流しなどが夕方から行われ

る。戦前には子供相撲もやっていたという。昔は子供の死亡率も高く子育てには苦労したのでそのために作られた地蔵だろうという。また、幼死した子供たちの守り本尊であるともいう。

③興禅寺　檀家は地元の南堀に多いが、南堀の家々がほとんど興禅寺の檀家というわけではない。松寿院、西安寺、文明寺の檀家もあり、入り組んでいる。興禅寺の檀家は南堀以外に深良の他の地区にもある。また御殿場市神山（こうやま）の尾尻（おじり）の寺などがつぶれてこの寺の檀家となったので増えたともいう。

寺伝によれば、古くは真言宗の寺であったが一六世紀中頃の永禄年間に禅宗に変わったという。また、定輪寺（じょうりんじ）八世

1

2

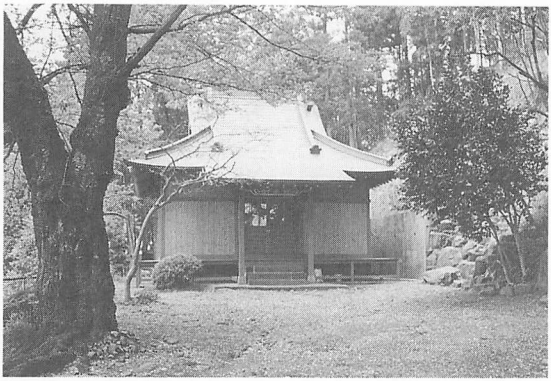
3

写真4－21　深良の寺と堂　I
1　西安寺
2　松寿院
3　興禅寺

の揚天宗播を開山とし一四九四(明応三)年没の大森信濃守を中興開基と伝えている。

年間の行事で主要なものは、四月の施餓鬼会である。現在は四月一〇日に行っている。檀家の人たちがいくらかずつのお金を持ち寄り、寺からは寿司、菓子などが用意される。住職の読経による施餓鬼法要が営まれる。かつて、戦時中の頃には寺になかなかお金が集まらなくなったことがありこのままではせっかくの寺もつぶれてしまうと心配した寺の住職と檀家の人たちとで、盆と暮れ、正月、それに葬式のときには寺にいくらか付け届けをしようと決めたという。寺の維持への住職と檀家の人たちの努力がうかがえる。

1



2

写真4－22　深良の寺と堂　Ⅱ
1　文明寺
2　地蔵堂

④文明寺　この寺は興禅寺の隠居寺だといわれるが、寺伝でも興禅寺二世須翁英参の一五八二(天正一〇)年の開創と伝えている。境内の鎮守社白山社(はくさんしゃ)は歯の神ともいわれている。

原の地蔵堂　原の小高い丘の上にあり、原のモヨリでまつっている。八月二四日が縁日である。二三日の晩に年寄り

が集まってご飯を供えて念仏をあげ地蔵の御詠歌を唱える。男衆が出て掃除をし、茣蓙を敷いて準備をする。昔は各組の世話人が一晩泊まった。世話人は各組から出ている。

二四日には相撲がある。昔は大人相撲だったが今は子供相撲である。近所の相撲好きの人たちが集まってやった。昔は花火をしたり踊りを踊ったり唄を歌ったり出店が出たりしてにぎやかだったという。

地蔵は子供の神だとか、相撲が大好きだとかいう。相撲以外の余興をしてはだめだという。昔一度相撲をやめて映画をやったところ、はやり病がはやったことがあるという。子供が病気になったらこの地蔵に参ると良いという。それで治ったら八月二三日の晩にお金でオハタシする。また、新仏のある家では地蔵の祭りには特に大きな供え物をあげる。新仏でも年の多い者の場合は大盛り物といって餅のお供えをあげ、年の少ない者の場合は小盛り物といって団子を串に刺してあげる。新仏のない年はモヨリの家々で餅を作ってあげる。昔は五升の餅をついてあげていたが後には三升になった。五年くらい前から菓子屋で作ってもらったり、お金で出すようになった。

この深良は広い範囲にわたるためか四つの寺がある。そして、寺と檀家の関係が入り組んでいる。それぞれの寺の檀家の範囲はその地元の地区を主としながらも地元を超えて外にも広がっている。ただし、寺は切久保、町田、南堀にあるのみで、上原から上丹、原など深良の北半分には寺がないことが注意される。その理由は明らかでないが、そのような寺のないモヨリの原の場合、地蔵堂があり、そこで毎年地蔵の縁日が開かれていることが注目される。寺はなくても行事は堂で行われているのである。

3　茶　畑

1

2

写真4－23　茶畑と伊豆佐野の寺
1　耕月寺（三島市佐野）
2　願生寺（茶畑）

耕月寺と願生寺

茶畑には檀家寺の類はない。茶畑の家々のほとんどが古くから檀家となっているのは泉川の川向こうで三島市域になる伊豆佐野の曹洞宗耕月寺（こうげつじ）である。耕月寺は桃園（ももぞの）の定輪寺の末寺である。なお、茶畑の中でも少し離れ、新しく開かれたと伝えられる市ノ瀬の家々は現在では耕月寺の檀家になっているが、もとは深良の松寿院の檀家で、これには若干のいきさつがあるという。市ノ瀬はもと深良から二、三男がこの地へ移ってきて開いた集落だと言い伝えている。初めは三戸で開いたという。今でもほとんどの家が杉山姓である。そして、初めは出身地である深良の松寿院の檀家であった。しかし明治になって、現在の明治生まれの古老たちの父親にあたる人たちの頃、深良の寺では遠くて不便だからと何度も松寿院に頼んで、近くの耕月寺の檀家に変更しても

らったという。先代から昔がたりによく聞いたという人もまだ少なくない。

願生寺は道場山にある。この寺は時宗であるが、地元に檀家をもつ寺ではなかった。もと茶畑の名主であった柏木家(屋号サカイガワ)が管理していたといい、柏木家の墓があったともいう。現在は住職が入っているがかつては無住であった。この寺については次のような伝説が知られている。

一三三五(建武二)年一二月一一日、尊良親王をいただく脇屋義助の軍勢は街道を東に進み、いわゆる竹之下合戦が起きることになる。その夜、親王軍も足利軍もかがり火を焚き火は赤々と山に映えた。明けて一二日、竹之下で戦いが始まり、昼頃までは互角に戦っていたが親王軍の一部が足利方へ寝返ってしまったために、親王軍は総崩れとなって裾野方面へ退却していった。傷ついた親王軍の兵士たちは刀を杖に疲れた身体をひきずって願生寺にたどりつき救護をうけた。このときの戦死者は手厚く葬られたが、当時足利氏の支配下にあったため供養塔に文字を刻むこともできず、ただ京都の方向に向けて建てられた、と言い伝えられている。

この寺には不動と弘法大師とがまつられており、昔は二月二一日が「お弘法さんの日」といって子供たちに食事を振る舞う日であった。この日は子供たちは何膳でも食べられるといって、ご飯にイワシ、なます、味噌汁などがついた。

滝頭の不動

滝頭の集落の北端の橋の近くに滝頭不動堂がある。下の川には不動の滝があり、羅漢塚、公民館、忠魂碑もこの不動堂の近くにある。

不動堂は滝頭の古くからの家である二八戸でまつっている。二八戸の家でその土地も所有し不動講を作っている。不動講の世話人は年配の人三人が選ばれてつとめている。この不動堂はどこかの寺との関係は現在はない。ただ、明

治の頃は耕月寺の分院だったという言い伝えはある。祭りは毎年二月二八日で、二八戸が順番にヤド(宿)をする。ヤドは二八年に一度まわってくる。一代のうち一度はヤドをする計算になるといっている。ヤドは一巡すると、くじを引きなおしてまた順番にヤドをする。ヤドには不動のヒョウゴ(掛軸)がまわる。祭りの日は昼の一一時頃から不動堂で念仏がある。講員はこの念仏を忘れないようにとメモを取っている。それによれば、念仏の順番は次のとおりである。

お不動尊祭事

一、ざんげ文　三回
二、南無阿弥陀仏　一〇回以上
三、不動尊　十五回以上
　のうまくさんまんだ　ばあさらだん　せんだんまあからしゃった　そわたや
　うんたらたかんまん
四、お釈迦様　三回　(四月八日は五回)
五、摩訶般若波羅密多心経　二回
六、延命十句観音経　一五回
　おしまいに、南無大慈悲観世音菩薩をとなえる。
七、南無阿弥陀仏　一〇回以上
八、普回向

願わくば　このくどくをもってあまねくいっさいに及し　我らと衆生とみなともに仏道を成ぜんことを祈りたてまつる　かんにしくどく平等世界いっさいどうはほつぼだいしん往生極楽

ヤドでは、この不動の祭りの日には赤飯のおにぎりをたくさん作って配る。料理はヤドの家とその近所で手伝って作る。不動堂の掃除やあとかたづけもヤドとその近所とでする。料理は、豚肉や鳥肉やこんにゃくなどの煮物で、それを肴に酒を飲む。果物や菓子も念仏にきた女性たちに配る。ただ最近では料理は仕出し屋からとるようになってきた。費用は不動の賽銭や土地の収入があるのでそれでまかなっている。

この二月二八日の祭り以外にも、この不動堂では月並み念仏といって念仏講の女性たちが毎月一回集まって念仏をあげている。

羅漢塚と忠魂碑　不動堂と道をはさんだ向かい側に石仏、石塔が密集している場所があるが、そこは羅漢塚と呼ばれている。このあたりは明治の頃は墓地だったともいわれている。現在では特にこれをまつるような行事はない。

不動堂の近くに忠魂碑が建てられており、三月の春の彼岸の中日に滝頭公民館で太平洋戦争の戦死者をまつっている。この忠魂碑はもと東小学校に建てられていたもので、終戦後、忠魂碑は埋めてしまわなければならないと言われたという。そこで、埋めないで不動のところへ移した。それから毎年春三月の彼岸に戦死者をまつることとした。もとの泉村出身のすべての戦死者の霊をまつっているという。公民館ができる前はその彼岸の祭りは忠魂碑の前で行っていた。経緯を記した石碑の碑文によると、一九三〇(昭和五)年忠魂碑を東小学校に建立、一九三九(昭和一四)年殉戦勇士之碑建立、一九四八(昭和二三)年忠魂碑を現在地へ移転、一九九〇(平成二)年平和の碑を傷痍軍人会で建立、と記されている。

この茶畑には檀家寺の類はなく茶畑の古くからの家々はそのほとんどが伊豆佐野の曹洞宗耕月寺の檀家になっている。しかし、寺はなくても茶畑の南半分の坂下の人たちは現在でも願生寺で二月二一日に弘法大師をまつっている。また、茶畑の北半分の坂上（さかうえ）の滝頭の人たちは不動堂で毎年二月二八日に念仏講を行ってきている。つまり、寺はなくても地域ごとに年寄りたちが集まり念仏をあげたりごちそうしたりする場はもたれてきたのであり、それが無住の寺

1

2

写真４－24　滝頭の不動周辺（茶畑）
1　不動堂
2　羅漢塚

や堂であった。

4　富　沢

富沢のムラと定輪寺

この富沢はもともとは小さい集落で、寺はなく、古くからの家々はほとんど桃園の定輪寺の檀家である。かつて富沢には、定輪寺の隠居寺だといわれる寺がいくつかあり、桃園の集落には寺役をする家が七戸しかなかったといわれる。また、桃園の村と富沢はシンセキづきあいをする家が多く、富沢と桃園、そして定輪寺が密接な関係にあったことがうかがわれる。定輪寺は曹洞宗の古刹で、裾野市域だけでなく御殿場市、三島市、沼津市にも檀家が広がっており、あわせて七百戸くらいあるという。だから、盆の棚経（たなぎょう）もその年に葬式のあった家には住職が来て参るが、ふだんの盆の棚経は末寺の僧が来る。寺と檀家の経済的な関係の一部について見てみると、檀家は昔は一年に米一升を寺に納めたが、今ではお金で納めているという。金額は家と戒名によって目安の価格が決められている。檀家の葬式には住職と四人くらいの役僧が来てくれるが、葬儀費用は裾野市の仏教会の決まりによっている。

写真4－25　定輪寺（桃園）

堂と庵寺

公民館は集落の中ほどにあり、ここはもとは堂であった。今も中に釈迦如来、阿弥陀如来、弘法大師、子安（こやす）、観音、ギャアキバアサンの像が安置されている。弘法の縁日が二月一一日、子安が三月一〇日で

ある。この子安は安産の神で、昔出産で亡くなる人がたくさんいたので、年寄りが杉田の子安を移してきてまつるようになったもので、そうしたら不思議と出産で亡くなる人がいなくなったという。

愛鷹神社の北方の小高い丘の急な石段を登っていくと上の平らな場所にもとアンデラサン（庵寺さん）と呼ばれた堂があった。草屋根だったため花火の火の粉が落ちて一九八四（昭和五九）年頃焼けてしまった。昔は毎月一〇日と一七日の晩にこの庵寺に年寄りが集まり念仏をやっていた。急な階段の登り降りがたいへんなため仏像は早くに公民館に移していたので火事にはあっていない。この庵寺は定輪寺の隠居寺であったともいう。

写真4－26　公民館に安置された仏像（富沢）

この富沢には寺がない。しかし、堂はあり、そこで弘法や子安の縁日が開かれている。寺との関係は基本的には葬式において最も重要であり、盆の先祖供養なども同様である。しかし、日頃の信心や縁日の寄り合いは堂や公民館で地域の人たちだけで行われていることが注目される。

5　下和田

専修院とその行事

下和田のほとんどの家は専修院（せんしゅういん）の檀家である。専修院は一向山専修院長唱寺（ちょうしょうじ）といい、浄土宗である。浄土宗は富岡地区に四カ寺、市域全体では六カ寺である。今では公民館が集会施設として活用されているが、それができる前は多人数での集会は寺の本堂を

使用していた。旧二月の区の総会も本堂で開かれた。檀家組織は、檀徒総代と世話人で構成されている。世話人が三人で、その中の一人が檀徒総代となる。世話人の三人は全員下和田の人である。区の総会で選挙している。寺に下和田の人々が集まる最大の機会はオセガキ(お施餓鬼)である。

盛んな念仏講

また念仏講は春秋の彼岸、七月二四日の地蔵盆、一一月のジュウヤ(十夜)、一〇月二三日から二五日のギョキ(御忌)に寺の本堂で行う。以前はその他に三月二一日にコウボウダイシ(弘法大師)、四月八日のハナマツリ(花祭り)が行われたが、今は途絶えている。念仏講の講員は現在ではすべて女性である。また寺の境内にある軍人墓地で正月元旦、春秋の彼岸の中日、盆の二四日に念仏が行われるが、それに住職も出て読経する。村人も参拝に来る。

他方、住職が檀家を訪れる機会は、もちろん葬儀があるが、その他にネンカイ(年回)、盆の棚経などがある。棚経は七月二三日に下和田の檀家を回り、二四日に御殿場の檀家を回る。檀家は檀那寺に付け届けをする。現在は盆の前、春と秋の彼岸、そして暮れの四回である。内容は現金が多い。以前は麦、米、小麦粉であり、米であれば一升が原則であった。昔は年二回で、盆と春秋どちらかの彼岸であった。御殿場など遠いところの檀家の場合は、住職が盆の棚経に回ったときに一括して渡す。

(三)　さまざまな講

不動講と万神講

神仏への信心のかたちの一つとして、講というのがある。地域の年寄りたちが集まって念仏を唱える念仏講、家庭の女性たちが安産を願って集まる淡島講、子供たちが集まる天神講など、また、火伏せの神

である秋葉神社や農家の神である大山阿夫利(あふり)神社に代参をたてて札をうけてくる秋葉講や大山講などがある。市域では特に念仏講の活動がさかんで地域ごとに講が作られているだけでなく、近隣の広い範囲にわたって大規模な念仏講の組織が作られているのが特徴である。そのような広域的に組織された念仏講については、別に取り上げることとし、ここでは地域ごとに見られる講のいくつかについて見てみる。

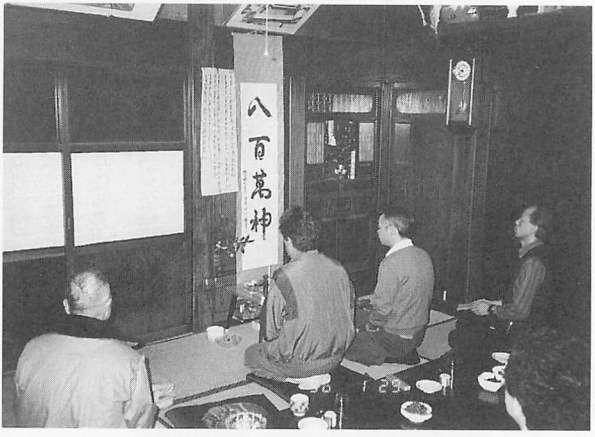
下和田の向組(むかい)では、毎月二八日に不動講を行っている。当番は家並み順で、二八日の晩に当番の家で各戸から一名ずつ集まって行う。番が回る、万事(ばんじ)の神をまつる、などという意味からバンジンコウ(万神講)ともいう。万事の神の中に不動があり、その不動をまつるために二八日になったともいわれる。「天神地祇八百万大神」と書かれた掛軸の前で、先達(せんだつ)が数珠を持って不動経を唱え、その後ろで講員全員が拍子木を打ちながら唱和する。線香一本分がともる時間を目安にして、不動経の真言をいくつか唱えていたが、現在では一〇回ほど繰り返して終了する。

かつては組中の人たちが当番の家に集まり、不動講が終わるとオオブルマイをした。当番は昼間のうちに、男衆の場合には米三合、女衆では米二合を集めておき、子供も寄って全員で夕飯を食べたという。

現在では、不動講の前に税金や組の共同水道の使用料金、電気料金などを集金し、不動講の後には組の月例会を行って、区から下りてきた議題を話し合う。これも、もともとは別の行事であったが、不動講のおりに組寄り合いを兼ねるようになった。なお、写真4－27の2は、同じ下和田の上方下(うえがたした)組の不動講であるが、ここではテッポウドコ(鉄砲床)といわれる床に掛軸を掛けて行われる。また参会者は、廊下に置かれた水と塩で清めてから座敷に入ることなどが、向組の不動講と違うところである。

さて、下和田向組のような寄り合いを兼ねた不動講は、茶畑の滝頭での旧戸二八軒でも行われている。滝頭の場合

1



2

写真4－27　不動講（下和田）
1　向組の不動講
2　上方下組の不動講

は、二月二七日に公民館で不動の掛軸を掛けて参拝した後、旧戸の寄り合いを行う。翌二八日が不動尊大祭で、不動堂で念仏講の女性たちによる念仏があげられる。

これに対して深良では、バンジンコウは万神講と書くほかに、万人講ともいって、毎月一回世帯主たちが共同飲食をしながらムラのさまざまなことを決めていったという、いわば組の寄り合い的な講があったという。

ところで市域では、節分の日をマメマキと称する場合が多い。この日ムラ行事として不動講あるいは大山講が開かれる。講は神奈川県伊勢原市にあるオオヤマサン（大山阿夫利神社）にムラの代参者を送り、札をもらって帰り、各戸に配るというものであるが、講の名称に相違がある。

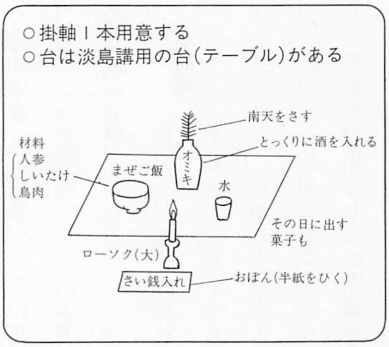
葛山の場合、下条では大山講、田場沢では不動講が同日に開かれるのである。田場沢では、前年度の不動講でくじ引きによって選定された代参者が持ち帰った「オオヤマサンのお札」を、講員に分け、翌年度の代参者を選び、皆で酒を飲んで終了となる。

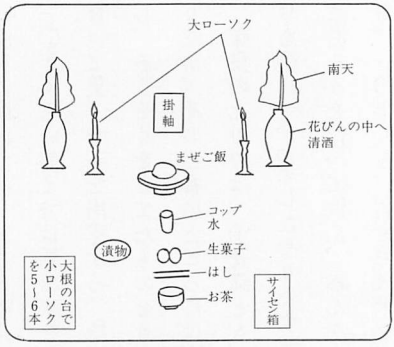
淡島講

淡島講は嫁や主婦にとって一大事である出産をめぐる安産祈願が中心となっていることが特徴である。同時にそこではいろいろな出産の経験が語られるなどもして妊産婦の不安を解消するのに役立ったという。そしてさらに、地域の女性たちの夕食会のような親睦の役割ももっていたようである。葛山では子安講ともいい、正月、四月、一〇月に婦人会が中心となって行っている。お茶や菓子を用意して集まる。講に積み立てられたお金があり、出産の費用として妊産婦が借りて翌年正月に一割の利子をつけてかえす。こうすると安産だともいう。

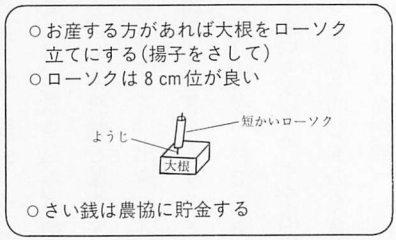
深良の南堀では、一月と四月に婦人会の総会もかねて公民館に集まる。賽銭をあげて掛軸を拝んでから席につく。三〇年くらい前までは順に家をまわり、炊き込みご飯やおかずを作り酒も出していた。今では三百円ほどお金を出し合って菓子や茶を用意する。持ち回りで掛軸を保管する。婦人の講で、出産の近い人はダイコンの輪切りに楊子を刺し、ろうそくを立てたものをもらってくる。出産のときそのろうそくに火をともして安産を祈る。講の当番は持ち回りだが、その当番のところには図表4－9のようなメモが保管されている。

深良の上丹では、子安講ともいう。安産の神でもある。一年に三回、一月、三月、九月に講をする家の都合の良い日を決めて、「あしたやります」というイイツギを出す。二二戸に家並み順にまわる。掛軸を床の間に飾り、夕食のごちそうを作って供え、みんなもそれと同じものを食べる。献立は決まっておらず、その家で用意されたものを食べる。一〇年くらい前までは米を三合ずつ持ち寄っていた。小さい子供は連れて行く。夕方から夜一〇時頃まで飲食し





図表4－9　淡島講当番所有のメモの写し（深良）



たり話をしたりで、姑から解放されて楽しかった。今はみんなで一年に一回温泉に行ったり夕食会を開いている。

深良の原では、念仏講が年配者の講であるのに対し淡島講は若い嫁たちの講である。二一戸の主婦が参加している。一九五〇年代までは毎月やっていたが、今は年に四回程度で夕飯のふるまいをする。日取りはヤドをする家の都合で決める。「お米集めが来る」などといって米を一戸につき三合ずつ集めた。ヤドになった家では淡島の掛軸を床の間に掛けておく。集まった人たちはその掛軸に手を合わせ、柏手をうって拝んでから席につく。年長者が上座に座る。座敷と広間を使って夕食を食べる。献立はレイコウゼン(霊供膳)といって、オツボ(こんにゃくとニンジンを豆腐とラッカセイであえた物)、オツケ(豆腐の味噌汁)、オサラ(ダイコンとニンジンの酢の物、またはこんにゃくの味噌あえ)、オチャハン(煮出したお茶の汁で炊いたご飯)、オヒラ(昆布とがんもどき、がんもどきは裏表がないから良いという)である。

茶畑の滝頭の淡島講は女性の神をまつる講で、安産の神といわれる。六月と一二月を除いた月に一回ずつ集まる。昔は一カ月ごとに淡島明神の姿が描

かれた掛軸をまわしていた。子供たちを呼んでごちそうしていたともいう。現在の講員は一五名ほどになっている。

富沢ではコヤスサン(子安さん)が、安産の神である。この富沢では年配の女性たちの講になっている。毎月一〇日に公民館に集まって、子安講をしている。午後一時頃から経をあげる。特に自分の家で娘や嫁に出産のある人は安産の願をかける。安産祈願の経をあげて、無事に生まれると赤飯や団子を供えてオハタシ(お果たし)をする。ふだんは上モヨリ、中モヨリ、下モヨリと順番に一戸ずつ当番が決まっていて、菓子、お茶、線香、花などを用意する。昔は団子も用意したという。

天神講

次に地域の子供たちの講である天神講についていくつかの例を見ておこう。

「天神さんは子供のお祭り」という認識が一般的である。須山の田向(たむき)には、小学生と中学生による天神講が、現在もあり、彼らによる祭りが行われている。天神は菅原道真をまつり、「子供の勉強ができるようになる」と信じられている。祭日は本来は二月の初午だが、高校受験と重なるため三月中旬の日曜日に変更し、一九九七年には三月一六日に行われた。現在の天神講は田向公民館を会場にして諸準備を行い、田向の三カ所の屋敷地にまつられている天神を参拝することとなっている。

諸準備は、すべて子供たちの自主性に任せて行われることが原則で、その指導は最高学年の中学三年生が行う。参拝の際、天神の祠前に一対立てるハタ(のぼり幡)は、竹の棒に赤、緑、黄、紫の四色の紙をつけ、紙には「奉納　天神天満宮」と墨書するのだが、こうしたもろもろが中学生の手によって進行する。また、同時に参拝が済んだ後に皆で食べる食事の準備も、中学生の女子たちの手で行う。

参拝には中学生を先頭にハタと赤飯を持参して出かける。三カ所それぞれを、三つの組に分かれて参拝する。ハタ

を立て、赤飯を供えて、『拾遺和歌集』の「東風吹かば　匂いおこせよ梅の花　主なしとて　春な忘れそ」を唱和する。天神講への加入は幼稚園児になることが条件である。祭りの当日、四月から幼稚園児になる子供たちが先輩の子供たちの前で紹介され、唄などを歌って余興をし加入が認められる。

葛山の田場沢では、子供たちが米やお金を出し合い、二月二五日にヤドに集まり一晩中騒ぐ。ヤドは適当な家を子供たちが頼む。掛軸を掛け、字がうまくなるように梅を飾ってご飯を盛って供える。習字の練習もする。

深良の町田では、B家に天神がまつられている(第一節参照)。学問の神ということで、子供たちが学年が変わる時

1

2

写真4-28　天神講（須山）
1　幡立て
2　公民館での食事

に、おもに六年生が中心となり一月二五日頃集まる。まず、神社の境内で習字をしてそれを天神にあげてからまつっている家からごちそうなど出してもらって皆で食べたり学芸会のようなことをした。

深良の南堀では、天神講は戦前まで盛んにやった。二月二五日、小学六年生の家に子供たちが集まった。会費のほか米や野菜などを持ち寄り、ヤドとなった家では煮物やご飯、味噌汁などを出してくれた。みんなでにぎやかに食事をするほか、習字をして壁にはったりした。

深良の上原では、一年に一回、二月頃にやっていた。本当は一月二四日だが、月遅れで二月二四日頃にやっていた。今では公民館で二月の土曜、日曜にやっている。小学生が中心で男女ともに上原全体の子供が集まった。昔は養蚕をやっていた家も多かったので、そのような広い家や裕福な家でやっていた。

深良の原では子供の講で、昔は、「じゃあ、こんどはわしらんちでやってやるよ」と、大きい家の人が順に言ってくれて、その家でやった。今は公会堂でしている。二一戸のうち子供のいる家から米を集めた。天神の掛軸を掛け、混ぜご飯と普通のご飯と、ニンジンとゴボウの煮たものを用意する。「子供はとも食い」と言って、家では嫌いだと言って食べないものでも友だちが一緒だとまねをしてなんでも食べた。学校の先生が来て話をしてくれたりした。

このように天神講は、子供たちが旧暦正月二五日、新暦では月遅れの二月二五日に学問の神の天神をまつって習字の練習をしたりごちそうを食べたりして学問の上達を祈るものであった。ただ、市内でも北の葛山や深良には見られるのに南の茶畑や富沢に見られない。その理由は明らかでないが注目される。

写真4－29　観音大祭（久根）

念仏講

市域では、多くのムラで年配の女性たちによる念仏が毎月行われている。念仏講は、そのムラがまつっている神仏によって、行われる日がさまざまである。また場所も、観音堂や地蔵堂、不動堂、庚申堂、薬師堂、大日堂などの堂や、公民館などの集会所で行われることが多い。掛軸を掛けての念仏講では、講員の自宅を講宿にして輪番で行うこともある。

須山の新井にある観音堂での念仏講の日程は、堂の壁に掲げられていて次のようになっている。

旧正月八日　毘沙門さん
三月　五日　子安さん
三月一八日　観音さん
三月二一日　弘法さん
四月　八日　お釈迦さん
七月二六日　盆施餓鬼
旧七月二四日　観音さん
毎月一八日　観音さん

須山の上村（現一・三区、すなわち久保・馬場・津土井・原・淵・新井の集落）では、この観音堂に集まって念仏が

行われる。かつては日中働いてから念仏をやり、堂で夕食を食べて夜まで世間話をして過ごした。現在では午前中に念仏をやり、昼食を食べて夕方まで雑談をしている。月並み念仏とはいえ、寒中の寒念仏はやらない。また、須山の上村と田向のそれぞれの念仏講は、月並み念仏以外は合同で念仏を行っている。上記のほかに、一番茶前の大念仏（おおねんぶつ）（後述）と旧暦六月二四日の地蔵の祭りは、田向の地蔵堂で合同の念仏がある。なお、田向の地蔵堂での月並み念仏は、毎月一五日である（『須山の民俗』）。

市域での月並みの念仏講は、ほぼ市の全域で行われているが、近年念仏講員の高齢化と後継者不足でしだいに形を変えつつある。

題目講　市域には一九九六年までは日蓮宗の寺院はなく、日蓮宗寺院の檀家となっている地域もなかったが、一部の地区で古くから題目講が行われている。

深良の上原では、題目講の講員は念仏講と同じ人たちであるが、この上原には日蓮車返しの霊場があるので月並みの題目講以外の題目もさかんである。日蓮車返しの霊場というのはその昔日蓮が立ち寄ったといわれる堂のことで、明治以前は最復寺（さいふくじ）という寺で住職がいたが、長い間朽ち果てていたのを、日蓮信者であった小林由太郎が一八九〇年から一九〇〇年頃に再興し、現在に至っているという。日蓮上人が立ち寄ったといわれる旧暦八月一三日、新暦で八月二五日に曼荼羅（まんだら）のオムシボシ（お虫干し）の行事が行われる。一一時頃から始まる。講の女性七、八人が各々題目の書かれたうちわ太鼓をでんでんと叩きながら題目を唱え、小林家へと向かう。小林家から紫、白、黄、青、茶の各色の南無妙法蓮華経の幡と日蓮上人御真筆といわれる曼荼羅をもって堂へ行く。毎年、日蓮宗静岡宗務所長と日蓮宗総長が訪れ総長を中心に堂に会した二五人ほどの僧が題目を唱える。題目がすむと上原公民館で会食をする。会食の準

1

2

写真4－30　日蓮車返しの霊場お会式（深良）
1　車返しの霊場
2　加持祈禱

備は八時頃からはじめて三時頃までかかる。当番は二年交代で一～五組を順番にまわる。その経費は賽銭のほか、区からの補助金一万円くらいと宗務所からの一〇万円などでまかなわれる。なお、一一月にはお会式（えしき）が行われる。オムシボシのときのように各自うちわ太鼓を叩いて行くが、そのときは幡や曼荼羅は持って行かない。

同じく深良の上丹の題目講では、毎月二八日に祖師堂に集まり題目をあげている。上丹には日蓮宗の家は二戸しかないが、念仏講の人も加わって一〇人くらいでこの題目講はやっている。日蓮像をまつり、家内安全や村の無事安全を祈るのだという。また深良の須釜の題目講は、毎月一七日に祖師堂に集まり題目をあげている。題目のときは子供が丈夫に育つようにと鬼子母神もまつる。オハタシのときには赤ん坊の肌着を納める。それをまた他の人が借りてい

くと子供が丈夫に育つという。なお、毎月一日に祖師堂のまわりとサイノカミと馬頭観音の掃除をする。

(四)　天道念仏

公文名の天道念仏　市域でさかんに行われている講の活動に、念仏講の女性たちによる太陽をまつる天道念仏がある。市域ではテントウネンブツ、オテントサンネンブツ、ヒネンブツ、などと呼び、題目を唱える地域ではオテントサンダイモクなどとも呼ぶ。市域を中心に、北は御殿場市神山の尾尻から南は三島市旧北上村までの範囲に伝えられている。まず、一九九三年七月二四日(旧暦六月八日)に公文名で行われた天道念仏を例に見てみる。

日の出前の午前四時半頃から始めて日の入りの午後七時頃まで、公民館で行われた。その日は大雨だったが、モヨリを単位とした四つの区の念仏講の女性たちがすべて集まり総勢五〇名ほどで行われた。

まず、太陽の出る方向の東に祭壇を作り、花をたくさん供えて、それに向かって全員で一日中鉦(かね)を叩きながら念仏を唱える。線香と灯明の火は絶やさないようにする。鉦と念仏も絶やさないように、何人かずつのグループに分けて順番に交代しながら行う。祭壇は太陽の方向に合わせるために昼には西向きに変える。本来は鉦を絶やさないように休まず行うものだったが、たいへんなので今では午前一〇時に一〇分、昼に一時間、午後三時に三〇分くらいずつの休憩をとるようにしている。

念仏は「南無阿弥陀仏」を繰り返し唱えるもので、最後に「お日様」「お月様」の御詠歌を唱え、公民館にまつられている庚申を拝んで終わりとなる。「お日様」「お月様」「おこうしんさま」の唱え言は次のとおりである。

お日様

よをてらす　よとのじょうどの　そこまでも　りゅうおんふかき　ちちぞあるべし

お月様

つきしろに　かぜも涼しき　よの中は　りゅうおんふかき　母ぞあるべし

おこうしんさま

一　南無阿弥陀仏

二　おこうしんでー　こうしんでー　まいとり　まいとり　そわか（一五回）

三　おんべー　ばやばしや　おんばった　そわか（一五回）

四　観音経

五　じぞうさん

おんかあかあ　神様まいり　そわかー

六　御詠歌

親も子も　身も兄弟も　他人をも　心よくせよ　ねんごろにせよ

七　さいの神

さいの神　よくしておくれ　つじの神　のがしておくれ　はやり病気を

八　風の神

ようけて通れよ　このかどを　くうかぜくうの　あらんかぎりは

おっちかい　みなもと深き　泉水のぼだいのために　きよくすむらん

2

3

4

1

写真４－31　天道念仏
1　御宿
2　公文名
3　上ヶ田
4　千福

内　　容	目　　的	現　行
念仏・経	長雨の時に太陽が出るように願う	△
念仏	アメジゴクの時に日乞いをする	△
題目		○
題目	天気が良くなる、豊作祈願	○
念仏、旧戸から一人参加	オテントウサンに感謝する	○
真言	アメジゴクの時の日乞い	○
念仏	天気が良くなる、豊作祈願	○
念仏		○
念仏	長雨の時の日乞い	○
念仏	天気が良くなる、豊作祈願、夏病除	○
念仏、昔は宿は全戸の輪番制	これを境に雨がやむ	○
念仏	太陽に感謝する	○
——		×
——		×
念仏	長雨の時の日乞い	○
念仏		○
念仏	オテントサマに感謝する、雨がやむ	○
念仏	天気が良くなる	○
念仏、最後に山中地蔵を拝む	天気が良くなる、豊作祈願、夏病除	○
念仏、最後に山中地蔵を拝む	無病息災祈願、夏病除	○
念仏、最後に歌念仏	梅雨が明ける、麦の取り入れができる	○
念仏	梅雨が明ける、お日様に感謝	○
念仏	オテントサンに感謝する	○
念仏	長雨の時の日乞い	○
最初に歌念仏、念仏	オテントサンが病気を治してくれる	○
——		×
真言、定輪寺の旧戸のみ		○
念仏		△
念仏		△
念仏	オテントサマに感謝する	△
念仏		△
真言	無病息災、梅雨が早く明けるように	○
——		×
念仏、最後に観音を拝む	オテントウサマに感謝する	○
念仏、最後に歌念仏	世の中の平穏、お日・月様に感謝	○
念仏	オテントウサンに感謝、村内安全	○
歌念仏	病気除けをオテントサンに願う	△
——		×
念仏	夏病除	○
念仏		△
念仏の後、真言	夏の流行病にかからないように	○
真言	マンガアライの後の娯楽	○
百万遍念仏、37戸の講	明治初期の疫病退散祈願が発端	○
念仏	仏の供養	○
		○
——		×
題目	日和講という、天気が良くなるように	△

＊3　三島市萩・徳倉・沢地に関しては、『三島市誌　増補』(1987)　及び杉村齊氏調査による。　（○は現行、△は廃絶、×はなし）

地域の天道念仏（1993年現在）

単位		月日	時間	場所	方角
御岩	神山	臨時	12：00～15：00	尾尻観音堂	仏像に向いて
	波	臨時	？	薬師堂	東向き→西向き
深良	上丹	旧6月8日	7：00～17：00	祖師堂	日蓮像に向いて
	須釜	旧6月8日	8：00～17：00	帰正庵	日蓮像に向いて
	原	旧6月8日	8：00～16：00	地蔵堂	地蔵像→妙見像に向いて
	南堀	旧6月8日	8：00～16：00	公民館	十三仏の掛け軸に向いて
	和田・市場	旧6月8日	日の出～日の入	慈眼庵	東向き→西向き
	上原	旧6月8日	6：00～17：00	公民館	東向き→西向き
	切久保・遠道原	旧6月8日	日の出～日の入	遠道原観音堂	仏像に向いて
	町田	旧6月8日	7：00～17：00	町震コミセン	東向き→西向き
	震橋	旧6月8日	7：00～17：00	公民館	東向き→西向き
	深良新田	旧6月8日	8：00～16：00	公民館	東向き→西向き
須下	山	―――	―――	―――	―――
	和田	―――	―――	―――	―――
今	里	新7月8日	日の出～日の入	地蔵堂	東向き→西向き
金	沢	旧6月8日	日の出～日の入	地蔵堂	東向き→南向き→西向き
上	ケ田	旧6月8日	5：00～16：00	観音堂	東向き→西向き
葛山*1	上城	旧6月8日	5：00～18：00	公民館	東向き→南向き→西向き
	中村	旧6月8日	6：30～17：00	公民館	東向き→南向き→西向き
	下条	旧6月8日	6：00～16：00	公民館	東向き→西向き
	田場沢	旧6月8日	6：00～18：00	薬師堂	東向き→西向き
	中里	旧6月8日	日の出～日の入	公民館	東向き→南向き→西向き
御宿	本村	旧6月8日	5：00～16：00	荘園寺二尊堂	東向き→西向き
	御宿新田	旧6月8日	5：00～17：00	新田コミセン	南に日章旗を掛けて
千	福	旧6月8日	8：00～17：00	公民館	東向き→西向き
大	畑	―――	―――	―――	―――
桃	園	7月最終日曜	日の出～日の入	公民館	東向き→西向き
富	沢	土用中	日の出～日の入	地蔵堂	東向き→西向き
石	脇	？	？	堂	？
佐野	佐野（一区）	旧6月8日	日の出～日の入	青年倶楽部	東向き→西向き
	下原	？	？	個人の家	？
	二本松新田	新7月8日	6：00～17：00	公民館	東向き→西向き
二	ツ屋	―――	―――	―――	―――
久	根	旧6月8日	5：00～16：00	観音堂	東向き→西向き
公	文名	旧6月8日	4：30～19：00	公民館	東向き→西向き
茶畑	本茶	旧6月8日	5：00～17：00	公民館	南に十三仏の掛軸
	中丸	旧6月8日	日の出～日の入	観音堂	東向き→西向き
平	松	―――	―――	―――	―――
麦	塚	旧6月8日	4：30～16：00	東光寺本堂	東向き→南向き→西向き
伊	豆島田	？	日の出～日の入	不動堂	不動像に向いて
水	窪	新8月8日	7：30～16：00	公民館	東向き→西向き
三島市佐野*2		新6月15日	日の出～日の入	公民館	東向き→西向き
三島市萩*3		秋彼岸の入り	日の出～日の入		
三島市徳倉		秋彼岸の入り	日の出～日の入	集会所	
三島市沢地		秋彼岸の入り	日の出～日の入		
長泉町南一色		―――	―――	―――	―――
長泉町竹原		臨時	日の出～日の入	公民館	？

＊1　葛山は、かつて合同で仙年寺で行っている。
＊2　三島市佐野は、モヨリごとに行っている。

図表4－10　裾野市とその周辺

全域で行われる天道念仏　このような、裾野市域の各地で行われている天道念仏について整理してみたのが、図表4－10である。そこからわかることを指摘してみる。

①日時　この天道念仏の行われる時期は、ほとんどが旧暦六月八日である。この季節は、ちょうど梅雨の終わり頃で長雨が続いてそろそろ晴天が望まれるような頃でもあり、逆に空梅雨の年だと農作物のためにぜひとも雨が必要な時期であるともいう。だから、この念仏によって晴天を祈ったり雨を祈ったりするのだという。なお、三島市域では秋の彼岸に天道念仏が行われているが、そのように天道念仏というのは春と秋の彼岸に行うという例は東日本の各地で見られる。そのような場合は、彼岸には太陽が真東から出て真西に沈むからその日に太陽を拝するのだといわれている。それらと比べると、市域の天道念仏の特徴は梅雨の終わり頃に行われているという点にあると言える。

時間はいずれも日の出から日の入りまでである。太陽の方向へ向かうように東から始めて南へ、そして西へと少しずつずらせていくという例もある。

②場所　天道念仏の行われている場所について見ると、地蔵堂や観音堂などの堂を使っている場合と、公民館や集会所などの類を利用している場合とがある。また、中には深良の震橋のように、公民館ができる前までは二五戸の輪番で各家をヤドにして回っていたという例もある。

③念仏講の構成員　天道念仏は月並みの念仏講の女性たちによって行われており、その単位は多くがモヨリごとになっている。ただ少しずつの変化もあり、例えば千福（せんぷく）ではかつては各モヨリごとだったが、現在では公民館を利用して合同で行うようになっている。逆に葛山では、かつては仙年寺の本堂で全モヨリが集まって行っていたのだが、現在ではモヨリごとの公民館で行うようになっている。そして、この天道念仏については「百姓のことだから、念仏の

仲間に入っていなくてもオテントサンネンブツにはいくらかでもお賽銭をあげろ」とよく言われたものだといい、念仏講に入っている人たちだけの行事というよりも、モヨリのすべての家々にかかわる行事のように考えられている。

④祭壇　天道念仏は太陽の方向に向かって念仏をあげる点が特徴的で、特定の掛軸などは掛けないのが普通である。朝は東向きに、昼は南向きに、午後は西向きにとか、午前中は東向き、午後は西向きにあげるという例が一般的である。御宿の新田で日の丸の旗を掛けて終日南向きで行っているのは、一つの変形であろう。祭壇には花を供え、線香と灯明をあげる。供物は季節の野菜や果物、団子などで特に決まったものはない。赤飯や五目飯の握り飯をあげるところもある。

⑤念仏　念仏は普通に「南無阿弥陀仏」を唱えるが、それぞれの講念仏ごとに少しずつ付随しているものがある。先にあげた公文名のように、「お日様、お月様、お庚申さん」のような歌念仏が付随しているところは、葛山、千福、茶畑の中丸である。千福では「あまてらす　よどの川せの　そこまでも　だいおんふかき　ちちぞこいしき」という「おてんとうさま」の名の歌念仏を最初に三回唱えてから念仏を始める。また、真言を唱えるところもある。深良の南堀、桃園、二本松新田、三島市佐野(伊豆佐野)の下モヨリである。伊豆佐野の真言は「おんまかちゃかりか　そわか　おんてんだわら　そわか　おんあちゃ　そわか　あびらおんけん　そわか」と唱える。また、題目を唱えるのは深良の上丹と須釜である。この二つのモヨリでは月並みの念仏講も行っているが、天道念仏は祖師堂という日蓮をまつる堂で行うので、このときは題目を唱えている。

⑥理由　天道念仏を行う理由については、梅雨が明けて天気が良くなるようにと願って行うのだという。梅雨の雨地獄にこの念仏をやれば天気が良くなるのだという。確かにこの天道念仏が終われば梅雨が明けると地元ではよくい

っている。また、逆に空梅雨で雨が降らないときにはこの天道念仏が雨乞い念仏にもなるという。また、「おテントサンに感謝する」とか、「家内安全、村内安全を願う」とか、「オテントサンが人間の代わりに病んでくれるので、夏病みよけの祈願だ」といっているところもある。

市域に伝えられている天道念仏は、第一に、旧暦六月八日に天道念仏が行われるのは、黄瀬川流域とその周囲の限られた範囲であることから、水系をたどって信仰が広まったと考えられること。第二に、市域外の地域ではまったくと言って良いほど天道念仏が見られないことから、ある種の宗教者の介在があったと考えられること。第三に、深良用水が生活用水、特に飲料水として使われていた時代には、はやり病が絶えなかったことから、天道念仏が疫病よけ祈願として行われていたと考えられること、などが指摘できよう。

第三節　広域的な信仰

(一)　念仏講の広がり

中駿大念仏講

市域には、各地区ごとに活動している念仏講とは別に、オオネンブツコウ(大念仏講)といってそれらが連鎖的に組織された大規模な念仏講が二つある。一つが中駿大念仏講といい、黄瀬川東岸の村々の念仏講を組織したものである。もう一つが富岡大念仏講といい、黄瀬川西岸の村々の念仏講を組織したものである。

中駿大念仏講は、オチュウスンとも呼ばれ、かつては北は御殿場市域の神山の尾尻から南は三島市域の伊豆佐野までの広範囲の村々が参加していた。講員もおよそ一二〇名いたが、一九九三年には六〇名ほどで、ヤド(宿)を提供する地区も深良(上原・上須)、久根、公文名の三地区だけになっている。ヤドは以前は個人の家を、最近では公民館を使って各地区を順番に回っている。ヤドの順番はかつては、伊豆佐野→麦塚→本茶畑→平松→公文名(四ヵ所)→久根(四ヵ所)→深良(七ヵ所)→神山、とおおまかには決まっていたが、ヤドの申し込みがあればその家でやり、必ずしも伊豆佐野から神山まで順序よく回るわけではなかった。ヤドの申し込みをする家は先祖の供養を希望する家とか新築した家などであったが、大人数を収容できる広さが必要であった。

一月一八日が初講で、「中駿大念仏講」と染め抜いた手ぬぐいを配る。三月、七月、九月に一回ずつやって一一月が終い講で慰安旅行をする。講員は当初男衆ばかりだったが、最終的に会長の勝又福太郎氏(一九〇三年生、深良新

写真4－32　中駿大念仏講（深良）

田）だけになった。

念仏の内容は、「十念」から始まり「十三仏如来」「観音経」「弘法大師御詠歌」「善光寺如来御詠歌」「駿豆念仏講御詠歌」「駿豆大念仏和讃」「靖国の念仏（戦死者英霊供養念仏）」「唯念上人御和讃」「修證義」「念仏」で終わりとなる。

この念仏講は「唯念（ゆいねん）さんの念仏講だ」といわれている。九本ある掛軸の中心は唯念自筆の六字名号である（図表4－11参照）。唯念（一七九〇～一八八〇）は、幕末から明治にかけてこの一帯に念仏を広め、信仰を集めた人物で、天保年間（一八三〇～一八四四）に駿河国駿東（すんとう）郡上野（うえの）村奥の沢（現小山町（おやまちょう））に念仏堂（現在の唯念寺（ゆいねんじ））を建立している。そ

「南無阿弥陀仏」（西安寺第24世謹製）
十　三　仏　像
弘　法　大　師　像
阿弥陀如来像？
「観世音菩薩　南無阿弥陀仏　大勢至菩薩」（唯念筆）
弘　法　大　師　像
善　光　寺　如　来　像
「日月　清明　戦没者英霊位」
「南無阿弥陀仏　明治三十四年八月二十三日 駿東中部大念仏　蓮華講各村世話人連盟」

1　中駿大念仏講の掛軸
（1993年9月8日　深良上原公民館）

授　戒　会　像
弘　法　大　師　像
「富岡地区殉国英霊証大菩薩」（1984年秋彼岸）
釈　迦　涅　槃　像
善　光　寺　如　来　像
十　三　仏　像
百　　観　　音

2　富岡大念仏講の掛軸（1993年9月
御宿新田コミュニティーセンター）

図表4－11　大念仏講の掛軸

の独特の書体の南無阿弥陀仏の六字名号碑が、この裾野市域にも数多く建てられている（図表4－12参照）。市域で最も古い唯念名号碑は、茶畑の願生寺境内の一八四三（天保一四）年のもので、その後、毎年あるいは隔年のように次々と建てられている。唯念が八八歳の米寿の年には三基も建てられている。市域の人たちの間の唯念に対する継続的で熱心な信仰の様子がうかがえる。そしてよく注意して見ると、それら市域に建てられた唯念名号碑一八基のうち、最後の富沢の一基を除けばすべては黄瀬川東岸に集中して建てられている。これは、中駿大念仏講が「唯念さんの念仏講だ」という言い伝えとよく符合している。

しかし、一八四三（天保一四）年の市域で最も古い茶畑の願生寺境内の唯念名号碑を見ると、その正面に「南無阿弥陀仏　天下和順　日月清明　唯念（花押）」とある。また、台座下段の正面に「念仏講中」とあるが、台座上段の左側面から背面にかけては次のような近郷の二二カ村の名が刻まれている。「茶畑村、公文名村、久根村、深良村、岩波村、上ヶ田村、千福村、大畑村、石脇村、佐野村、二本松、定輪寺、富沢村、二ツ谷村、堰原村、伊豆島田村、麦塚村、伊豆佐野村、萩窪村、幸原村、上土狩村、水久保村」の二二カ村である。裾野市域にも黄瀬川東岸にも限定されない非常に広い範囲である。

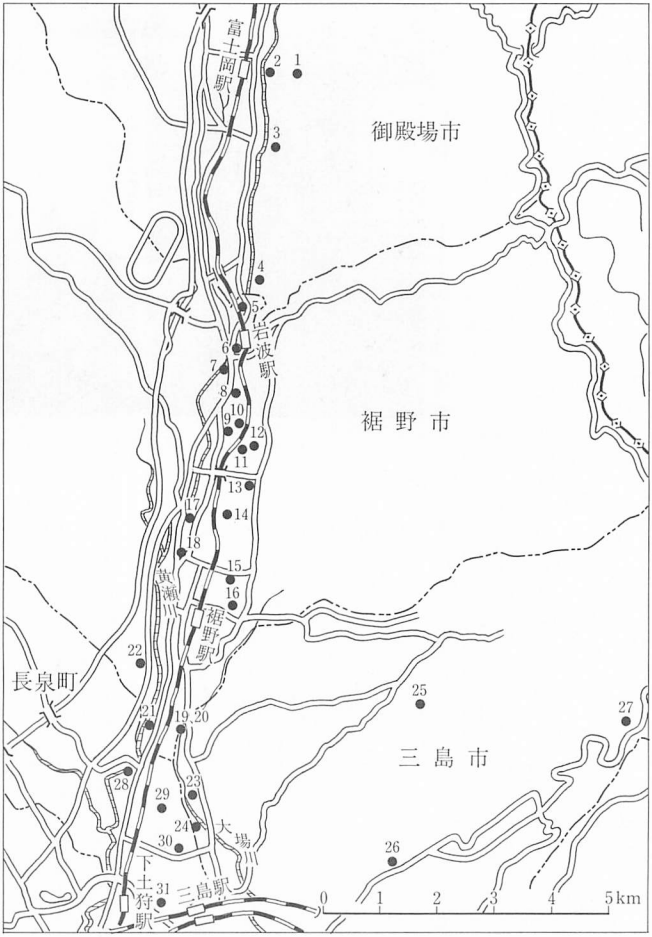
一方、現在、中駿大念仏講が所蔵している一九〇一（明治三四）年八月二三日の日付のある「駿東中部大念仏」と書かれた掛軸には、御殿場市神山から三島市佐野までの村々のうち旧富岡村の六カ村と平松新田を除いた一二カ村の世話人の名前が記されている。一九〇一（明治三四）年八月二三日といえば、唯念の没後二一年目の命日である。これによれば、当時はすでに現在と同じように中駿大念仏講と富岡念仏講とは分かれていたことがわかる。

それについて、現在の言い伝えでは、もと駿東中部大念仏講という講があったが、寺の住職の間で話し合って、中

市町村	No.	建立年月日	建立者	所在地
御殿場市	1	1883(明治16)年2月19日		二子 二子墓地参道左
	2	1879(明治12)年5月	蓮華講中・上屋平重郎ほか4名	二子 二子橋四叉路
	3	1858(安政5)年4月		大坂 金比羅神社前
	4	1856(安政3)年	念仏講中	神山 尾尻地蔵堂前
裾野市	5	1848(嘉永元)年4月吉日	たみ・講中	岩波 薬師堂境内
	6	不明		岩波 岩波駅前
	7	不明		深良新田 黄瀬川・新川合流点
	8	1852(嘉永5)年3月	新田 念仏講中	深良新田 関東GS前
	9	1850(嘉永3)年8月吉日	遠道原 念仏講中	深良遠道原 観音堂前
	10	八十八歳(明治10年頃)	切久保 念仏講中	深良切久保 バス停前
	11	不明		深良和田 井沢家庭先
	12	八十八歳(明治10年頃)	和田 南堀講中・井沢常七ほか	深良和田 慈眼庵前
	13	1850(嘉永3)年季穀旦	念仏講中・松井庄左衛門ほか	深良町田 三叉路
	14	1846(弘化3)年2月27日	勝又弥四郎・村内講中	久根 三共製袋正門前
	15	1868(慶応4)年3月	念仏講中	公文名 公民館前
	16	1843(天保14)年8月吉日	茶畑村 ほか21ケ村	茶畑 願生寺境内
	17	1845(弘化2)年4月8日	植松安左衛門	石脇 大柄沢橋西
	18	1857(安政4)年2月吉日	佐野村ほか17ケ村・念仏講中	佐野 佐野バス停前
	19	1855(嘉永8)年8月		伊豆島田 不動尊境内
	20	不明		伊豆島田 不動尊境内
	21	1877(明治10)年12月	中講義滝沢	水窪 旧国道246西側
	22	1879(明治12)年5月吉日		富沢246バイパス下
三島市	23	1867(慶応3)年3月大安日		徳倉 青木橋上墓地
	24	1879(明治12)年5月吉日	蓮華講中	幸原 耳石神社境内
	25	1878(明治11)年6月日	蓮華講中	沢地 龍沢寺近く
	26	1879(明治12)年4月8日	蓮華講中	塚原新田 宗福寺境内
	27	1876(明治9)年7月日		山中新田 芝切地蔵境内
長泉町	28	1867(慶応3)年3月日		納米里 普向寺東南
	29	1848(嘉永元)年12月	上土狩村中	上土狩 本村・惣ケ原境
	30	1878(明治11)年3月20日	講中・鈴木平右衛門ほか8名	中土狩 如来寺東南
	31	1869(明治2)年3月	土邨中・室伏平右衛門ほか6名	下土狩原 清躰寺南

図表4－12－1　裾野市とその周辺の唯念名号碑一覧表

駿大念仏講と富岡大念仏講とに分かれたのだという。なお、中駿大念仏講は、講員の高齢化と後継者不足のため、一九九四年三月をもって解散した。



図表4－12－2　裾野市とその周辺の唯念名号碑の分布
（No. は図表4－12－1の一覧表と対応する）

写真4－33　富岡大念仏講（下和田）

富岡大念仏講

富岡大念仏講は、旧富岡村のうち、北は下和田から南は葛山、御宿新田までの地区が参加している。昔は千福や大畑も入っていたという。講員もかつては一〇〇名以上もいたというが、最近では六〇名程度になっている。

大念仏講は、春の彼岸と秋の彼岸を中心にその月の日曜日にやっている。ヤドの順番は、春の彼岸には下和田→御宿新田→葛山（上城・中村・下条の輪番）→上ヶ田→金沢→今里で、秋の彼岸には下和田→今里→上ヶ田→金沢→葛山（田場沢・中里の輪番）→御宿新田の順に務める。近年、上ヶ田と金沢が抜けてヤドをやっていない。

念仏は掛軸を掛けて行われるが、掛軸の内訳は図表4－11にあげてあるとおりである。念仏の内容は、「香偈文」から始まり、「釈迦経」「観音経」「光明御真言」「弘法大師御詠歌」「十三仏如来」「六道地蔵尊」「善光寺如来御詠歌」「祈願文」「戦死者英霊供養念仏」「御詠歌」「供養生霊和讃」「慰霊和讃」「西国三十三所観世音御詠歌」で終わる。最近では、念仏はだいたい午前中で終わり解散となるが、かつては弁当持ちで集まり、念仏のあとは余興をやったりして一日中楽しんだものだという。講中の荷物は、念仏が終わるとすぐに次のヤドの当番が運んでいき、預かっておく。一年間の念仏講が終わると慰安旅行に出かけている。

この富岡大念仏講は、善光寺如来をまつるもので、唯念についてはほとんど知らないという。むしろ、言い伝えとしては「富岡大念仏講は、千福の良吉さんが作ったものだ」という。良吉さんが一人で寄付を募って苦労して大念仏講を組織したといわれる。現在、千福は大念仏講の仲間に加わっていないが、かつて千福でも念仏講の女性たちが荷物を背負って喜んで出かけていったのを記憶している人もある。富岡大念仏講の『大念仏御詠歌集』の最初の頁に、「としよりて　ごしょうを　ねがう　ねんぶつに　でらるゝ人は　かほうなりけり　良吉作歌」とあり、横山良吉が確かにこの富岡大念仏講の指導的立場にいたことがわかる。

先にも指摘したように、幕末から明治にかけて市域の黄瀬川東岸の一帯にさかんに建てられた唯念名号碑が、この富岡村には一基も建てられていないところからすると、黄瀬川西岸の富岡大念仏講は、黄瀬川東岸の中駿大念仏講とはまったく別の活動を展開させてきたものと思われる。

戦没者供養

中駿大念仏講と富岡大念仏講とに共通する点の一つが、一般的な死者や先祖の供養というだけでなく、積極的に戦没者の供養を行ってきている点である。前掲の図表4－11にも見るとおり、念仏のときに掛けられる講所蔵の掛軸にはいずれも戦没者の霊をまつるものがあり、それとは別に、中駿大念仏講の所蔵する文書には「駿東中部戦死病疫者大過去帳　昭和弐拾八年九月十日」と、「昭和三十二年四月　中駿戦死者過去帳　中駿大念仏講」とがある。これらの過去帳は檀那寺の住職に書いてもらったものだといい、一九五七(昭和三二)年のものは一九五三(昭和二八)年のものに掲載されなかった別の寺の檀家のものである。富岡大念仏講にも、講長の持ち回り文書の中に「昭和二十三年三月廿九日　大東亜戦争戦死病疫者名簿(貼紙)明治三十七八年戦死者」があり、このときの講長は酒井忠助、世話人は横山良吉である。

写真4－34　大題目講（深良上須）

中駿大題目講

中駿大念仏講が組織されているそれと同じ、黄瀬川東岸一帯の三島市伊豆佐野から御殿場市神山までの範囲に、中駿大念仏講と重なるように中駿大題目講が結成されている。講宿は南の方の地区から北に上がってきてまた下にもどるという輪番制になっている。大念仏講と同様に講員が減少し、三〇～四〇名位になってしまっている。一九九三年現在では、平松、久根、深良の南堀・町田・上原・上丹・新田が参加している。一九九三年には、平松→久根→深良の上原→深良の新田という順で講宿を回した。大念仏講に入っている講員でも大題目講の講員になっており、構成員が重なっているという。

初講は一月二〇日でこれは必ず行う。一一月一八日をお会式（えしき）といって終い講とする。初講には、「中駿大題目講」と染め抜いた手ぬぐいを講員全員と手伝いの衆に配る。お会式の方は現在では必ずしもやるとは限らない。また、昔から一年間に二回はユコウカイ（湯行会）といって日帰りで慰安の温泉旅行に行っている。

講宿は各地区の大きな家を借りてその中に六〇名くらい入ってやった。家の新築などをすると、大題目講をやってくれという申し込みがあったものだという。現在では公民館を使ってやっている。

大題目講の内容は、『日蓮聖典』という経典を読経するものである。だいたい午前九時から始めて昼の一二時まで

にはひととおりが終わる。昼食と休憩をとって、午後一時から再び経典の読経をくりかえすが、午後は簡単にやって三時頃には終わる。

この大題目講には、その結成の事情を示す記録が残されている。一九〇三(明治三六)年八月一日付の「駿東中部題目講会連名簿」がそれである。これによれば、この講に加入を希望する者は日蓮宗と他宗とを問わず入会できるものとし、会長、副会長、世話係をそれぞれ置き、毎月一回会員の家に参会して題目講を行うこととしている。そして、この講は、一九〇三(明治三六)年八月一日からむこう五年間を一期として発足し、その後の続会か、散会かはその節に決めることとされている。このときの連名簿には、神山一三名、御宿三名、石脇(いしわき)八名、佐野三七名、二本松三二名、久根七名、公文名二五名、茶畑八名、平松新田一名、深良六六名、岩波二名、の計二〇二名の講員名が記されている。また、講の集まりのときに掛ける掛軸にはオマンダラ(お曼陀羅)と呼ばれるいわゆるひげ題目のものがいくつかあるが、その中の一九七二(昭和四七)年一二月吉祥日付の掛軸には、この講の発起人として、小林由太郎ほか、室伏孫七、飯田友吉、一ノ瀬清次郎、吉田民十郎、鈴木嘉十郎、今関九平の七名の名前が記されており、その下に歴代の会長の名前が記され、初代会長は小林由太郎となっている。

そして、掛軸の中でもひときわ目立つのが「小林由太郎先生」と書かれた肖像画である。これらにより、この中駿大題目講というのは、一九〇三(明治三六)年八月一日に小林由太郎を初代会長として発足したものであることがわかる。

そしてもう一つ、注目されるのが、オマンダラの掛軸の中で最も古い一九〇八(明治四一)年のものである。そこには、「明治四十一年二月二十一日故柳沢文渓先生第二十五回忌為追福供養之」とある。これは、この地で手習い師匠

として多くの子弟を教え、その門人は八百人あまりに達したといわれる柳沢文渓（やなぎさわぶんけい）の二五回忌に作られたものである。

柳沢文渓は一八一五（文化一二）年頃江戸の幕臣の子として生まれたが、二八歳のとき耳が聞こえなくなり二年後に日蓮の信仰に入り、諸国を巡っていた。弘化年間（一八四四～一八四八）に神山の日蓮宗寺院本国寺（ほんこくじ）に入り、その後安政年間（一八五四～一八六〇）に久根の安楽寺（あんらくじ）（現在廃寺）の第二三世住持となった。そして、六〇歳代も半ばを過ぎた頃には、深良の上原の小林由太郎家に身を寄せていた、といわれる。この間に多くの子弟を教え、一八八四（明治一七）年二月二一日に没し、深良の上丹の日蓮宗の庵、帰正庵に葬られた。その庵の前には門人たちによって筆子塚が建てられている。

中駿大題目講の創立の発起人の一人で初代会長であった小林由太郎は、その柳沢文渓の門人であり、晩年の生活の面倒をみた人物である。小林由太郎自身も、深良の上原にある「日蓮さんの車返しの霊場」といわれる最復寺（現在廃寺）の堂を再興しており、師匠への尊敬と同時にその影響から日蓮宗へ帰依していたことと思われる。

日蓮宗の寺が市域にないのに、題目講が存在することの理由は、以上のような特定の人物の人間関係とその影響によるところが大であったと考えられる。

なお、この中駿大題目講の創立が一九〇三（明治三六）年八月一日であり、それがちょうどこの地域にとってかねてよりの一大事件であった深良用水をめぐる逆川（さかさがわ）事件が解決して和解調停式が行われた年であることとの間には何か関係があるのだろうか。和解調停式はこの年の九月九日であり、それに出席した当時の深良村村長は他ならぬ小林由太郎であった。

(二)　ヨシダサンの信仰

市域のヨシダサン　裾野市域には、ヨシダサン(吉田さん)と呼ばれる祭りが行われている。そのヨシダサンの祭りの特徴は、普通のウジガミ(氏神)や鎮守の祭りのように一つの地区に神社がありそれをその地区で単独で完結してまつっているというものではなく、ヨシダサンと呼ばれる神輿を近隣の複数の地区で共有していて、一年ごとにその神輿が次々と祭りの当番地区を変えながら順送りに渡されていくという点にある。そして、それをまつる地区が広い範囲に広がっているという点にある。

市域では、北は岩波から南は麦塚までつながる下十カ郷のヨシダサンと、深良のヨシダサン、下和田のヨシダサンの三つが伝えられている。このうち下十カ郷のヨシダサンの方は北は御殿場市の神山、南は三島市の伊豆佐野まで含み、市域を超えてまつる地区が広がっている。

下十カ郷のヨシダサン　まつっている地区は、北は御殿場市南端の神山、裾野市北端の岩波から、南は裾野市南端の麦塚、三島市北端の伊豆佐野までの南北広い範囲に広がっている。神輿が渡される順番は次のとおりで、一〇年に一度まわってくる。

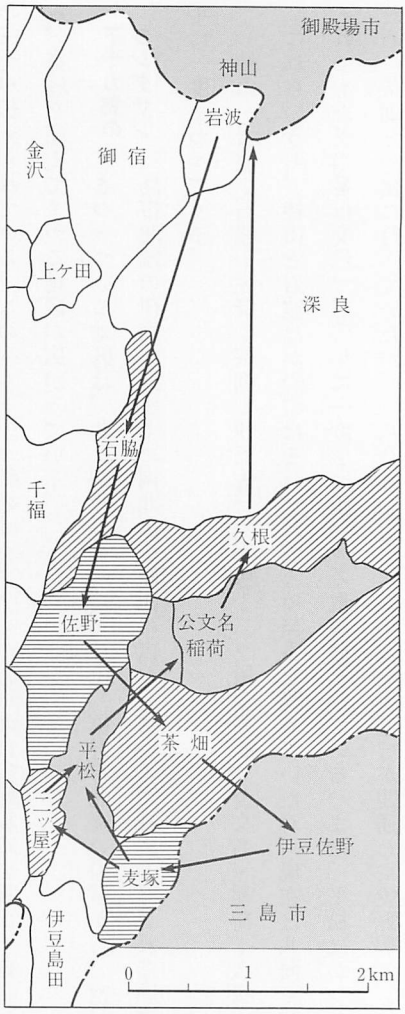
神山・岩波→石脇→佐野→茶畑→伊豆佐野→麦塚→二ツ屋→平松→公文名・稲荷→久根→

これらのうち、神山と岩波はかつてはそれぞれ別々に当番を務めていたが、現在は共同で行うようになっている。それでもただ当番は交代で二〇年に一度ずつ担当する取決めをしている。また、平松はかつては小さいムラであったために茶畑と一緒に行っていたが、一八八九(明治二二)年に東海道線が開通して佐野駅(一九一五年裾野駅になる)が

できて戸数が増えたため分離したという。伊豆佐野はかつては近くの萩と組んでいたが、萩は最近になって脱けた。二ツ屋は一〇年ごとに当番になるのではなく二〇年ごとに隔回で当番を務めている。

祭りの日は、毎年三月二八日が神輿のオワタリ(お渡り)で、四月四日が本祭りの日である。三月二八日の神輿のオワタリの日には、まずカベツ(家別)といって、これまでの当番であった地区の家々を神輿がまわる。神輿を担ぐのは、当番地区の若い男衆で法被(はっぴ)姿や白装束姿である。神輿の受け渡し場所は当番地区と次の当番地区との村境である。

たとえば、一九九三年三月二八日の神輿のオワタリは佐野から茶畑へであったが、神輿の受け渡しは天理教の教会近くの踏切りのところである。村境では前年度の当番地区の若い衆と次の当番地区の若い衆との間で、神輿を渡せ、渡さない、と激しく奪い合うのが特徴である。昔はよくけんかになったものだという。



図表4－13　下十カ郷（御殿場・裾野・三島）のヨシダサン巡行
※二ツ屋は隔回で当番を務めている。三島市萩はかつて伊豆佐野と組んで参加していたが現在は脱会

次の当番地区の若者に渡された神輿はその地区の神社に担ぎ込まれる。茶畑では神輿は氏神の浅間神社へ運ばれてそこに安置される。そして、佐野と茶畑の両区の役員が参加して鎮座式が行われる。

参加役員の構成は、吉田神社祭典委員、次の当番地区茶畑の氏神である浅間神社の氏子総代、茶畑九区の各組長、大区長、前年度当番区の各役員である。神主の祝詞奏上などがあり、鎮座式の終了後、両区代表(祭典委員、氏子総代、大区長)立ち会いのもとで、神輿、道具類(御幟長持、高張提灯、行灯、洗米台、賽銭箱)、文書、などの引き継

1

2

写真4－35　ヨシダサン（茶畑）
1　佐野から茶畑へ
2　神輿の巡行

ぎ式が行われる。このとき神輿に異常がないかなどの確認が行われる。そして、引き継ぎ式の終了後、簡単な直会（なおらい）がある。受け入れ側の地区では家ごとに「奉納　吉田神社」と書いたのぼりを立てる。

祭りのホンビ（本日）は四月三日と四日である。

三日はヨシダサンを迎えた側でカベツが行われ、若い衆が八人から一〇人で神輿を担いで村中を練りまわる。ヨシダサンの神輿は暴れ神輿だといって激しく揺すられるが、不思議と怪我人は出なかったという。昔はこのときもあちこちでよくけんかをしたものだという。賽銭箱を担ぐ者、太鼓を叩く者なども一緒に行列を組み、「ロッコンショウジョウ（六根清浄）」の掛声を掛けながら村中を清めてまわる。地区内のあちこちでは神輿を担ぐ若者たちに休んでもらい酒を飲んでもらう。

茶畑の浅間神社では素人のど自慢のカラオケ大会をやったり、地方の芸能人を呼んだりして余興をする。神輿は、本祭りのときは浅間神社に安置しておくが、それが終わればゴーシャサン（合社さん）の社と呼ばれる境内の小さい社の中に一年間納めておき、翌年次の伊豆佐野へと渡す。

なお、神山ではウチハヤシ（打ち囃子）といって神輿に囃子がつくが、現在これをやっているのは神山だけである。かつてはどこの地区でもやっていたという。

また、神山では、地区が広いので、神輿が家々を回るカベツ（家別）は二日がかりでやり、神輿をどこかの家に泊めることになるが、神輿を泊めるのは縁起が良いといってどこの家でも泊めたがった。多くは神輿のヤド（宿）は氏子総代の家が当てられたりしたが、最近は公民館に泊めることになっている。

深良のヨシダサン

まつっている地区は深良の内だけで、先の十カ郷のヨシダサンが広い範囲に広がっているのとは対照的である。深良は、近世から近代まで深良村として存在していた広い地区で、ほぼ中央部の天田橋（あまだばし）を境として、天田上と天田下とに二区分されている。そして天田上、天田下ともに、その中にモヨリと呼ばれる単位がある。ヨシダサンは天田上、天田下が一年交代でまつっているが、天田上、天田下ではさらにそれぞれ地区内のモヨリを三つに再編成してそれを祭りの当番としながら務めている。天田上では、原と上須、新田、上原と上原団地の三つ、天田下では、切遠、和市と南堀、町震の三つである。だから当番は六年に一回まわってくることになる。

神輿はウチミヤ（内宮）とも呼ばれ、一年交代で天田上と天田下のソトミヤ（外宮）に安置される。ソトミヤ（外宮）は天田上では上丹の神明神社、天田下では町田の深良神社である。

祭りの日は、毎年九月一日である。

現在の祭りは、当番地区の神社に神社総代と区長などの役員が午後二時頃に集まって神主の祝詞奏上があり、祈禱して全員でお神酒をいただいた後、軽トラックに神輿を乗せて次の当番地区に引き渡す。かつては、総けやき造りの神輿が若い衆に担がれて村の中をまわって厄払いをしたという。太鼓を叩く者、「奉納吉田神社」と書かれたのぼりを持つ者などが続き、オサンセン（お賽銭）が集められた。ところどころにお旅所といって酒や茶、食べ物などで接待する場所が設けられていて時間をかけて村中をまわった。また、家々ではこの日ホウソウマンジュウ（疱瘡まんじゅう）と呼ぶ小麦まんじゅうの上に赤い点をつけたものをこしらえて神社に供えたりもしていたが、現在ではこれを作る家も少なくなった。

神輿の受け渡しは、かつては両地区の境の天田橋で行われていた。送る側の当番区が橋まで担いでいくことをオデ

写真4－36　下和田のヨシダサン
（下和田・浅間神社）

マシ（お出まし）といい、迎える側の当番区はオムカエ（お迎え）と呼んでいた。このオデマシ式、オムカエ式では神主が祝詞をあげ神輿が受け渡される。このとき、村をまわって集めたオサンセン（お賽銭）も引き渡されるが、自分の地区で集めた賽銭を渡したくないため、橋のたもとでわざと賽銭箱をひっくり返すといういたずらも昔はよくやったという。現在は、橋の近くの市役所深良支所前広場で受け渡し式を行っている。

下和田のヨシダサン

市域の黄瀬川東側で広く信仰されているヨシダサンに対して、下和田のヨシダサンは祭日、その信仰の意味が異なっている。

下和田では、「もともと、ヨシダサンは十五夜をまつる」と、いわれてきたという。したがって、かつては旧暦八月の一五日が「ヨシダサンのアタリビ」とされ、祭日が当てられていた。戦後の一九五〇年代頃まで、十五夜の夜には夜店も出て賑やかな吉田神社祭礼だったという。また、相撲も盛んに行われ、中・北駿方面からも相撲を取りにやって来たという。現在の祭日は、十五夜の日に近い日曜日が当てられ、相撲も行われなくなった。

下和田の吉田神社は浅間神社境内にまつられている。祭礼は、社前で一同参拝して終わり、直会がある。祭礼当番は、下和田一三組の一組ごとに輪番で務める。

ヨシダサン信仰の起源

このヨシダサンの祭りの起源については、それぞれ次のような言い伝えがある。

まず、下十カ郷のヨシダサンについては、いまからおよそ二一〇年前、この一帯で疫病が流行した。そのとき佐野村の玄意（げんい）と茶畑村の新左衛門という二人が京都の吉田神社へ行き、吉田神社の分霊を迎えてきたところ、霊験あらたかにも悪疫はおさまった。それ以来このヨシダサンの分霊をこうしてまつっているのだという。

深良では、このときそのヨシダサンの祭りには加わっておらず、深良が独自にヨシダサンをまつるようになったのは明治に入ってからだという。やはり深良でもその頃にはやり病が起こりあわてて他の地区を見習い、疫病退散のために霊験あらたかなヨシダサンを迎えたものという。

一方、このヨシダサンの京都からの勧請（かんじょう）については、記録が残されている。次の史料がそれである。

まず、「十カ村吉田宮祭礼当番引継札」一八二九（文政一三）年（『裾野市史』第三巻資料編近世〈資料番号二六五〉）であるが、これは村別の氏子数の書き上げで

一百三拾軒　神山村　名主　源治郎
一百拾軒　佐野村　名主　源五郎
一百二拾七軒　茶畑村　名主　甚蔵
一三拾三軒　麦塚村　名主　與惣右衛門
一京都願惣代　佐野村　玄意
茶畑村　新左衛門

一百九拾軒　岩波村　名主　伴蔵
一六拾軒　久根村　名主　源蔵
一二拾三軒　平松新田　与頭　孝蔵
一拾四軒　二ツ屋新田　名主　佐兵衛
一寄氏子　御宿村　甚兵衛
大畑村　善兵衛

一三拾三軒　石脇村　与頭　良蔵
一六拾五軒　公文名村　名主　宇平次
稲荷村　伊豆佐野村　名主　直右衛門
一百壱軒　一銚師　御殿場村　儀兵衛

などの記事が見られる。

また一八五八（安政五）年午八月の「吉田宮勧請ニ付寄進（ママ）名細控帳」（『裾野市』史第三巻資料編近世）には、以下の

ように記されている。

一当午年七月盆後より、前代未聞之悪病富士郡東海道吉原宿辺より流行いたし、夫より三嶋宿抔ハ誠ニ八ケ敷(ママ)相成、段々道上辺江茂流行ニ相成、俗ニ三日ころりと申急病ニ御座候而皆人恐れをなし、農家も町家も家業ヲとめ、唯々信心一方ニ而、女ヤ子ともニ至まて毎日こり抔ヲとり宮参詣する事一ニいたし、実ニ此世のめつする程のよふニ思ひ、然ル所此近村ニも悪病数多御座候へとも、深良村義ハ至極穏ニ而病気更ニ無之、日増に信心強ク相成申候、然ル内ニ何やらあやしき事とも世間之人々見出し、是病気ハくだ狐の業と皆人考へ付、との村ニ而も昼夜鉄砲ヲ打、其上守り袋へハみやうがのしら根・黒大豆・くわの木の葉を入、皆子供等ニ至る迄腰に付、又家にハ門口へ梶の葉・とうからし・みやうがの白根・赤き紙是ヲつるし、せん香・火縄を門口ニ置、皆人恐驚祈願、辻切抔能きと言事ハ村中一同信心致し申候、右之趣ニ候故村中一同相談ノ上、京都吉田様ヲ勧請致し度心願ニ付、以幸便右之通り三嶋宿世古六太夫殿方へ差出し、直様吉田殿へ差送り申候文言

奉願

一吉田大神御霊実　御鎮札、右者村内家数人別差加へ年来心願御座候処、今般許請奉勧請致一同発気仕候、依之為御祈願料として金七両弐分奉献納候、何卒為村内安全之早速御鎮札拝受被仰付候様奉願上候、已上

稲葉金之丞知行所
駿州深良村
百姓代　平　八印
同　伝右衛門印

組頭　勝右衛門同
同　太右衛門同
同　源　蔵同
同　祐左衛門同
同　権左衛門同
同　甚左衛門同
名主　新　七同
同　治　兵衛同

安政五年八月日

吉田殿

御役所様

夫より添手紙御用人中江差向差出ス文言

以飛脚一筆啓上仕候、秋暑之節御座候へ共、各様益御安全可被成御凌珍重御義奉賀候、然者吉田大神御勧請申度年来心願ニ御座候処、今般御鎮札拝受仕奉勧請度、別紙願書并御祈願料として金七両弐分奉献納候、宜御披露被成下度願上候、次ニ御掛中様へ御菓子并ニ御雑費料として金弐両弐分也進上仕候、万端不案内之義ニ付、可然御取計願上候、将又当節悪病流行ニ付、自由ヶ間敷御願ニ御座候へ共、早速拝受被仰付候様偏ニ御執成奉願上候、

右願之義村方より罷出御願可申上義ニ候へとも、世間ふつそ(物騒)ニ付他行難也候間、乍恐書面を以御願申上候、失礼之段真平御容免可被下候、扨又御鎮札之儀ハ恐多候へ共、駅継ヲ以三嶋宿世古六太夫方迄相届候様御贈被下度奉願上候、先ハ右申上度以急札如斯ニ御座候、以上

午八月十六日

駿州深良村
名主発起人　大庭新七
同　同断　小林治兵衛

神祇官御掛
御役人中様

右之通書面弐通相認メ、金拾両也相添八月十六日三嶋宿飛脚屋迄差出し申候　今度手控へ（後略）

これにより、一八五八（安政五）年の夏から秋にかけて前代未聞の悪病が流行し、人々が京都の吉田神社に分霊の拝受を依頼したことがわかる。その時の深良村の名主は大庭新七と小林治兵衛であった。

また、駿東郡伏見村（現在清水町伏見）の文書「萬覚帳」一八二三（文政六）年未四月（勝俣恵一朗氏所蔵文書）には「文化十四丁丑年京都吉田家之使者鈴木内善(ママ)与申者村ゝ神社御改与して沼津松屋旅宿ニ而罷出申候其節村方より書上ニ者（以下略）」とあり、京都の吉田神社の社家の鈴木内膳という人物が同村の神社改めを行った記録がある。この鈴木内膳は、深良の吉田神社勧請のときにも下十カ郷の一八五九（安政六）年六月の「吉田神社幣帛願」に際してもそれぞれの村と吉田神社との仲介に力を貸している。これらの史料によると、下十カ郷のヨシダサンは、村別の氏子数

地区名	現市町村	旧村名	祭礼日(ホンビ)	神輿渡御(オクリムカエ)	勧請年代	由来
上野ヨシダサン (上野、久根)	駿東郡 小山町	旧北郷村			不明	疫病流行による
北郷のヨシダサン (一色、下小林、上古城、大胡田、用沢)	駿東郡 小山町	旧北郷村	10月10日 (一色、下小林) 10月25日(大胡田)	祭典当日	1858(安政5)年	疫病流行による
中畑のヨシダサン (中畑)	御殿場市	旧玉穂村			1781(天明元)年	吉田神社分霊
印野のヨシダサン (堀金、時の栖、小木原)	御殿場市	旧印野村	10月16、17日 (昔同月18、19日)	祭典当日 (神輿の巡行)		由来は不明　アラガミサマと呼ばれる
南筋のヨシダサン (地蔵堂、塚本、萩原、二枚橋、横通、東山)	御殿場市	旧御厨村	オクリムカエの翌日	9月20日前後の日曜日(昔19日)	1882(明治15)年	疫病流行による
八ケ郷のヨシダサン (沼田、中清水、二子、竜、大坂、萩蕪、中山、駒門、塚原)	御殿場市	旧富士岡村 旧高根村	10月17日 (昔8月1日)	10月10日	1806(文化3)年	疫病流行による (身入狐)
下十ケ郷のヨシダサン (神山・岩波、石脇、佐野、茶畑、伊豆佐野、麦塚、二ツ屋、平松、公文名、久根)	御殿場市 裾野市 三島市	旧富士岡村 旧小泉村 旧深良村 旧北上村	4月4日	3月28日	1801(享和元)年 1830(文政13)年	疫病流行による 疫病流行による
深良のヨシダサン (天田上、天田下)	裾野市	旧深良村	9月1日	祭典当日	1858(安政5)年	
下和田のヨシダサン (下和田)	裾野市	旧富岡村	9月1日	祭典当日		
香貫のヨシダサン (楊原神社)	沼津市	旧楊原村			1852(嘉永5)年	

『御殿場市史』別巻Ⅰ考古・民俗編(1982年・御殿場市)を参考にした。

図表4－14　駿東のヨシダサン

を書き上げた一八三〇(文政一三)年の「十カ村吉田家祭礼当番引継札」の文書が書き残された頃、言い伝えのとおり佐野村の玄意と茶畑村の新左衛門という二人(佐野村の医師三好玄意、茶畑村の芹沢新左衛門、大畑村の市川善兵衛の三人)が京都願総代となって京都吉田神社からその分霊を勧請してきたものだということがわかる。

また、深良のヨシダサンは、言い伝えでは明治になってから勧請してきたものだといっているが、記録によれば一八五八(安政五)年のコレラ大流行のときに勧請してきたものだということがわかる。

ヨシダサン信仰の広がり　このヨシダサンの信仰は、裾野市域だけでなく、近隣の御殿場市域にも見られる。さらに、ほぼ同じ時期に甲斐から信濃にかけての地域でも吉田神社に参り、吉田神社を勧請する村があったことが知られている。図表4－14は、駿東でヨシダサンの信仰が見られる事例を整理してみたものである。

なぜ、これらの地域に限ってヨシダサンの祭りが定着し今日まで伝えられているのか。これはたいへん興味深い問題であるが、その決定的な理由は残念ながらまだ明らかでない。

(三)　岩船地蔵の流行

今里の岩船地蔵　今里の集落の端に立派な地蔵堂がある。その中には岩船地蔵と呼ばれる石の地蔵がまつられている。厨子の中に納められた地蔵は本尊だけが姿を見せていて、台座の様子は確認できない。ところが一九九四年の一月に地蔵堂が改築されることになり、はじめてその姿を確認することができた。厨子が取り除かれた地蔵は、確かに岩船地蔵と呼ばれるように、石の船に乗っている。立派な舳先をもつ大きな船の上に正面を向いて地蔵が立っているのである。これは市域では珍しい地蔵である。市域と言わず、静岡県内ではほとんど知られていない姿と言えよう。

この地蔵の由来について今里では次のように伝えられている。この地蔵は須山から今里に持ってこられたが、それを夜には須山に返すという日に災難があって須山に戻すことができなかった。そのため、そのまま今里に滞在することとなって、地蔵堂が作られ、今までまつられているという。これは非常に重要な伝承であり、岩船地蔵の来歴を教えてくれるものである。

現在、岩船地蔵の祭りは毎年七月二四日に行われている。前日の二三日の夜から地蔵堂に年寄りが集まり夜通し念仏を唱えながら数珠繰りをする。また御詠歌を唱える。参詣に来た人には岩船地蔵の姿を刷った札を渡している。そこには「家内安全・交通安全」と「駿州今里村岩船地蔵」と書かれている。

岩船地蔵の御詠歌　御詠歌を唱える際に参考にしている写本がある。そこに記された唄は以下のようなものである。

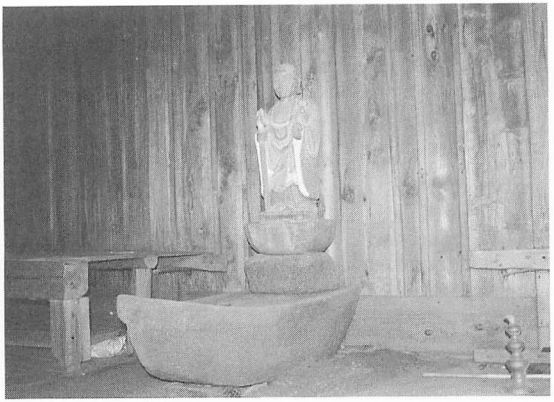


写真4－37　岩船地蔵（今里）

図表4－15　岩船地蔵の札

今里岩舟地蔵尊御詠歌

又助さんと云う人がこの堂を作った
今伊豆にいる

一ばんに
　今里の辻に建ちたる地蔵尊　船のろでせぐあくま病気を
二ばんに
　みな人の心をうけて地蔵尊　願をかなうここに岩舟
三ばんに
　尊きや岩舟尊と来てねがう　諸病なおしてかえるうれしさ
四ばんに
　ありがたや岩舟尊と来て見れば　いつもたえせぬ礼の人人
五ばんに
　みな人のあつまり給う岩舟え　このよねがえばのちのよまでも
六バン　つれだちて一度は参れ岩舟え
　悪事災難のがすせいがん
七バン　よろづよりくげんをすくう地蔵尊
　ちかいも固く結ぶ岩舟

八バン　岩舟にのりて守るは地蔵尊
　はやり病気をのがすうれしさ
九バン　のちのよは西の地蔵とねがうべし
　みだのたりきをたえづ忘れず
十バン　こころざすたからは明治十九年
　ふしん成就は戊の若春
十一　じひ深きしゅじょうさいとの地蔵尊
　山のみふねにのせ給うらん
十二　あしたかの西のふもとは今里の
　こせば都へ渡す岩舟
十三　げんせをばむ病へんめいおん守り
　花の浄土へ末はのせゆく
十四　みな人の心の波は静かにて
　なむあみだぶつとなう岩舟
十五　み仏のちかいも固き岩舟に
　のせて早やゆくみだの浄土へ
十六　はるばると訪ねて見れば雲明れて

岩舟はいす今の里かな

十七　ありがたやつねづね参れ岩舟え
りやくあたえる心うれしや

十八　くにぐにへ岩舟尊と音ひびく
参る人人かづかぎりなく

十九　よを照らす岩舟地蔵と来て見れば
栄えし地蔵光りなるらん

二十　来る人のねがいを叶う地蔵尊
あくまは波で打はらうなり

二十一　しゃかはすぎみろくはいまだいでぬまの
やみ路を照らすなむ地蔵尊

二十二　なむ地蔵たいひのちかいあやまらす
すくわせ給へこのよのちのよ

二十三　富士おろし辻に建ちたる岩舟え
参る心はしよどなるらん

二十四　駿河路にほこうをはこぶみな人よ
岩舟尊のりやく欲しくば

二十五　悪ま病こない先から早や頼め
　はやりてくれは誰も頼むぞと
二十六　日と月と岩舟尊ともろともに
　光りかがやく今の里かな
　　なむ地蔵尊部落一同何ごとも無くすごします様お守り下さい
　地蔵尊が終ったらふだらくをやる

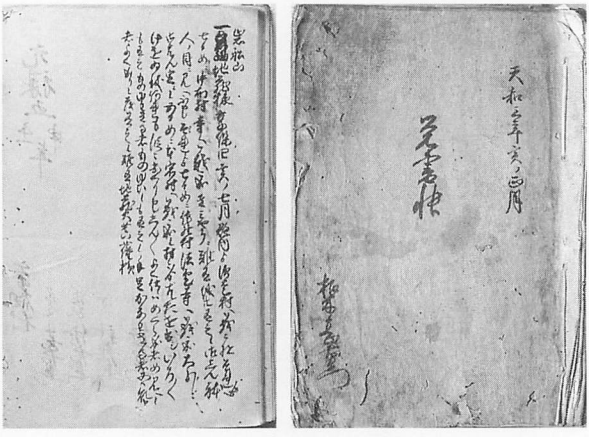
これによれば地蔵堂が建てられたのは一八八六(明治一九)年で、それは伊豆に住んでいる又助という人の尽力によるものであると記されている。恐らく地蔵堂が建立されたのは御詠歌のとおりであろうが、それが石像の岩船地蔵が今里に建立された時期を示しているわけではないと判断してよいであろう。地蔵自体は古くからあったものと思われる。

柏木甚右衛門覚書帳の記録

茶畑の柏木甚右衛門が書き残した「覚書帳」に次のような興味深い記事がある。

一岩船山地蔵様、享保四亥ノ七月、郡内より須走村へ御越被遊、それより七日めニ中畑村寺へ御越被成、きミやうニ有難儀共有之候、御しん体人ノ目ニ見へ不申候、それより七日めニ佐野村法雲寺へ御越被成、大分ニ御はん定ニ候、五日めニ本宿村へ御越被成候、村々よりはたを出シ、いろ〳〵け進為致、何れも段々おくり申候、しん〳〵よく仕候ハ、めくら成者め見へ候も有之、ものゆわさる者ものゆい候も有之候、手足かなわさる者、又ハ煩申者よく成り候茂有之候、難有地蔵大菩薩様、

これによれば、岩船地蔵は近世中期の一七一九(享保四)年七月に山梨県の郡内(ぐんない)地方から篭坂峠(かごさかとうげ)を越えて駿東に持ち



2　1

写真4－38　柏木甚右衛門「覚書帳」
1683(天和3)年（柏木正男氏所蔵）
1　表　紙
2　岩船地蔵の記載

伝えられたもので、現在の小山町須走から御殿場市中畑をへて佐野に来て、さらに長泉町本宿へ村送りされていったという。その地蔵の神体、すなわち本尊は見ることができないが、たいへんご利益があり、盲目の人が見えるようになり、手足に支障のある人や病気の人も治ったという奇跡があったという。この記事は時間が経過してから書かれたものではなく、また単なる遠くから伝えられた噂を記したものではない。当時の信仰の様相を教えてくれる貴重な資料である。

岩船地蔵は甲州の郡内から送られてきたという。それを確認するためには山梨県での岩船地蔵の建立状況を確認しなければならない。山梨県では多数の岩船地蔵が残っている。路傍にひっそりと立っているものが多く、今では今里のように信仰を集めている所はほとんどない。それらの建立時期を見てみるとやはり一七一九年が多い。郡内でも岩船地蔵が見られる。しかし、その数は必ずしも多くない。分布も郡内の北部に多く、駿東に近い南部には見られない。その点で問題は残るが、甚右衛門の「覚書帳」の記事と関連させれば、駿東の岩船地蔵は甲州から送られてきたものと判断してよいであろう。ただし、覚書帳がいうように、神体は見えない。すなわち、地蔵そのものが村送りされてきたのではなく、地蔵を華やかに飾ってまつるという方式が村から

村へ送られてきたと言うべきであろう。石の地蔵はその結果として建立されたものと思われる。

岩船地蔵の信仰の展開

今里の岩船地蔵には建立の年代は刻されていない。いつごろに建てられたものかはわからない。しかし、茶畑の柏木甚右衛門の「覚書帳」の記事と関連して理解すれば、これも享保年間に建立された可能性は高いと言えよう。今里の岩船地蔵の姿は、山梨県に多く見られる岩船地蔵とほぼ同じ形態をしており、その山梨県内の岩船地蔵の多くには享保四年とか五年の年代が刻されているのである。

それではこの岩船地蔵とは何であろうか。石の船に乗っているその形態から岩船地蔵と呼ばれていたのであろうか。柏木甚右衛門の「覚書帳」にはその地蔵の意味は記されていない。ところが現在の東京都町田市(『野津田村年代記』)や青梅市(『谷合氏見聞録』)に残された記録によれば、享保四年に下野国の岩船地蔵が大流行して村から村に送られて、それぞれの村では華やかな衣裳を着け、賑やかに囃(はや)してまつられたという。それは青梅市では三月頃、町田市域では六月頃であった。これらの記事によって、この地蔵は石の船に乗っているから岩船地蔵なのではなく、下野の岩船地蔵から送りだされてきた地蔵だから岩船地蔵と呼ばれたということがわかってくる。下野の岩船地蔵とは、現在の栃木県下都賀郡岩舟町の高勝寺のことである。その裏山は大きな岩山となっており、そこにまつられている地蔵が岩船地蔵である。その岩船地蔵が一七一九年に突然大流行して村送りで各地でまつられるようになった。その送られ、広がっていった経路と地域は、まず群馬県であり、そこから南に伝播したのは埼玉県から東京都、神奈川県へと広がった。その流れが恐らく山梨県の郡内に入ってきたものと思われる。また群馬県から西へ伝わったのが長野県に入り、一つは西へ進み現在の長野市周辺まで広がり、もう一つは佐久地方を南下してやはり山梨県に入った(福田アジオ「近世中期における流行神仏の巡行と村落」)。このような大きな動きの先端が郡内から駿東に及んだ。

今里の地蔵は、以上のような近世中期における岩船地蔵の大流行の今に伝わる貴重な記念品と言えよう。山梨県はじめ各地に岩船地蔵は残っているが、それが現在も生きて信仰され、行事がある例は少ない。今里では、御詠歌まであり、それが伝承されているのである。しかも、地蔵の由来について、須山から来たこと、また須山へ帰るときに災害があって戻れなかったと伝えている。これは村送りで須山から今里へ来たことを示唆する伝承であり、柏木甚右衛門の「覚書帳」に記録された経路とは異なる村送りの経路があったことをうかがわせる。須走から中畑を経て、印野（いんの）に伝わり、さらに須山に来たという道筋である。そして、その地蔵が下って今里に伝えられた。その信仰自体は村継ぎで送られ、下流域へ移動していったかもしれない。今里に現在ある地蔵そのものは大きなものであり、長距離担いで移動できるものではない。恐らく、岩船地蔵流行の記念物として今里の人々によって建立されたものであろう。

なお、佐野や今里から黄瀬川に沿って下流に送られていった岩船地蔵は長泉町本宿まで達したことは「覚書帳」でわかるが、その先はどうなったのかまったく知ることができない。

(四)　山をめぐる信仰

1　愛鷹山と信仰

木戸と龍爪講

愛鷹山にはイノシシ、シカ、ニホンカモシカ、サル、ウサギ、キジ、ヤマドリなど多くの動物が棲息している。動物は、山麓の人々にとって身近な存在であると同時に農作物を荒らす害獣でもあった。そのため、農閑には鉄砲を使って動物を撃つ猟師がいた。市域ではこれをテッポーウチ（鉄砲撃ち）と呼び、現在では娯楽として行っている人たちがいる。

富沢には「キドシメ」という言葉がある。かつて愛鷹山に幕府直轄の牧(牧場)があったときに、観音坂の馬頭観音の少し上に木戸があった。その木戸を開けて山の畑の耕作に行ったため、一日の仕事が終わって帰ってくるときは最後の人がそれを閉めてくることになっていた。その役割のことをキドシメといっていた。イイで田植えをしていた頃には、一番最後に田植えをする家のことをキドシメといい、山の木戸がなくなった後にも、農作業の過程の中に言葉が残ったのである。このような木戸は、愛鷹山麓のムラムラの各所にあったようで、千福では細野に木戸の杭跡が残っている。千福では、木戸の外側にシシよけの穴がいくつか掘ってあったといい、木戸が害獣よけも兼ねるようになっていたのではないかと考えられる。

ところで、テッポーウチは猟期の間に何回か龍爪講(りゅうそう)という講を行う。撃った獲物を仲間で持ち寄り、料理をして飲食するものである。このとき、「龍爪大権現」と書かれた掛軸を床の間に掛け、参会者はそれを拝んでから会食の場に加わる。龍爪大権現というのは、もともと静岡・清水両市にまたがってそびえる竜爪山にまつられていた。明治以降に穂積神社と改称されたが、農業・漁業・狩猟の神として近郷近在で有名であった。山麓に住む禰宜の布教活動によって県内各地に勧請され、特に戦争中は武運長久の神として信仰されていた。

市域でこの龍爪神社があるのは須山、下和田、葛山などで、須山以外は山の神の境内にまつられている。また龍爪講を行っているのは、須山、下和田、葛山のほか、今里、千福などで、須山以外は旧富岡村のムラムラである。これらのムラでは龍爪はテッポーウチの神で、猟の安全と豊漁を祈願するのだといわれている。県内各地で聞かれる武運長久の信仰は、市域では聞かれない。なお箱根山山麓のムラでも龍爪はまつられているが、市内ではなく伊豆佐野や山中、小沢(すべて三島市)などにある。裾野と同じテッポーウチの神であると信じられているほか、武運長久につな

1

がる弾よけ信仰があることでも有名であった。

飯盛山の不動

下和田には、「飯盛山（めしもりやま）の不動さん」といって、小田原城の守り神として乾（いぬい）の方角にまつったといわれる不動がある。メシモリヤマはイイモリヤマともいって、愛鷹山系の一端にあって飯を盛ったような形をし、富士山のように切り立っている。飯盛山の山頂、標高一〇三二㍍の所に、不動がまつられている。この不動のカギトリ（鍵取り、禰宜ともいう）の家には不動明王と役の行者などが描かれた三幅の掛軸が所蔵されている。

不動の祭日は三月二八日で、一九四〇年代まではムラの多くの人たちが飯盛山に登って不動堂に参拝した。参拝がすむとカギトリの家で直会をした。天候が悪く大雪が降って登れないときには、代参人をたてて後日あらためてまつ

2

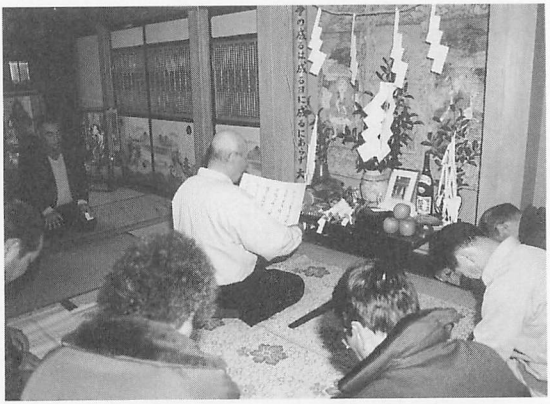
写真4－39　龍爪講
1「龍爪大権言」の掛軸（今里）
2　ヤドでの会食（下和田）

りに行く。この場合は当日、カギトリの家の大戸の板羽目に掛軸を掛けてまつった。カギトリの家が新築したため、屋敷のすぐ前の道祖神のところにのぼりを立て、掛軸を掛けてまつったこともあったが、現在ではカギトリの家の座敷で行うようになった。

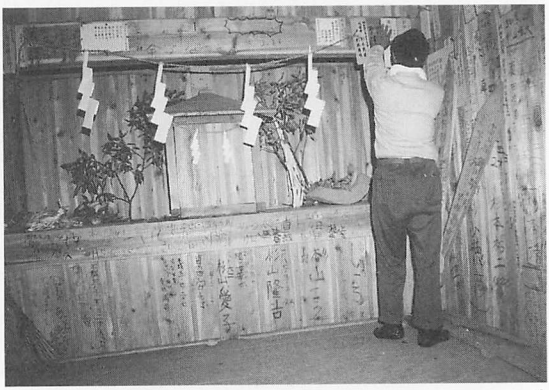
一九九五年三月二六日の日曜日に行われた祭りは、以下のとおりである。参列者は、区役員(区長、協議委員、各組長)、宮司、禰宜、氏子総代、組の当番(カギトリが属している組の当番)である。この日は雪まじりの悪天候のため、カギトリの家で行われた。不動の掛軸の前で宮司が祝詞をあげたあと、参列者が玉串を奉奠する。本来は、このあと全員で不動経をあげていたが、一九九五年の場合には省略された。そのまま座敷を片づけて直会をする。代参はカギトリが属している組(杉山組)から出すもので、杉山上組から一名、杉山下組から一名の計二名である。この年は四月九日にあらためて参った。代参人は、不動堂に着くと掃除をしてから赤飯を供えて参拝し、代参人の名前を書いた木札を堂内の柱か板壁に打ちつけて帰ってくる。

ところで、須山には風神と呼ばれている石祠がある。愛鷹山の標高約六四〇㍍付近にまつられ、葛山の雷神宮とともに「風神、雷神」と呼ばれているという。一方、葛山の雷神宮は標高約九五〇㍍付近にまつられている。この神はタケノカミナリサン(嶽の雷さん)と呼ばれ、集落の側にまつられているフジバタノカミナリサンとは山宮と里宮の関係にある。雷神宮の祭りについては別項で詳しく述べたので省略するが、雨乞いにはムラの人たちだけではなく長泉町方面からもかなりの人が参拝に来たという。風神はやや低い位置にまつられているが、飯盛山の不動と葛山の雷神宮は愛鷹山のほぼ同じ高さにまつられており、互いの場所から見通すことができる位置にある。

天津日高彦火瓊仝杵命……明治二〇年四月一八日
大山津見命……大正九年一〇月一七日　字三本杉　ヤウチバ
大山祇命……大正九年一〇月一七日　字大澤入
大山津見之命……大正九年一〇月一七日　字鳴澤
八幡大神……昭和二六年七月四日



1



2

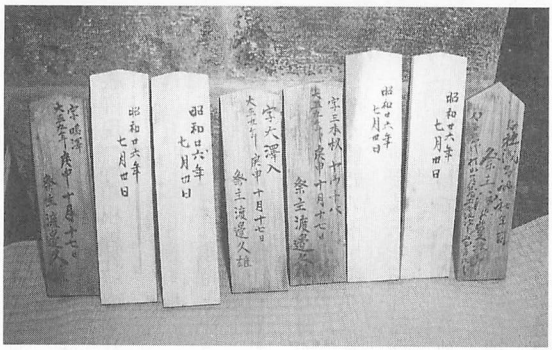
写真4－40　飯盛山の不動（下和田）
1　カギトリの家での祭り
2　代参人の札打ち

堂ケ尾の愛鷹明神　愛鷹山系の黒岳の一角に、愛鷹明神がまつられている。須山でほかの山の神の祭りをするときに、ともに祭りを行っているが、ここをドウガミ（堂ケ尾）の山の神と呼んでいる。この山の神の祠に納められている棟札によれば、何カ所かにあった祠を合祀したことがわかる。それらは次のようである。

愛鷹明神……昭和二六年七月四日
大山祇之大神・子安明神……昭和二六年七月四日
稲荷大明神・疱瘡守護神……昭和二六年七月四日

「天津日高彦火瓊仝杵命」は愛鷹明神の祭神名で、この祠に当初からまつられていたと考えられる。また大正九（一九二〇）年は庚申の年で、このときに三カ所でまつられていた山の神をここに合祀したことがわかる。また、その他の神も昭和二六（一九五一）年にここに合祀されたのではないかと考えられる。なお、この祠には富士峰行者（後述）が納めた札も残されていた。愛鷹明神は愛鷹山中および山麓にまつられ、現在市域で確認されているのは須山と富沢である。富沢の場合は氏神になっており、前述したとおりである。

1



2

写真4－41　堂ケ尾の山の神の棟札（須山）
1　棟札の表
2　棟札の裏

2　箱根山と信仰

深良用水と箱根権現の祭り

一六七一（寛文一一）年に深良用水が開通

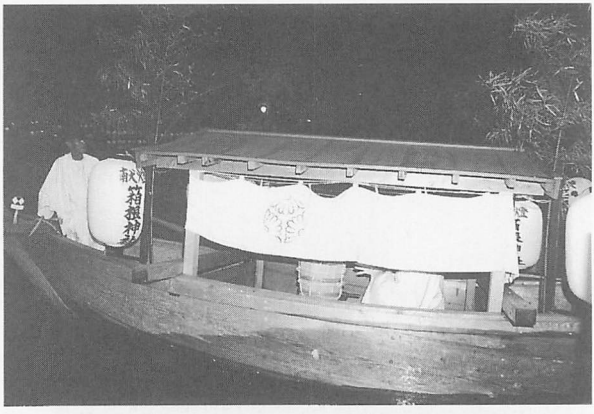


写真4－42　箱根神社湖水祭（神奈川県箱根町）

し、以降、市域の水田の灌漑用水と生活用水が確保され、多くのムラが芦ノ湖水の恩恵に浴した。そのため現在でも、芦ノ湖畔にまつられている箱根権現（現箱根神社）の講社祭には、芦湖水利組合から米の献納が行われている。

芦ノ湖には九頭竜という竜神がまつられ、箱根神社の例大祭の前日、七月三一日に湖水祭が行われる。本来は旧暦の六月一三日で、十三夜の月が出る頃に神饌を積んだ舟が湖心に着くという。舟には献饌する宮司と、舟を漕ぐ船頭のみが乗り、それ以外の人間は誰もその様子を見ることはできない。神饌は三斗三升三合の赤飯だが、現在では三升三合三勺と一〇分の一に減らしている。この神饌をお櫃に入れて、湖水に沈めるのである。このように、お櫃に納めた神饌を水神に献納する祭りは、県内では小笠郡浜岡町佐倉の桜ヶ池のお櫃納めがある。

ところでこの九頭竜神社は、九頭の毒竜がしばしば暴れたために、箱根権現を中興したといわれる萬巻上人が調伏し、まつるようになったという縁起が伝わる。深良用水が引かれる以前から、芦ノ湖水は周辺地域の水源であった。黄瀬川東岸の岩波から深良の間には、川の岸壁などいたるところから水が湧き出している。これらの湧き水の源は芦ノ湖であると理解されている。そのため、水不足になると雨乞いをするために、箱根神社に祈願に行った。

黄瀬川の湧き水を水源にして、生活用水として引水している富岡水道は、御宿の入谷（いりや）や新田をはじめ上ヶ田、葛山の中里などその利用戸数は二八〇戸にも及ぶ。御宿新田では、日照りが続くと雨乞いの祈願をするために、三つの組に分かれたという。一組は藁で竜を編んで黄瀬川に投げ込み、一組は箱根権現の大きな釜に石を投げ込み、もう一組は足柄（あしがら）峠の聖天堂の池に石を投げ込んだ。こうすれば、湖尻（こじり）峠を越える前に必ず雨が降ったものだという。水神をまつる芦ノ湖と箱根神社、箱根山が、水をもたらす山として信仰されてきたことが理解できる。

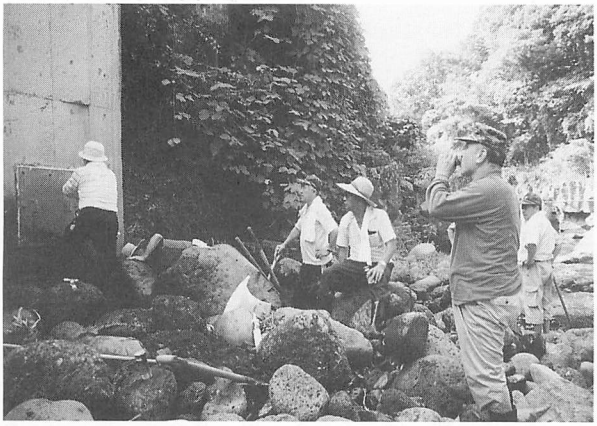
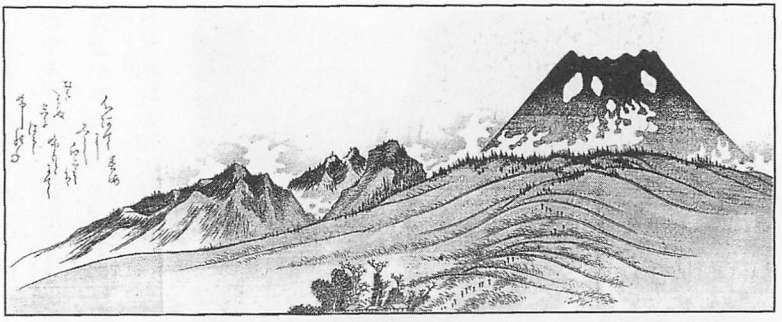


写真4－43　富岡水道清掃（岩波）

3　富士山と信仰

富士登山道須山口の暮らし

須山は、古くから富士山に登る登山道の入り口であった。富士山への登山道は、静岡県側では大宮（富士宮市）、村山（同市）、須走（駿東郡小山町）、そして須山で、山梨県側は北口と呼ばれる吉田（富士吉田市）であった。須山口は、一七〇七（宝永四）年の富士山の噴火と砂降りによって廃道化し、三二年間途絶えていた。しかし、一七四〇（元文五）年の庚申年は富士山縁年であったため登山者が増え、修理を加えて再興したという。しかし、ときの名主が道者宿のとりしきりを独占したことから、須山口は八年間でまた中絶してしまった。その後再び復活させて、一七七九（安永八）年にはまた以前のように



図表4－16　須山からの富士の眺望　1845(弘化2)年富士山図（杉村齊氏所蔵）

栄えたという(『須山郷土誌』)。やがて明治になり、御殿場の有志が一八八三(明治一六)年に登山道を開き、一八八九(明治二二)年東海道線が開通して御殿場駅からの利用客が増えるにしたがって、須山口からの登山は敬遠されるようになった。その理由としては、駅から不便であるうえ、登山する距離も長く、道も決して楽なものではなかったからだという(『富士の研究Ⅰ―富士の歴史―』)。

現在、須山口は復活したとはいえ、五合目までは自動車道がはしっており、その先は御殿場口の登山道と合流している。東富士演習場を迂回しなければならないことも、須山口が衰退した要因の一つであろう。しかし、須山には旅館の建物がいくつか残り、かつて道者で賑わった往時を知る手がかりとなっている。『駿東郡須山村誌』(一九一四年)には、名勝の項に登山道の紹介をしている。その里程表によると、佐野から須山までは三里一〇丁、須山から一合目まで二里五丁、一合目から二合目まで一三丁、二合目から三合目まで三四丁、ここで御殿場口の道と合流する。したがって、須山から頂上までは五里一八丁、佐野から頂上までは八里二八丁となっている。また、須山口休泊所と剛力(強力)、乗馬、駕籠の賃金も事細かに決められ、掲載されている。佐野駅から須山までの馬車賃は一人三五銭で、馬に乗ると上りが五〇銭、下りが四〇銭となっている。さらに、須山から馬返しまでの乗馬賃は三五銭、須山から一合目までは七〇銭、須山から三合目ま

では一円五〇銭となっている。旅館の宿泊料は一等が一円、二等が八〇銭、三等が六〇銭となっており、この時代には、須山の原に栄屋と清水館という二軒の旅館があった。団体登山者には佐野駅までの出迎えと、音楽隊をつけることもあったようだ。須山浅間神社に参拝するときの神札・神楽料、金剛杖や雨具などの登山用品、富士名産品などの紹介もある。

『須山村誌』にある原の清水館は、創業が明治末期だったという。当初は「日の出屋」という雑貨屋で、繭買い商人に宿を貸していた。そこから火が出て焼けてしまったため、「日(火)の出」ではなく「清水」にして旅館業を始めたという。婿取りだったうめさんという女主人は、朝暗いうちに出発する登山者のために朝食用のおにぎりをこしらえ、村はずれまで提灯や懐中電灯を持って送っていった。ときには、大沢の分岐点まで送っていくこともあったという。土曜の夜は宿泊客が多いので、家人は寝ることがなかったというほど、かつては賑やかであった。

ところで江戸中期以降に大流行した富士講は、行を積んだ先達(せんだつ)という案内役に導かれて富士山に登るもので、その富士登山の一行を道者と呼んだ。道者の一行は、道中で請われれば撒銭といって金を撒いたという。子供ばかりでなく大人もこの金を拾ったといい、その金額は登山者にとってかなりの負担だったようである。撒銭は頂上でも行われていたようで、その収入は元禄期には表口と須走口の争論になるほどのものだった(遠藤秀男『富士山―史話と伝説―』)。図表4-17は江戸後期の木版画だが、須山口で子供たちが物乞いをしているのは、この撒銭の習慣からくるものだと推察される。

富士峰行者と沿道の村

一九四〇(昭和一五)年前後までは、ホウエンサン(法印さん)と呼ばれた村山の行者が、富士山での夏峰修行を終えて富士宮市村山にある坊に帰るために、市域の村々を通っていった。法印は途中の行場

図表4－17　富士参詣道者と須山の子供
1845(弘化2)年富士山図（杉村齊氏所蔵）

に寄って行を行いながら、各村ごとに加持祈禱や護摩焚きをしていった。その経路は、印野→北畑（きたばた）→仁杉（以上御殿場市）→須山→下和田→今里→金沢→葛山→千福→三嶋大社（三島市）→伊豆島田→大畑→定輪寺（桃園）→富沢→南一色（みなみいっしき）（長泉町）→下長窪（しもながくぼ）（同）→沼津千本浜（せんぼんはま）（沼津市）→吉原（富士市）→杉田（以下富士宮市）→雷（神成り）→村山となっていたようである。

各村では、馬に乗った先達と供の行者の総勢七名ほどの一行を待ち望んでいて、青年が村迎えと村送りの任にあたった。法印が通る沿道では、親から米や賽銭を渡された子供たちが、法印の祓いを受けようと待ちかまえていた。須山では、法印の一行が村に来る日は九月六日と決まっていた。この日、当番区の青年が馬を引いて御殿場市北畑へ迎えに行く。法印の一行には印野、北畑の若い衆が、須山まで付き添って送ってくる。観音堂で昼食をとった後、法印は天狗をまつったドウガミサン（堂ヶ尾の山の神）に行って行をする。夕方には、観音堂前で青年による護摩相撲が行われ、夜店も出て賑やかな祭りとなる。翌七日の夕方、観音堂前で護摩焚きをし、青年は護摩札を各戸に配る。こうして行事が終わると、法印は次の下和田へと向かい、青年は付き添っていくという（『須山の民俗』）。

富沢では法印がいつ来るかは、上の方の村からのイイツテ（言い伝え）で知った。その日には、朝から甲州街道で待

ちかまえていて、子供たちのお祓いをしてもらった。一九二〇年代ともなると、法印は三名ほどで、法螺貝を吹きながら馬方がついてやってきた。小さな子供は、母親が背負ったままでお祓いをしてもらったという。法印にまたいでもらうと風邪をひかないなどといい、富士山での行を終えた法印の霊力を信じる沿道の人々の信仰は篤かった。

ところで、この巡行路にはさまざまな行場や宗教的施設があった。下山した印野では大日堂に寄って護摩を焚き、翌日御胎内に参り、北畑に泊まる。翌日は仁杉の不動堂に籠り、須山の観音堂に行く。観音堂には二泊して、愛鷹山の洞川でハネギの行をしたりする。下和田ではチョウチンブチという滝を拝み、今里では滝行をし、金沢の浅間神社で池に浸かって水行をする。葛山では、景ケ島でアトッサリ（後ずさり）の行をやる。この後、三嶋大社に詣で、伊豆島田に戻って淡島明神に籠る。翌日は、千福の十二所神社から大畑に行って熊野権現で夜中の行をやる。最後に沼津の千本浜に出て浜垢離をし、帰路につくのだという。村山には、富士修験の坊が大鏡坊、池西坊、辻之坊の三坊あった。このうち大鏡坊は葛山頼秀に、辻之坊は葛山頼貞にゆかりがあり、いずれも葛山城主とのかかわりを持っている。法印が往路とは違う遠回りの帰路を選んだのは、必ずしも行場巡りのためばかりではなく、葛山氏と関係の深い市域を重要な霞場（勢力圏）としていた村山修験の活動のためでもあったと考えられる（遠藤秀男『富士信仰の成立と村山修験』）。

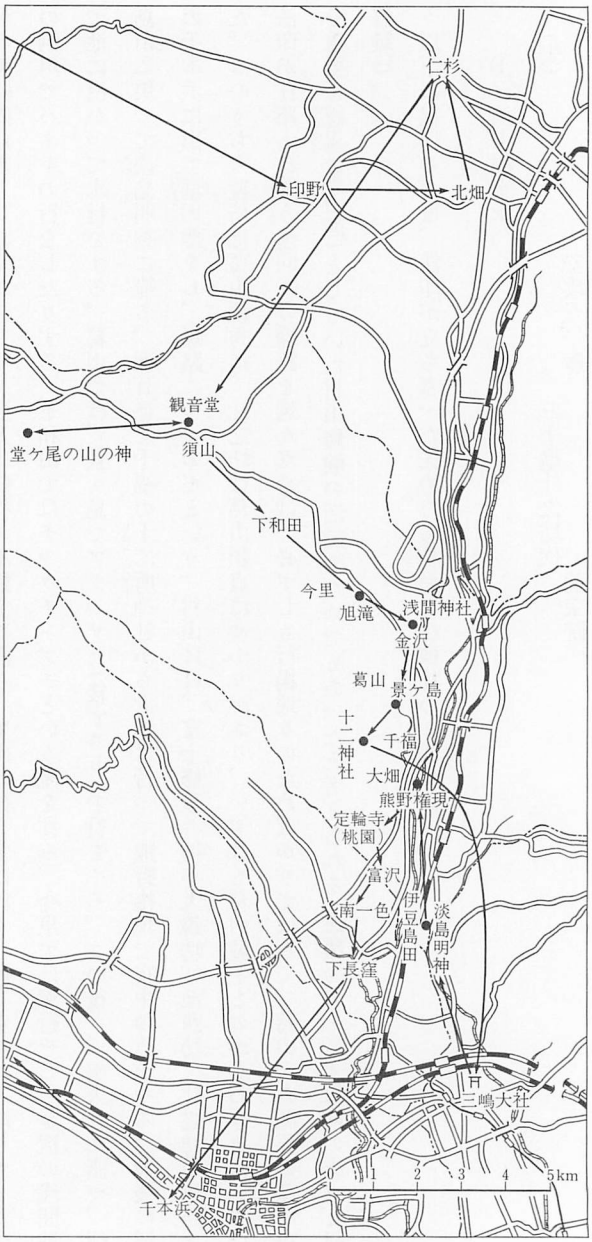
以下に掲げるのは、法印が立ち寄った先の打ち札および棟札の一部である。

①　須山観音堂

（表）「　　三十講辻之坊代

安政五午歳　　龍宝院

写真4－44
富士峰修行者の札



図表4－18　富士峰修行者の帰路

梵　奉修富士嶺採燈大護摩供村中安全祈修
八月七日　大先達大鏡坊代　英岳院　」

（裏のみ）「　当所産神　嘉永七寅天　富士峰行中
梵　奉修採燈大護摩供郷中安全祈修
本尊加被　仲秋大吉日　大先達池西坊栄寿
並　和合院□信敬白
信□院□□
□　□　」

②　大畑大日堂・熊野神社

〈大日堂〉

（表）「　富士峰修行者
弁財天女　浄蓮院
梵　不動明王　不動院
大正十五年八月上旬
龍樹大士　横田房善
中野重徳　」

（表）「
　　弁財天女　　富士峰修行者
　　梵　　浄蓮院
　　不動明王　昭和三年
　　八月中旬
　　龍樹大士　　横田芳善
　　中野重太郎　」

〈熊野神社〉
（表）「　　正大先達浄蓮院
　　三十講番　大宝院
　　梵　　熊野三所大権現　　明泉院
　　寿福院
　　明□□十一年□八月十四日　　徒戸　秋山茂作
　　中野安太郎　」

（表）「　　平成七年　　熊野修験
　　梵梵　　奉修行駿河国富士山入峰天下泰平如意祈修
　　八月吉祥日　　那智山青岸渡寺　」

1

2

写真4－45　棟札と打ち札
1　観音堂棟札（須山）
2　大日堂打ち札（大畑）

③　伊豆島田淡島明神

「　富士峰先達　大宝院
　天下泰平　三宝院
　奉巡拝淡島大明神　大徳院
　国土安穏　半田悦雄　」

（表）「　淡嶋社□□祭神　少彦名命　」
（裏）「　祭主　準教師　富士山寿福院
　是□　明治三十三年庚子十月三日　正迂官
　駿東郡　小泉村　伊豆嶋田　氏子中　」

（表）「　伊豆嶋田
　奉修　淡島大明神守護
　嶋尾山　」

（裏）「

姓名イロハ順

古世話人改築監督
米山竹次郎　　改築世話人
水口善八　　土屋清人
大正六年四月三日　水口藤太郎　　水口善八
水口亀吉　　水口藤太郎
瀬戸兼太郎
鈴木金次郎
法主富士山大宝院　敬白　　水口弥三郎
諏訪良助　」

第四節　石仏の語る信仰

(一)　集中して建てられる石仏群

石仏の集中する場所

市内を歩いていると、あちこちの路傍に建てられている古めかしい石仏が目につく。それぞれが、古い時代の人々の信仰によって建てられたものであろうが、特に気になるのは、市内ではその石仏が一定の場所に集中的に建てられている傾向があるということである。道路の新設とか区画整理などによって、あちこちに散在していた石仏をあとから一カ所に集めたのであろうか。しかし、近所の人たちにたずねてみても、昔からこうなっていたといい、あとから集めたものではないようである。

市内では、なぜこのようにいろいろな種類の石仏を一カ所に集めて建てる傾向があるのか。

そこで、まず二つの点に注意してみる。一つは、どんな場所に集中的に建てられているのか、つまり石仏が集中的に建てられた場所とはどんな意味のある場所なのか、という点である。もう一つは、集中的に建てられている石仏の種類はどうなっているか、つまり特定の種類の石仏が集中する傾向があるのか、それともないのか、という点である。

それらの点について整理すると次のような指摘ができる。

第一に、石仏が集中的に建てられた場所には、大別して二つのタイプがある。一つは道路ばたで、もう一つは堂の側である。そして、道路ばたの場合には、多くが集落の出入り口にあたるような場所である。また、堂の立地にも二つのタイプがあり、人々がよく集まるような集落の中心部に立地しているものと、逆に集落から外れた出入り口にあ

写真4－46　岩波の順礼供養塔

たるような場所に立地しているものとがある。

たとえば、御殿場市と接する岩波では、集落の北の出入り口にあたる旧道の道路ばたに順礼供養塔が三基（一六七〇・一七一三・一七四三年）、庚申塔が二基（一六八三・一七一〇年）、馬頭観音が一基（一八二一年）建てられており、一六七〇（寛文一〇）年の順礼供養塔がその最初であったことがわかる。そして、そのまま旧道を南に進むと、集落の中ほどに今は公民館となっている不動堂があり、そこには観世音菩薩一基（一八〇〇年）、唯念名号碑一基（一八四八年）、馬頭観音一基（一八五四年）、それに男女双体像の道祖神二基（年号不明）がある。こちらの石仏の方が年代的にみるとあとから建てられたものであることがわかる。

また、深良の南端にあたる町田の庚申塚は集落の南外れの三叉路にあり、そこから旧道を南に進むと久根の集落に入るが、その中ほどには今は久根老人生きがいセンターになっている観音堂があり、その庭にはおびただしい数の石仏群がある。

同じ堂でも深良の和市の慈眼庵観音堂や茶畑の滝頭の不動堂などは集落の外れに立地した堂でそれらの側にもたくさんの石仏が集中しており、特に茶畑の滝頭の不動堂の周辺にはおびただしい数の石仏群がある。

このように、集落の外れの出入り口付近と集落の中心付近とに、ともに石仏が集中して建てられる傾向があるようである。

石仏の種類

そこで次に、そのように集中的に建てられる石仏の種類はどうなっているのか、という点について見てみる。すると、特別な種類に限定されているということはないようであるが、一定の傾向性は指摘することができる。それは、そこには多く順礼供養塔が建てられているという点である。

順礼供養塔は、観音霊場三十三所を順礼した人たちがその記念と供養をかねて建立したものであるが、茶畑の滝頭不動の北の一画にある一六八六(貞享三)年の順礼供養塔(図表4-19)は市内で建てられたものでは比較的早いもので、そこには「坂東三十三所、同秩父三十四所、並湯殿山大権現」「西国三十三所」と記されている。これは文字どおり坂東、秩父、西国のあわせて一〇〇カ所すべての霊場、それに湯殿山大権現の順礼を成就したものであろうか。とすれば当時すでにたいへんな旅が行われたことになる。

図表4-19が、市内の比較的早い時期の順礼供養塔を整理してみたものであるが、それらの中には、伊豆島田の不動堂に建てられている一七〇〇(元禄一三)年の順礼供養塔のように実際に順礼を行った上で建てたことが明らかな例もあり、やはり多くは実際に何らかのかたちで順礼の旅が行われて建てられたものと思われる。

ではなぜ、人々はふだんの生活の場を離れて遠く長い順礼の旅に出たのであろうか。その目的は物見遊山の意味もたしかにあるにはあったであろうが、順礼供養塔に刻まれた文字を見ると、何よりも「現世安穏　後生善所　子孫繁栄」を祈ることであったらしい。そして、その順礼の旅には男性だけでなく女性も多く参加していたことが注目される。女性の名前が記されていたり、誰々の内方とか母と記されている例が多く、ある程度の年齢に達した男女夫婦が互いに同行を募ってともに順礼の旅に出たことが知られる。

仏教の教えで女性は、五障といって五つのさわりがあり、往生できないものとされていたのが、この当時弥陀の本

No.	造立年	地区	所在地	順礼先
1	1670(寛文10)年	岩波	岩神橋東	不明
2	1683(天和3)年	深良	文化センター東	横
3	1685(貞享2)年	千福	天泉寺跡	不明
4	1686(貞享3)年	茶畑	滝頭不動堂北側	坂・秩・西・湯殿山
5	1687(貞享4)年	深良	上原公民館	横
6	1689(元禄2)年	石脇	不動堂	横
7	1692(元禄5)年	葛山	中村集会所	西
8	1693(元禄6)年	須山	祖霊社	横
9	1694(元禄7)年	茶畑	市ノ瀬公民館内	西・秩・坂・横
10	1696(元禄9)年	石脇	公民館北	西・横・坂・秩
11	1697(元禄10)年	深良	和市慈眼庵	横
12	1697(元禄10)年	深良	遠道原観音堂	西・坂・秩・横
13	1700(元禄13)年	伊豆島田	不動尊淡島堂	西
14	1700(元禄13)年	富沢	公民館	横
15	1703(元禄16)年	佐野	蓮光寺	西・坂・秩
16	1703(元禄16)年	久根	老人生涯センター	秩・坂・西
17	1706(宝永3)年	水窪	公民館内	不明
18	1707(宝永4)年	伊豆島田	堰原公民館内	横
19	1707(宝永4)年	伊豆島田	不動尊淡島堂	西・坂・秩
20	1707(宝永4)年	葛山	中村集会所	横
21	1710(宝永7)年	茶畑	滝頭不動堂北側	西・坂・秩
22	1710(宝永7)年	深良	和市慈眼庵	横
23	1710(宝永7)年	千福	谷津橋東	西・秩・坂
24	1710(宝永7)年	上ヶ田	集会所	西
25	1711(正徳元)年	麦塚	東光寺	横
26	1711(宝永8)年	葛山	中村集会所	横
27	1711(正徳元)年	須山	田向辻バス停付近	西
28	1711(正徳元)年	御宿	上谷区運動場北	坂・西
29	1711(正徳元)年	佐野	蓮光寺	横
30	1712(正徳2)年	佐野	二本松公民館内	横
31	1712(正徳2)年	上ヶ田	集会所	西・横
32	1713(正徳3)年	深良	遠道原観音堂	西・坂・秩・横
33	1713(正徳3)年	富沢	公民館	横
34	1713(正徳3)年	石脇	不動堂	秩・坂・西・横
35	1713(正徳3)年	岩波	岩神橋東	坂・秩・横
36	1713(正徳3)年	下和田	はのさわ橋東	西
37	1713(正徳3)年	深良	上須公民館南西	西・坂・秩
38	1713(正徳3)年	深良	上原公民館	横
39	1713(正徳3)年	千福	天泉寺跡	横
40	1713(正徳3)年	稲荷	公文名公民館南西	横
41	1713(正徳3)年	茶畑	願生寺参道	駿豆・横
42	1713(正徳3)年	御宿	上谷区運動場北	西
43	1713(正徳3)年	久根	老人生涯センター	西・秩・坂・横
44	1713(正徳3)年	深良	文化センター東	秩・西・坂・横

凡例
横＝横道三十三所
坂＝坂東三十三所
秩＝秩父三十四所
西＝西国三十三所
駿豆＝駿河・伊豆横道三十三所

※　和年号は、各順礼供養塔に刻まれたものによる

図表4－19　近世中期頃までに建てられた順礼供養塔

願や観音の功徳にたよれば往生できるとする女人往生、女人救済の考え方が高まっていたこと、そしてそれを強く願ったのが誰よりもその女性の夫や息子たちであったことが、これらの順礼供養塔の人名の記載から知られるのである。

また、観音の霊場巡りは死後の安楽を願う人たちによるあの世への旅立ちのいわば予行演習でもあり、その霊場巡りをはたした人には「後生善所」が約束されると考えられたらしい。そして、それをより確かなものとするために建てられたのがこれらの順礼供養塔であったようである。これらの順礼供養塔は、順礼を経験した人たちにとっては、現世安穏を祈る対象であったとともに、未知なる後生善所と子孫繁栄を祈る対象ともなっていたものと思われる。つまり、これらの順礼供養塔は自分たちの死と死後のことを日々思わせる装置でもあったわけである。

そのような、自分たちの順礼の旅を思い出させ、自分たちの死と死後のことを連想させる装置である順礼供養塔が、多く集落の出入り口と集落の中心的な場所との両方に建てられているのである。集落は一見家々が立ち並んでいて同質の空間がひろがっているように見えるが、こうして見ると、人々が集まりやすい中心的な場所と、集落からの出入りの際にふと足を止める村外れの路傍というのは、ともに身近な内の世界から遠い外の世界へとつながる特別な地点と感じられる場所となっていたようである。

(二)　時代を超えて建てられる石造物

滝頭不動の石仏と石塔

市内でも最も多くの石仏類の密集が見られるのは、茶畑の滝頭不動の周辺である。現在は道路が拡張されて、公民館の南側の羅漢塚と呼ばれる区画と不動堂の北側の不動橋に近い区画と、それに不動堂のすぐそばの区画とはそれぞれ別の区画のように見えるが、かつては細い道をはさんでこの一帯は同じ区画でいずれ

No.	名　　称	造立年	所在地	種類、造立者など
21	馬頭観音	1815	不動堂北側	自然石文字　勝俣良蔵
㉒	順礼供養塔	1818 (1828)	不動堂南側	櫛型(板型)文字　念仏講中男性2　世話人(男性2　僧　滝頭下組　中丸)
㉓	順礼供養塔	1821	不動堂北側	自然石文字　西国四番　勝俣利右衛門
24	忠魂碑	1930	不動堂北側	帝国在郷軍人会泉村分会
25	殉難勇士之碑	1951	不動堂北側	昭和14年於茶畑南ノ沢で遭難者8名　元泉村在郷軍人有志
26	常夜燈	1960	不動堂北側	裾野町遺族会
27	常夜燈	1960	不動堂北側	裾野町西東遺族会
28	常夜燈	1961	不動堂北側	裾野町西東遺族会
29	頌徳碑	1964	羅漢塚	勝俣仁左衛門(天保4―安政5)　大沢山領有争い・西堀開削
30	忠魂碑由来	1974	不動堂北側	裾野市遺族会東地区
31	平和之碑および碑文	1990	不動堂北側	裾野市傷痍軍人会　同妻の会　戦争の悲惨・不戦平和
32	忠魂碑建立記念碑か	年不詳	不動堂北側	建立費用
33	十六羅漢か(16体)	年不詳	羅漢塚	丸彫座像　7名　1講中　3寺
34	七観音か(7体)	年不詳	羅漢塚	舟型立像・座像　男女　僧
35	寝釈迦	年不詳	不動堂内	丸彫涅槃像
36	地蔵菩薩	年不詳	不動堂南側	丸彫座像
37	地蔵菩薩(6体)	年不詳	不動堂南側	
38	地蔵菩薩	年不詳	不動堂北側	丸彫立像
㊴	順礼供養塔	年不詳	不動堂北側	聖観音丸彫座像　男性2　女性15
40	馬頭観音	年不詳	不動堂北側	自然石文字　施主清六
41	不動明王	年不詳	不動堂内	浮彫立像
42	馬頭観音	年不詳	不動堂北側	自然石文字　施主勝亦氏
43	不明	年不詳	不動堂南側	

不動周辺の石造物

も滝頭不動の周辺に建てられたものであった。

そこにどのような石仏類が建てられているのか。時代を追ってそのあとを確かめてみよう。図表4－20が、そこに建てられている石造物を年代順に整理してみたものである。

そこから指摘できるのは次の点である。まず、第一は、この場所に最初に建てられたのは一六八六(貞享三)年の順礼供養塔である。そして、順礼供養塔はその後、一八二一(文政四)年まで継続的に建てられ年不詳の一基も含めると、計一三基も建てられており、観音霊場を巡る順礼が非常にさかんで

No.	名　　称	造立年	所在地	種類、造立者など
①	順礼供養塔	1686	不動堂北側	笠付き角柱　坂東秩父湯殿山西国　為二世安楽供養也　男性4
2	石　灯　籠	1707	不動堂南側	不動明王の宝前へ　茶畑村中
③	順礼供養塔	1710	不動堂北側	笠付き角柱　西国三十三所　茶畑村男性5　坂東秩父六十七所　男性6
④	順礼供養塔	1717	不動堂北側	聖観音丸彫座像　横道　男性1　女性8
⑤	順礼供養塔	1724	不動堂北側	如意輪観音丸彫座像　横道　施主男性1　女性11
6	万　霊　塔	1732	不動堂南側	舟型浮彫立像　女性2人万霊のため　施主講中
7	庚　申　塔	1740	不動堂北側	自然石文字　庚申年　施主講中　男性9
8	馬頭観音	1756	不動堂北側	舟型浮彫立像　施主勝俣定蔵
9	石　灯　籠	1757	不動堂北側	観音順礼講中の発願　男女
10	宝篋印塔	1763	羅漢塚	潮信院殿泰応元如大居士
⑪	順礼供養塔	1763	不動堂北側	丸彫座像　横道　男性3　女性7
12	馬頭観音	1780	不動堂北側	駒型文字
⑬	順礼供養塔	1785	不動堂北側	聖観音丸彫座像　横道　女性5か
⑭	順礼供養塔	1785	不動堂南側	櫛型(箱型)文字　秩父　男性10　公文名村女性1　当村念仏講女性2　男性3
15	庚　申　塔	1785	不動堂北側	自然石文字　男性11
⑯	順礼供養塔	1791	不動堂北側	自然石文字　西国　滝頭男性2　中丸男性3　女性1　公文名村女性1　三島六反田女性1
⑰	順礼供養塔	1792	不動堂北側	自然石文字　百番　滝頭男性1　中丸男性2
18	馬頭観音	1802	不動堂北側	舟型浮彫立像　施主乙右衛門
⑲	順礼供養塔	1805	羅漢塚	自然石文字　西国　中丸4
20	不　　明	1808	羅漢塚	

＊　丸付数字は順礼供養塔

図表4－20　茶畑滝頭

あったことが知られる。はじめは男性だけで西国坂東秩父など比較的遠隔地への霊場巡りであったが、まもなく女性が中心になり比較的近くの駿河伊豆横道への順礼が多くなっている。そして、変化を追ってみると、図表4－20の丸付き数字のようになる。

これによると、一七八五(天明五)年の、⑬と⑭の頃に、大きな変化が見られ、それまでの、順礼者は女性中心、型式は観音丸彫坐像、というかたちから、男女一緒、自然石、というかたちへと変わっている。そして、この頃から念仏講の参加が見られるようになる。そして以後急速に順礼供養塔の造

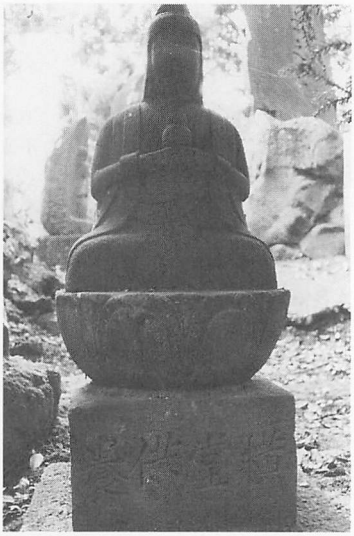


写真4－47　滝頭の順礼供養塔（茶畑）

立が行われなくなってしまう。これは、その頃から順礼が行われなくなりそれに代わって念仏講を中心とする念仏供養によって現世安穏と来世往生を祈るようになったことを示している。一八一八（文政元）年の順礼供養塔では念仏講中の人たちが中心となっているが、それもこの変化を物語るものであろう。

第二は、羅漢塚には一六羅漢と観音七体が建てられているが、いずれも銘文が刻まれておらず詳細は不明である。第三は、馬頭観音が六基建てられており、そのうち二基は文字不詳であるが、三基は施主が個人となっており、馬の死に対しても大切に供養したことがわかる。

そして、第四は、この茶畑の不動の滝周辺に、はじめは一六八六（貞享三）年の順礼供養塔であったが、こうして石仏、石塔類がいったん建てられ始めるとそれにつられるように次々と建てられ続けて一大密集地ができるという現象それ自体が注目される。それが江戸時代だけに限らず、一八二一（文政四）年の㉓順礼供養塔から百年以上の空白を経て、一九五〇年代、一九六〇年代から再びこの場所にさまざまな石碑類が建てられるようになってきているのである。

戦争と石碑

まず、一九四八（昭和二三）年に、それまで東小学校の校庭西側に建てられていた忠魂碑がここへ移されている。この忠魂碑は、もと一九三〇（昭和五）年春彼岸に、下賜金一一円四〇銭を基金とし久根、公文名、茶畑、麦塚、平松、などその他の寄付金計一〇二八円四〇銭を工事資金として帝国在郷軍人会泉村分会を中

心に村民の勤労奉仕によって建てられたものであった。日清戦争一名、日露戦争四名、日独戦争(第一次世界大戦)一名、満州事変一名、日支事変(日中戦争)三八名、大東亜戦争(太平洋戦争)一二五名の戦死者の名前が刻まれているが、一九三〇(昭和五)年の建立当時は満州事変前夜であり、その後の日中戦争、太平洋戦争の大勢の犠牲者まで予想したものではなかったであろう。むしろ、日清、日露、日独の戦争で戦った忠義の勇士の慰霊と顕彰をはかるものであった可能性が大である。しかし、一九四五(昭和二〇)年の敗戦によって軍国調のものは教育の場から排除されることとなり、一九四八(昭和二三)年にこの羅漢塚に移転されたのであるが、そのときの趣旨は、満州事変、日中戦争、太平洋戦争の戦没者一六〇余名の英霊よ安らかにというものであり、重ねて今後この碑に新たに戦没者が加筆されることのないようにと祈るものであった。

写真4－48　殉難勇士之碑(茶畑)

続いて、一九五一(昭和二六)年には、殉難勇士之碑が建てられている。これは一九三九(昭和一四)年に茶畑の南ノ沢で飛行機の遭難事故があり、そのときの遭難者八名のために元泉村在郷軍人有志の名で建てられたものである。その後、一九六〇(昭和三五)年、一九六一(昭和三六)年と裾野町遺族会、裾野町西東遺族会により常夜燈が建てられ、さらに一九七四(昭和四九)年には裾野市遺族会東地区の人たちによって忠魂碑由来の碑が建てられて、この時期、戦没者慰霊の活動が高まっていることがうかがえる。それに対し、一九九〇年に

建てられた平和の碑は、裾野市傷痍軍人会とその妻の会が建てたもので、そこには、自分たちが戦争の悲惨を身をもって体験した傷痍軍人であり、妻の協賛も得て戦後四〇余年を経過した今、二度と戦争を繰り返すことのないようにと訴える趣旨が記されている。連名の中の女性の名の横に(日露)と添え書きしたものもあり、日露戦争の負傷兵の妻も含まれていることがわかる。

また、戦争とは別に、一九六四(昭和三九)年には、勝俣仁左衛門(一八三三〜五八)の頌徳(しょうとく)碑が建てられている。勝俣仁左衛門というのは、茶畑と伊豆佐野の両村のあいだで長く続いた大沢山の領有争いをめぐって勝訴したときの名主で西堀開削にも功績のあった人物で、その偉功を顕彰するものである。

このように、茶畑滝頭の不動の滝周辺には、いったん石仏、石碑類が建てられ始めるとそれにつられるように次々と時代を超えて建てられ続け、石仏、石碑類の一大密集地ができているのである。

(三)　石造道祖神の特徴

さまざまな道祖神

道祖神の石像は静岡県から山梨県、神奈川県へかけてたくさん作られているが、三県の県境にも近い市域では、地区によりその型式が異なっている点が注意される。市域に造立された石造の道祖神の型式、編年、地区について整理してみたのが、図表4－21、22、23である。型式のうえでは、男女双体像、単体立像、単体座像、文字塔が混在しており、一部に丸石もある。年代のわかるものを整理してみた図表4－23から言えることは次の点である。

男女双体像の古いものは、一六七四(延宝二)年茶畑、一六八五(貞享二)年深良の二基、単体立像の古いものは、一

双体立像
（深良町田
町田バス停農道間）

単体立像
（茶畑中丸上
天理教前
バス停東付近）

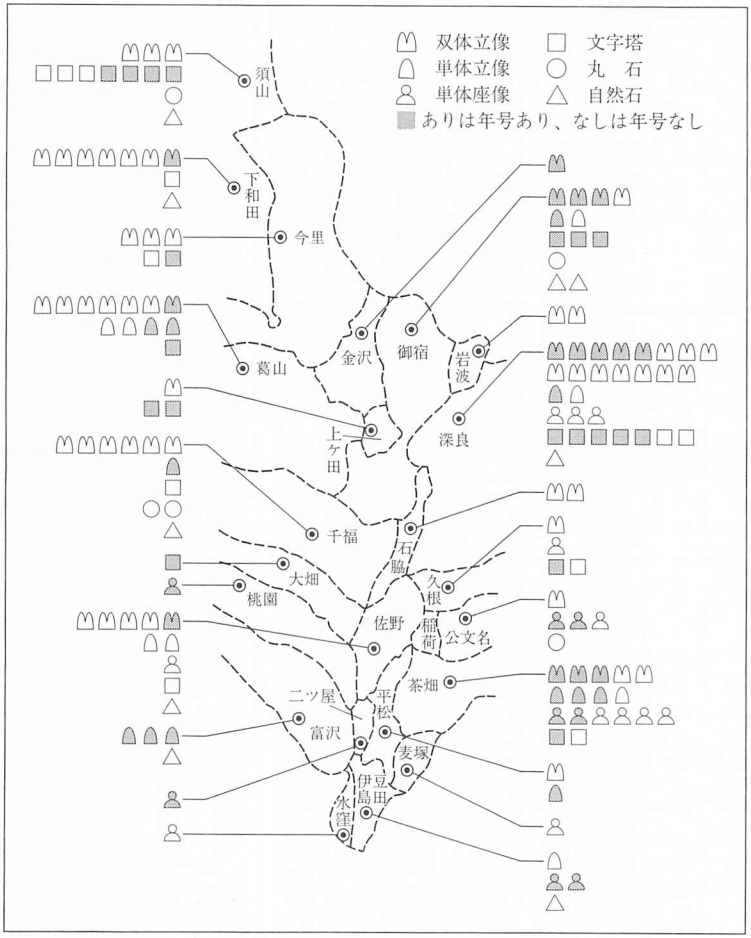
単体座像
（茶畑滝頭
浅間神社
北西付近）

文字塔
（茶畑富士見台
遊園地内）

丸石
（御宿入谷
富岡中学校
グラウンド南付近）

自然石
（御宿入谷
八幡神社
境内）

図表4－21　市域の道祖神の例



図表4－22　市内各地の道祖神

深良	石脇	佐野	冨沢	二ツ屋	水窪	伊豆島田	久根	稲荷	公文名	平松	茶畑	麦塚
											⋂	
⋂			∩									
											♙	
										∩		
⋂		⋂	∩	♙		♙						
											∩∩	
∩												
											♙	
⋂											⋂	
⋂			∩								⋂∩	
									♙			
⋂												
□□												
									♙			
□							□					
□											□	
□						♙						
⋂⋂⋂ ⋂⋂⋂ ⋂⋂⋂ ⋂∩♙ ♙♙□ □△	⋂⋂	⋂⋂⋂ ⋂∩∩ ♙□△	△		♙	∩△	⋂♙□		⋂♙○	⋂	⋂⋂∩ ♙♙♙ ♙□	♙

年　代	須　山	下和田	今　里	葛　山	金　沢	上ケ田	御　宿	千　福	大　畑	桃　園	岩　波
1661 ～ 1670											
1671 ～ 1680											
1681 ～ 1690											
1691 ～ 1700											
1701 ～ 1710											
1711 ～ 1720							⩚				
1721 ～ 1730										♁	
1731 ～ 1740											
1741 ～ 1750							⩚				
1751 ～ 1760											
1761 ～ 1770				⩚							
1771 ～ 1780							⩚				
1781 ～ 1790		⩚					∩				
1791 ～ 1800											
1801 ～ 1810											
1811 ～ 1820	□			∩	⩚						
1821 ～ 1830											
1831 ～ 1840											
1841 ～ 1850											
1851 ～ 1860						□		∩			
1861 ～ 1870											
1871 ～ 1880						□					
1881 ～ 1890											
1891 ～ 1900	□			∩							
1901 ～ 1910									□		
1911 ～ 1920											
1921 ～ 1930											
1931 ～ 1940											
1941 ～ 1950							□				
1951 ～ 1960							□				
1961 ～ 1970											
1971 ～ 1980	□						□				
1981 ～ 1990			□	□							
1991 ～ 2000	□										
年　不　詳	⩚⩚⩚ □□□ ○△	⩚⩚⩚ ⩚⩚⩚ □△	⩚⩚⩚ □	⩚⩚⩚ ⩚⩚⩚ ∩∩		⩚	⩚∩○ △△	⩚⩚⩚ ⩚⩚⩚ □○○ △			⩚⩚

⩚ 双体立像　∩ 単体立像　♁ 単体座像　□ 文字塔　○ 丸石　△ 自然石

図表 4 - 23　道祖神

写真4－49　双体道祖神（深良）

六九〇（元禄三）年の富沢の一基、単体坐像の古いものは、一七一四（正徳四）年の茶畑と一七二一（享保六）年の桃園の二基で、この三種類ともに古くから並行して建てられてきたことがわかる。そして、文字塔の古いものは、一八一五（文化一二）年の須山、一八五四（嘉永七）年の上ヶ田の二基で、それ以後は文字塔がほとんどとなる。

南北の相違

次に、地区ごとに整理してみた図表4－23から言えることは次の点である。

男女双体像は、黄瀬川東岸では茶畑から北、黄瀬川西岸では千福から北に多く、須山、下和田、岩波、今里、上ヶ田では男女双体像が主となっている。

単体坐像は、黄瀬川東岸では公文名から南、黄瀬川西岸では桃園に一基だけで、二ツ屋、麦塚、水窪（みずくぼ）、伊豆島田では単体坐像が主となっている。

単体立像は、黄瀬川西岸では富沢以北、御宿以南、黄瀬川東岸では深良以南に見られ、富沢では単体立像のみである。

つまり、市域の北半分では男女双体像が多く、市域の南半分では単体坐像が多いといえる。男女双体像は、隣の御殿場市などでも見られ、長野県など広く見られるものであるが、単体坐像は、沼津市・三島市をはじめ伊豆方面で見られる地域的な特徴のあるものである。

市域はその両者の分布の境目で両者が混在する地域ということになる。

単体立像は三島市などにも多く、広く見られるものであるが、市域では中部から南部にかけて見られる。

三種の混在する地区で調べてみると、たとえば黄瀬川西岸の葛山では、男女双体像七基、単体立像四基、文字塔一基のうち年代のわかるものでは、一七六六(明和三)年男女双体像、一八一一(文化八)年単体立像、一八九九(明治三二)年単体立像、一九八三(昭和五八)年文字塔となっており、初期は男女双体像が、次いで単体立像、最後に文字塔へ、という変化が推定される。また、黄瀬川東岸の茶畑では、男女双体像五基、単体立像四基、単体坐像六基、文字塔二基のうち年代のわかっているものでは、一六七四(延宝二)年男女双体像、一七一四(正徳四)年単体坐像、一七五一(寛延四)年・一七五八(宝暦八)年単体立像、一七七一(明和八)年単体坐像、一七八二(天明二)年・一八〇三(享和三)年男女双体像、一八一〇(文化七)年単体立像、一九五五(昭和三〇)年文字塔となっており、この地区では、はじめ男女双体像が、続いて単体坐像、単体立像、と三種が並行して建てられたことがわかる。そしてここでも最後は文字塔になっている。

黄瀬川東岸で非常に広い範囲にわたっている深良で見てみると、男女双体像一五基、単体立像二基、単体坐像三基、文字塔七基、自然石一基のうち年号がわかっているもので見ると、一六八五(貞享二)年男女双体像、一七七〇(明和七)年単体立像、一七八六(天明六)年・一八〇三(享和三)年・一八四三(天保一四)年男女双体像、一八五六(安政三)年・一八六〇(万延元)年・一九三七(昭和一二)年・一九六〇(昭和三五)年・一九六八(昭和四三)年文字塔となっており、この地区では男女双体像が主で、そこへ各種の型式が入ってきて、最後は文字塔になったものと推定される。

(四)　庚申信仰の広まりと庚申塔の造立

写真4－50　上原の庚申塔（深良）

生きている庚申信仰

市域の石仏の中でも現代の民俗につながり、いまもその祭りが行われていて注目されるのが庚申塔である。深良の町田には、「庚申さんの森」と呼ばれる所があり、そこには庚申塔や牛馬供養塔、順礼供養塔、観音塔、灯籠などあわせて九基が建てられている。毎年八月の庚申の日が祭りの日になっている。庚申というのは干支の組み合わせが庚申にあたる日のことである。もともとは中国の道教の三尸の説から出たものといわれ、六一日めごとに巡ってくる庚申（かのえさる）の日の夜、人が眠ると人間の体内にいる三尸という虫が身体から抜け出して天帝にその人間の罪過を告げて早死にさせるので、延命長寿をはかるにはその夜は眠らずに徹夜しなければならない、というものであった。

まず、現在の庚申の祭りの様子を紹介すると、次のとおりである。

八月の庚申（かのえさる）の日がその祭りの日だといわれるが、旧暦で六月四日、新暦では八月二三日をあてることが多い。念仏講の人たちでまつっている。庚申塔の前を掃除して茣蓙（ござ）を敷いて座って念仏を唱える。一本の線香が燃えつきるまで「こうしんべい、こうしんべい、まいたり、まいたり、そわか」と唱える。区長から費用を預かっている近所の人からお茶や菓子の差し入れがある。「庚申さんは泥棒よけの神様だ」といい、泥棒に入られたら二度と入られないように、庚申塔のところへ注連縄を持っていって置いておくと良いという。念仏講の人たちは庚申塔のとこ

ろで念仏をあげると、つづいて二カ所ある道祖神の前に茣蓙を敷いてその前で鉦を叩いて南無阿弥陀仏の念仏を唱える。そこでも近所の人がお茶や菓子の差し入れをしてくれる。

深良の上原でも庚申の祭りが行われている。現在の上原公民館のあたりは昔庚申堂のあったところで、庚申堂を壊して公民館が建てられたので、庚申の本尊の青面金剛は現在は公民館の中にまつられている。毎年三月以降の初庚申が祭りの日で、当日は朝九時頃から世話人が集まって支度する。世話人は五人で二年に一回交代するが、ずっと昔庚申堂のあたりの土地を所有していたといわれる家だけは代々この庚申の祭りの世話をしている。一九二九、三〇(昭和四、五)年頃から弘法の祭りと一緒に行うようになった。また、ちょうど彼岸の頃なのでみんなあわせて一一時頃から始める。まず、西安寺の住職の念仏があり、そのあと施飯の用意がある。施飯は、代々世話をしている家に集まり、米を一斗二升ほど炊き、団子を作ったり、野菜を煮たりしたが、今では弁当を取ってサトイモの煮付け、こんにゃく、ちくわ、ホウレンソウのごまあえを出している。費用は今では区からのわずかな補助とみんなからの賽銭とでまかなっているが、昔はお金や米、野菜などを持ち寄った。

町田や上原に限らず、庚申塔の建てられているところでは、泥棒に入られたとき、庚申を縄でしばると盗まれた物が見つかるとか、早く泥棒がつかまるなどといわれている。また、何か物がなくなったときには庚申に頼むと出てくるともいわれている。

下和田では失せ物をして見つからないとき、庚申塔を荒縄でしばって「ナム、コウシンサン」と祈る。しばるのは荒縄でないとだめだという。見つかったら縄をほどいて線香をあげて礼をする。「今でもチョイチョイしばっている人がいる」という。

深良	石脇	佐野	富沢	二ツ屋	水窪	伊豆島田	久根	稲荷	公文名	平松	茶畑	麦塚
○○	○						○					
○		○	○									
○○○					○	○	○					
○○		○										
○												
		○					○					
○						○			○	○	○	
○○		○	○				○○				○	
○												○
○○												
○			○								○	
○○○○		○					○				○	
											○	
											○	
○											○	
○○○												
	○		○	○○			○		○○	○○	○○	

年代別一覧

年　代	須　山	下和田	今　里	葛　山	金　沢	上ヶ田	御　宿	千　福	大　畑	桃　園	岩　波
1661 ～ 1670	○○	○			○	○	○				
1671 ～ 1680				○			○				
1681 ～ 1690			○					○			○
1691 ～ 1700				○							
1701 ～ 1710											○
1711 ～ 1720	○						○				
1721 ～ 1730			○	○	○						
1731 ～ 1740											
1741 ～ 1750							○		○		
1751 ～ 1760				○				○○			
1761 ～ 1770											
1771 ～ 1780											
1781 ～ 1790											
1791 ～ 1800	○							○			
1801 ～ 1810											
1811 ～ 1820											
1821 ～ 1830							○				
1831 ～ 1840				○							
1841 ～ 1850	○										
1851 ～ 1860							○				
1861 ～ 1870											
1871 ～ 1880											
1881 ～ 1890											
1891 ～ 1900											
年　不　詳		○○		○				○			

図表4－24　庚申塔

写真4－51　金沢の庚申塔

水洟でも何か盗まれると庚申塔を「縄でヒッチバル」という。そうすると失せ物がでてくるといった。庚申は観音と一緒に毎月一七日にまつっている。もとは奥村土建のところに観音と一緒にあったが、個人の地所だったので公民館に移した。

庚申塔が示す信仰史

この庚申の信仰はいつ頃この市域に入ってきたのであろうか。その歴史をさかのぼってみるために、市域に建てられている庚申塔について整理してみよう。

図表4－24が市域の庚申塔を編年順に整理してみたものである。これによりわかることをあげてみると、次のとおりである。

市域に建てられた庚申塔は全部で九六基で、最初に建てられた庚申塔は、一六六四(寛文四)年五月に須山に建てられたものである。その後、須山、御宿、金沢、下和田、上ケ田と、最初期のものは黄瀬川西岸の市域西北部に建てられ、深良、久根など黄瀬川東岸に初めて建てられるのは一六七〇(寛文一〇)年である。その後、黄瀬川西岸では葛山、千福、富沢へ、黄瀬川東岸では深良、久根、佐野などで造立が続けられるが、それに対して茶畑、平松、二ツ屋、麦塚など市域東南部では後半になって建てられるようになるが、あまり盛んではなかったように思われる。

庚申信仰の広まりに天台宗系統の修験者が関与していたことが、他の地域では確認されているが、市域への庚申信

仰の伝播にも、天台宗系統の僧か修験者が関与していた可能性を示すのが、金沢の一六六七(寛文七)年の庚申塔である。銘文に「六拾歳月下庚申　日掛一念　奉持山王　三世安楽　寿万歳長久　子孫盛所」とあり、この山王の文字は山王信仰と天台宗の影響を示すもので、庚申信仰の猿と日吉山王権現の使いである猿との関係を強く示唆する。彫刻されているものも、初期のものは日月(じつげつ)、鶏、猿が主で、日月と徹夜と鶏明、また見ざる言わざる聞かざるの三猿と天帝に告げ口をする三尸の虫への警戒、などがよく対応している。

造立の趣旨は、初期のものでは、銘文に、「天下和順　日月清明」とか、「現当二世安楽」とか、「南無阿弥陀仏」、などとあり、さまざまであったことがわかる。ただ、前述の深良町田の庚申の森にある一六七〇(寛文一〇)年の庚申塔には、「誓願信心徹上天三尸穏正得安全　庚申妙相端然現謄古輝今渡世縁」とか、「累年一歳六度奉待庚申矣　加之今月今日企石塔造立」、「庚申信心之輩　現世除貧苦為吉祥　来度転罪業得解脱必然　況願主之人々内除七難外生七福人身堅固而子孫繁栄矣」などとあり、三尸の説もここには伝えられており、年に六度の庚申待ちを行って、その成就を期してこの庚申塔を造立したものと思われる。そしてこの庚申のご利益としては、現世と来世の二世安楽と子孫繁盛であったことがわかる。現在の民俗として伝えられている泥棒よけとか失せ物については、銘文には書かれていないが、この深良の町田の庚申の森に対する信仰は、市域に庚申信仰が入ってきた寛文年間(一六六一～一六七三)以来の古いものであると言うことができる。

彫刻されているものには、初期のものは、造立の趣旨や願主の名前などを書き、日月、二鶏、三猿を刻んだものが多く、主尊の青面金剛を刻むものもあったが、しだいに庚申供養塔とか庚申塔とだけかんたんに書くものが多くなっている。また、市域では一基だけ猿田彦の名前を刻んだものが、一八四五(弘化二)年に須山の十里木(じゅうりぎ)の三叉路に建て

られている。

造立した人々については、初期のものは願主として数名から数十名の名前が連記されているものが多いが、やがて同行、講中という言い方も出てきて、後半は講中が多くなっている。

六〇年ごとに巡ってくる庚申の年に庚申塔を建てることが行われているのも注意される。一六八〇(延宝八)年の庚申の年には二基建てられているが、この頃はまだ庚申の年だから建てたという意識は銘文からはうかがえない。しかし、次の一七四〇(元文五)年には四基、一八〇〇(寛政一二)年には六基、一八六〇(万延元)年には四基と集中して建てられており、それぞれ庚申の年だから建てたという意識がうかがえる。

また、一七七三(安永二)年の深良の上丹の庚申塔に「庚申二百度供養」とあり、一七七六(安永五)年の深良の新田の庚申塔に「庚申二百十六度供養」とあるのが注目される。それぞれの区画には各種の石仏、石造物が集中して建てられており、前者では庚申塔は一六八三(天和三)年、一七七三(安永二)年、一八〇〇(寛政一二)年、一八六〇(万延元)年の四基、後者では庚申塔は一七〇〇(元禄一三)年、一七七六(安永五)年、一八〇〇(寛政一二)年の三基が建てられている。この一七七三(安永二)年の二百度供養というのと、一七七六(安永五)年の二百十六度供養というのは、一年に六回ずつ庚申待ちを続けてきたとすれば、一七四〇(元文五)年のちょうど庚申の年から始めたことになる。この上丹と新田では、六〇年ごとの庚申の年を特に意識しながら六〇日ごとの庚申待ちを続けていたことがわかる。

第五節　伝説の世界

㈠　伝説の意義

伝説と事実

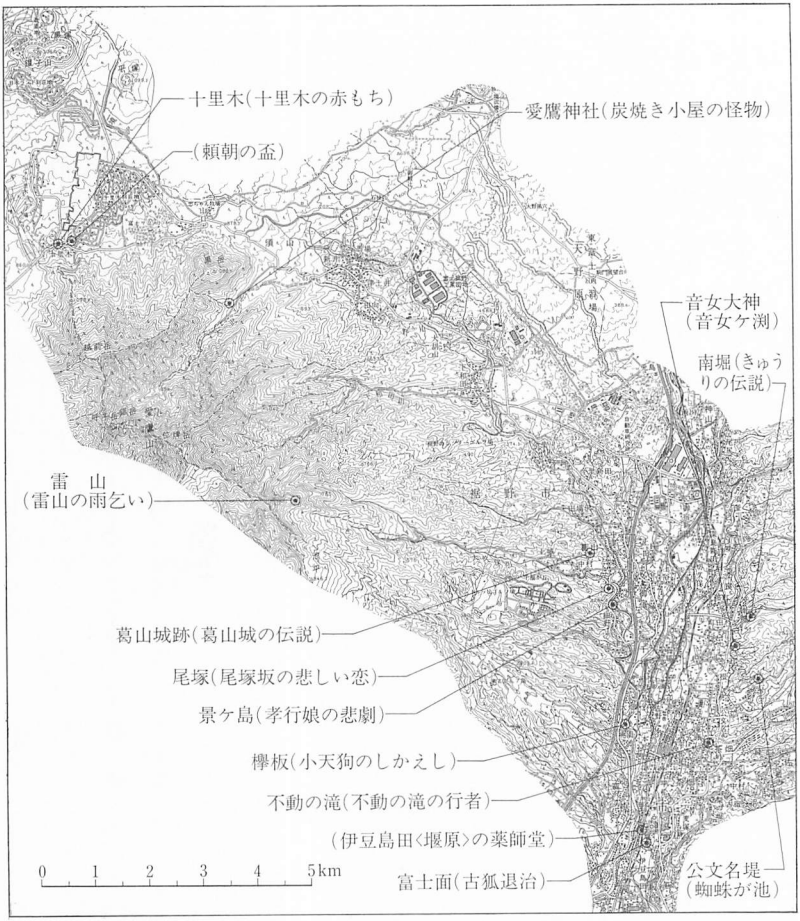
市域には多くの伝説が伝えられている。伝説の大部分はめずらしいもの、変わったもの、重要なものについて、その由来を説く話である。昔話が「むかし、むかし、あるところに」で始まることが多いように、時間も場所も特定しない単なる話であることを強調するのに対し、伝説は必ずのようにその話の内容に対応する事物が現実に存在し、話も多くが特定の時間や特定の人物を明示している。そのため、しばしば伝説は過去に実際にあった歴史的事実と思われてしまう。しかも、歴史の知識が普及するにつれて、話の内容を歴史の知識と対応させて、事実としての可能性を大きくする傾向があった。伝説の時間も登場人物もしだいに歴史的事実として信じられる存在に変更されてきたと言える。それぞれの伝説を伝えている地域では、それが伝説なのは裏付けとなる文字資料がないという点にあり、語られている内容自体は歴史的事実だと信じている人が多い。しかし、伝説をより広域的に見てみると、他の地域、他の地方でも同じ話が伝えられていることに気づくことになる。伝説は場所を変えて同じ筋立ての話が伝えられているところに特色がある。そのことが、伝説は歴史的事実でないことを示しているのである。

伝説にはさまざまな種類がある。従来は語られる対象の事物に基づいて分類することが多かった。たとえば樹木に関する伝説、石に関する伝説、淵に関する伝説、山に関する伝説などという分類である。語られる内容の結果としてそれらが現に存在するから過去に実際にあった事実であると信じられてきた。たしかに弘法大師や日蓮上人が箸を刺

したものが成長した大銀杏、武田信玄が腰掛けて休憩した大きな石などはいかにも実際にあったように思ってしまう話である。しかし、すぐに歴史的事実ではないことがわかる伝説も多い。その代表が伝説に登場する主人公が人間でない場合である。キツネ、タヌキ、犬、オオカミなどの動物が行った結果としてある事物が現に存在するという伝説は現代の人間であればだれも事実あったこととは思わないであろう。しかし、これらも私たちの先祖は実際にあったこととして信じて、語り伝えてきた。

伝説の傾向と特色　市域の伝説は全体としては自然との関係を強調するものが多い。動物を主人公とした伝説が目立つ。まずキツネの活躍である。キツネは人に化けて人を化かす動物とされてきたが、市域でもやはり人を化かしてきた。その話の筋は世間話とされるようなものであるが、キツネを退治した人物やキツネの死骸をまつりこんだ祠の存在がこの話を事実かのように伝えさせることとなり、今でも人々の記憶に留まっているのであろう。キツネだけでなく、オオカミも伝説に登場する。市域の富士、愛鷹の山麓地帯であることがこれらの伝説に反映していると言ってよいであろう。また、カッパ、天狗が活躍する伝説が聞かれるのも興味深い。そして、当然のことながら富士山や愛鷹山に関する伝説も伝えられている。

教科書に登場するような歴史上の人物が市域で活躍したという伝説はあまり多くない。その中で富士の巻狩りで有名な源頼朝が十里木の湧き水に盃を沈めたという伝説は興味深い。また、近世の地誌に記載された今里の頼朝関連の伝説が、馬を淵に引き込むという河童駒引きの内容を示していることは興味深い。しかし、これら以外に頼朝が活躍した痕跡は見られない。頼朝以外のこの地方を通過した可能性のある歴史上の人物もあまり伝説化しなかったようである。日蓮も車返しの道場の伝説を除いては聞かれないし、武田信玄や北条早雲あるいは今川義元という戦国大名も



図表4－25　伝説関係地図

伝説には顔を出すことはない。伝説上では日本各地を巡行した弘法大師も市域を訪れなかったようである。弘法大師が杖を突いて清水を湧き出るようにしてくれたという弘法清水とか弘法井戸あるいは弘法大師が箸や杖を突きたてたらそれが大木に成長したという弘法杉などといろいろな事物に因縁がある弘法大師であるが、市域ではそのような伝説は見られない。市域で活躍した歴史上の人物と言えば葛山氏であるが、歴代の葛山氏が伝説の主人公におさまっていることもそれほど多くない。その少なさから判断すれば、葛山氏も市域の人々にそれほど親しまれる存在ではなかったのであろう。しかし、固有名詞を伴った主人公としては葛山氏とその関係者や家臣が市域の伝説で活躍する人々であることは間違いない。

市域の伝説の特色の一つは主人公が無名の人々であることである。そして、その語られる内容が生活に密着していることである。十里木では正月に餅をつかないという、いわゆる餅なし正月の由来を語る伝説は大いに注目すべきものである。餅なし正月は関東から中部地方にかけて広く伝えられる民俗であるが、その由来が赤く染まった餅であることは珍しく、餅なし正月の性格を知る手がかりになるものである。

以下で具体的な伝説を紹介していこう。最初に、伝説が歴史的事実でないことを現代人に教えてくれる伝説から紹介し、歴史的事実かのような本格的な伝説に及ぶことにしたい。なお、市域の伝説についてはすでに多くの文献に採録されている。ここでは主としてそれらの活字化されたものを引用する形で紹介することになる。その場合、採録された時点での形式を尊重したので、伝説の表現に統一がない。なお、引用文献は採話者などの資料を収集したものが多いため、採集者の名前を表記した後、掲載された文献を明記することにした。

(二)　動物にまつわる伝説

1　狐

①　古狐退治a(伊豆島田)

宝永年間、小泉村伊豆島田と堰原との間の「富士面」という処に夜な夜な美女が提灯を持って現れたので大騒ぎとなった。そこは非常に淋しい処であるからキット狐狸の仕業に相違ないと、腕自慢の者が出かけたが皆失敗し、鉄砲打ちが行っても駄目であった。富沢に市郎平という鉄砲の名人が居たが、それも出掛けるに際し、万一本当の人間であった場合には困るから村中の判を取って待ち構えていたら其晩も出たので女の体をネラって撃ったが、何んの手応えもなかった。翌る日の晩も又出かけて待っていると、又現われたので今度は提灯めがけて撃つと悲鳴が上り、駈付けて見ると娘が死んでいた。それで市郎平は自宅に背負って帰って三日許り様子を見ていると依然として娘の死骸であったのが、四日目の朝見ると大きな古狐の死骸になっていた。それで市郎平は狐の首を打落し、庭に小さな祠をつくって納めて置いた。市郎平は正徳二年九月七日に死に、子孫の渡辺家の庭には今もその祠が残っている。

(渡辺慎一「古狐退治」『史話と伝説　駿東の巻』)

②　古狐退治b(伊豆島田)

江戸時代も半ばを過ぎたころ、今の裾野市伊豆島田が駿河国、伊豆島田村と呼ばれたころのことです。

伊豆島田村と隣村の堰原との間に「富士面」と呼ばれる所がありました。ここには木が繁り、ほんの僅かひらけた

所がありました。また、ここを伊豆と駿河を結ぶわき道が通っていました。だが、昼でもうす暗いような寂しい道だったので、夜など、ほとんど通る人はありませんでした。

ある日のことです。

「真夜中に、富士面で若い女を見かけた。」

というううわさが村じゅうに広がりました。そのうちに、

「はじめて見た人は驚いて腰がぬけたって……。」

「すごい美人だそうだ。」

「この辺には、あんな美人はいない。きっと都からの落人が林の中に住みついたんだ。」

と、こんなうわさで村じゅうがもちきりになりました。なかには、仕事を放りだして娘の話に熱中し、真夜中にそっと富士面に娘を見に行く人まで現れました。

娘は夜ごと、きまって同じ時刻に同じ姿で現れ、手にあかりをさげて、ゆっくりもの思いにふけるように林の中を歩き、いつしか消えてしまうといいます。

しかし、昼間、林の中を探しても、人家らしいものも、人の住んだ気配のあるような所も全くありませんでした。

すると、今度は娘はきつねかたぬきが化けた姿だろうと言いだす者がいました。それがまたうわさとなって村じゅうに広まりました。

「こんなことでは、その辺りもおちおち通れない。」

と、村人たちはもう、この道を通らなくなってしまいました。

村人たちの生活に不便が起こってきました。

「水窪の親せきに行くにも、平松の方を回わって行った。」

「畑仕事をしていても夕方になる前に帰ってきた。」

などと不満を言い合いました。しかし、いつまでもこのままにはしておけないと対策を話し合いました。その結果、この化け物を退治することで意見が一致したが、この化け物、きつねかたぬきか、はっきりしません。だから、退治するといっても、どんな方法でやるのか簡単には決まりませんでした。しかし、話し合ってばかりいてもなんにもならない、とにかく捕まえてみようということになりました。

ある晩、村じゅうの力じまん、腕じまんが集まりました。計画を立て、分担を決めてから富士面へでかけました。現地に着くと、それぞれが、林の茂みに身を隠し、娘の現れるのを待ち受けていました。

どれくらいの時がたったでしょうか。いつもの時間になると、白い衣を身にまとった若い娘が、突然どこからともなく姿を現わしました。かまや棒を持って息をひそめていた力じまんたちは、一瞬目を見合わせ、

「今だ。」

と、だれからともなく声が掛かりました。みんなはいっせいに茂みをとびだし、娘めがけて襲いかかりました。

しかし、どうしたことでしょう。娘の姿はまぼろしのようで、なぐっても、おさえても、ふんわりと身をかわしてしまって、全く手ごたえはありませんでした。それでもみんなは必死に追っていきました。しかし娘は、みんなの追うのをしりめに、すっと林の中に姿を消してしまったのでした。

力じまんたちは歯ぎしりしてくやしがりました。どうしても捕り押さえなければ気がすまないと口々にいいました。

次の晩も、力じまんたちは同じ場所で待ちかまえていました。

娘は、そんなことを知ってか知らぬか、いつものように姿をあらわしました。それをみた力じまんたちが、さっとびかかろうとしたときでした。娘の姿はふわっと空を浮くように遠ざかってしまったのでした。みんなはあっけにとられて見ているだけでした。

次の日、村人たちは集まってどうすればよいか再び話し合いました。

「あんなに逃げ足がはやくてはどうにもならん。」

だれかが言い、だれもかもうなづきました。

「あんなのを討つのは鉄砲しかないな。」

一人が言いました。反対する者はいませんでした。

「でも、だれがあんなのを撃てるか。」

「そうだなあ。」

「富沢の市郎平ならどうだ。」

別の一人が言いました。

「そうだ、市郎平なら撃てるだろ。」

みんながあいづちをうちました。

この話を聞いた市郎平は少々とまどいました。もしこの娘がほんとうの人間であったらという不安があったからでした。

「人間じゃあない。人間ならあんな速くは走れない。」
娘をみた者たちは口をそろえていいました。
「それに人間であっても、ただの人間じゃあない。」
だれかが言いました。
「そうだ、そうだ。そんなの撃ってもかまわない。」
みんなの声に、市郎平は退治に行くことを承知しました。
さっそくその晩、市郎平は富士面へ出かけました。どれほどの時がたったでしょうか。みんなに教わった場所で待ちかまえていると、娘はいつものように片手にあかりをさげて現れました。市郎平は木かげに身をかくし、鉄砲をかまえて娘をみつめました。ゆっくり歩く娘が市郎平の前にさしかかったときでした。
「今だ。」
そう判断した市郎平は、ぐっと指先に力を入れました。
「ダーン。」
音とともに、たまはたしかに娘めがけてとんでいきました。しかし、なんのてごたえもありませんでした。娘の姿はどこかに消えていました。
次の晩も、市郎平はまた同じ場所で待ちかまえていました。そこへやはり娘は現れました。今日こそはと市郎平は慎重に娘をねらって撃ちました。しかし、娘の姿はふわっと浮きあがったかと思うと、すっと遠ざかってしまったのです。

次ぎの日、市郎平は仕事の間も、何とか退治するいい方法はないかと考えていました。いい案は思いつかなかったが、その晩も富士面へと出かけました。いつもの時刻になると娘はまた姿を現しました。市郎平は鉄砲をかまえて、じっと娘を見ました。そのとき、市郎平は変なことに気づきました。娘の体がふわふわゆれているのに、手に下げている明かりがゆれていないのです。

娘は市郎平に近づいてきました。「ようし。」心の中でそう言うと、市郎平は娘が片手にさげているあかりをねらって引き金を引きました。すると、同時に、

「ギャアー。」

という女の悲鳴が聞こえました。市郎平がかけ寄ってみると、そこに娘の死体がころがっていました。市郎平は娘の死体を家まで背負って帰ってくると、物置きのかげに放り出し、その日はそのまま寝床に入ってしまいました。次の日も、その次の日も仕事から帰ってくると、のぞいてみるのだが、娘は死体のままでした。もしかすると、ほんとうの人間かもしれない、こんな気もちが強くなってきました。不安にかられた市郎平は自分が娘を撃ったことを、まだ村人には知らせませんでした。

四日めの朝のことでした。死体をのぞきこんだ市郎平は大声をあげそうになりました。それまでずっと美しい娘の姿であった死体が大きな古狐に変っていたのでした。市郎平は驚いたが、一方ではほっとしました。そして、すぐそのことを村人に知らせました。

このことは、すぐに村じゅうに伝わりました。村人たちは、これでみんな化け物の心配をしないですむと大喜びでした。

その後、市郎平は古狐の首を落として、庭に小さなほこらを作っておさめたということです。そのほこらは、今でも子孫である渡辺家の庭に残っているということです。

（大川利津子「〈伝説〉古狐退治」駿東文園六十年記念誌編集特別委員会『ふるさと駿東』）

③　古狐退治ｃ（伊豆島田・富沢）

この古狐退治に関して、富沢の渡辺隆徳家には次のような伝説が伝わっており、屋敷には稲荷をまつっている。

昔、伊豆島田の方で、夜な夜な提灯を持った好い女に化けた狐が現れて、通りかかる近くの若い衆をだましているという噂があった。これを懲らしめてやろうと、先祖の市郎兵衛さんが出かけ、女の持つ提灯めがけて鉄砲を撃ったところ確かに手応えがあった。しかし、当たったはずの狐はなかなか正体を見せず、市郎兵衛さんは誤って人間を撃ってしまったと思っていた。七日七晩の後、とうとう狐が正体を表した。渡辺家では狐の首を取ってきて、桐の箱に入れ、以来、稲荷の祠に納め、おまつりしてきたという。

渡辺家では今でも毎朝のように稲荷に温かいご飯とお茶を供えることを習慣としている。また、初午には稲荷神にオアゲ（油揚げ）、赤飯、頭つきの魚と、供物として菓子や果物を供える。同家の稲荷は「夜泣きをなおす神」として知られていて、あちこちから「正一位稲荷大明神」と書いたのぼりを供えにきたものだという。あるお婆さんは渡辺家の稲荷に願をかけ、願いを成就することができたが、オハタシ（お果たし、お礼参り）を忘れたため、夢枕に同家の稲荷神が現れたという言い伝えも残っている。

（富沢　渡辺文江（一九一〇年生））

④　大野原の金キツネと銀キツネ（須山）

富士山の東側は広大な草原が広がっています。私たち祖先は、それを大野原と呼んできました。大野原が今よりずっと草深い頃のお話です。

この草原にごく気のいい金キツネと根性まがりの銀キツネが住みついていました。

その頃、旅人たちは、富士から十里木、大野原を通り箱根へ通ずる街道を歩いたのでした。街道と言っても荷馬がすれちがうのがようやくの細いさみしい道でした。

銀キツネは、夕暮れ近くになると村人の姿に化けて足早やに通る旅人に声をかけたのでした。

「こちらの道の方が近いですよ」……と旅人を迷路に誘いこんでは、持物から美味しい食べ物をとりあげてしまいました。

一方金キツネは、迷い子になった旅人を村里まで送りとどけたのです。

旅人は、美味しいものは奪われてしまい、お礼をしたくも何もありませんので、金キツネはいつも貧乏くじをひいていました。ある日のできごとです。

草原が大火事に見舞われました。火は南風にあおられて、またたく間に火の海になりました。

気のいい金キツネは、友だちの銀キツネに早く知らせようとしたのです。

銀キツネはすっかり眠りこんでいました。余りにもタラフク食べすぎて逃げることができませんでした。

それからしばらく経って、銀キツネが焼け死んだ跡から木が生え大きく伸びていきました。

里の人々は、そこを今でも〝石の神〟と呼んでいるそうです。

（語り手すぎやまひろみち　記録せりざわみつひろ「大野原の金キツネと銀キツネ」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第九号）

2　狼

①　尾塚坂の悲しい恋（葛山）

その昔、葛山と伊豆北条（修善寺の在）の若い男女が恋におちました。

「三七・二十一日通ってくれば夫婦になろう」

という若者のことばに、乙女はひたむきな心をもやし、夕に出かけ明方に帰り、雨の日も風の日も通いつづけたのでした。

そして、その最後の夜、喜びと期待に胸をはずませ道をいそぐ乙女の行手に待ち受けていたのは、世にも恐ろしい狼でありました。乙女は悲しくも、あわれにも尾塚坂の露と消えたのでした。

この悲しき乙女の菩提のために、いつしか村人たちは塚を建てたのです。

塚は今でも尾塚坂に残されています。

（大島「尾塚坂の悲しい恋」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第七号）

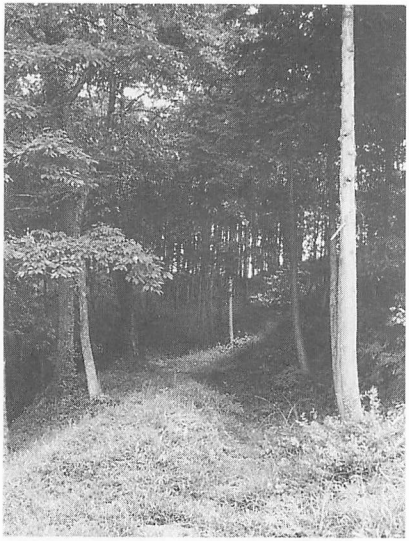
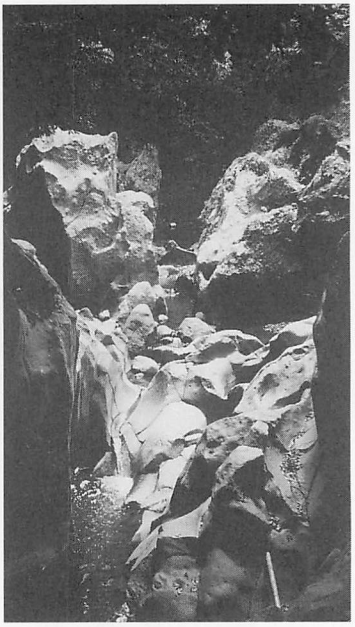


写真4－52　尾塚坂（葛山）



1

2

写真４－53　景ケ島（葛山・御宿）
1　景ケ島渓谷
2　孝行娘のために建てられたといわれる祠

② 孝行娘の悲劇（千福）

景ケ島に未だ道が通じていない頃、村人は溶岩流の絶壁の割れ目を利用し、浅瀬を渡って歩きました。

ある孝行な娘が家に待つ病んだ父の身を案じながら家路にいそぐ途中、恐ろしい狼に出あって、かみ殺されしまいました。娘の帰らないのに不安を感じた父親は、病をおして探し歩いたのですが、景ケ島の岩石のくぼみに娘のちぎれた着物としたたるような鮮血を発見したのでした。

父親は驚きと悲しみのうちに、娘の菩提を祈り、その一生をこの景ケ島のお堂で終えたということです。

後に村人が、あわれな親子の供養のため、観音像を自然石に刻み長八という大工にお堂を建てさせたことを伝えています。石のくぼみは「血の池」といって今でも血がにじんでいるように赤く見えるそうです。

（大島「考行娘の悲劇」裾野郷土研究会『裾野郷土研

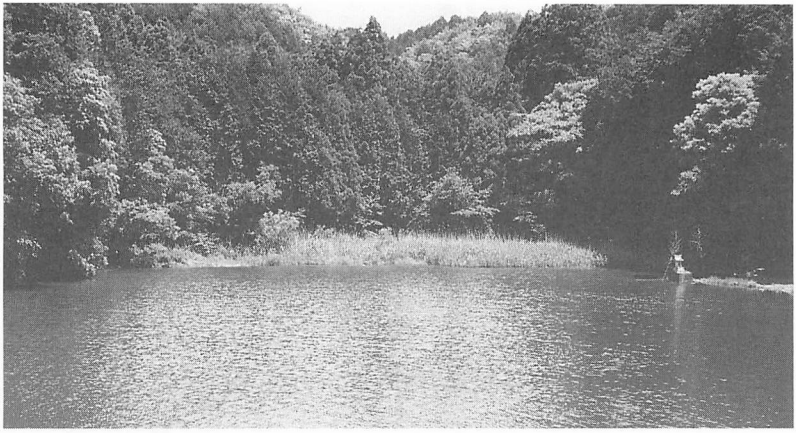


写真４－54　蜘蛛が池（公文名）

究』第七号）

３　蜘　蛛

①　蜘蛛が池ａ（公文名）

或夏の日、公文名の蜘蛛が池で一人の男が釣をしていた。其日は珍らしくよく釣れたので、夢中になって釣っていた。その時、穿いていた片方の下駄が脱けて落ち、池へ動いて行くので、釣竿の先きで突ついて見ると、下駄の裏に蜘蛛が巣を張って引張っているのであった。男は（小癪な奴め）と釣竿の先きで下駄を引寄せようとしたら足を滑らせて、も一方の下駄も池に落してしまった。そして何気なく魚籠を見ると沢山釣っていた魚は一匹もなく、中には笹の葉がある許り。それで男は気味悪くなり、急いで帰ろうとするとこんどは沢山の蜘蛛が湧いて出たように現われて、男に搦みついて来た。その男は初めの中は一々踏潰していたが余りに数が多くて、潰し廻っている中に精根も尽き果てて其場に昏倒した。

（植松春雄「蜘蛛が池」『史話と伝説　駿東の巻』）

② 蜘蛛が池b（公文名）

公文名堤は箱根西麓の裾合いをせきとめてつくった用水池で、村人は〝つつみ〟とよんでいます。このお話は、いつ頃のできごとか誰も知りません。

木立にかこまれ、昼でもうす暗く、静まりかえった藍色の〝つつみ〟は水を満々とたたえておりました。

のどかなある日、釣をしていた若者がおりました。

若者はあやまって草履を池に落してしまい、それを拾おうとしてずるずる池に落ちてしまいました。若者は、無我夢中で池の端にはい上ろうとしたのですが、「誰か助けてくれ」……という叫びごえをのこして、なにものかに吸いこまれるようにして池の底に沈んでいきました。

やがて水面はなにごともなかったように元の静かな池にもどりました。たゞ蜘蛛の糸が無数にからみついていた草履が浮かんでいたそうです。それから村人たちは、この池を〝蜘蛛が池〟とよぶようになりました。

（加藤はな「伝説　蜘蛛が池」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第七号）

4　カッパ

① 音女（おとめ）ヶ淵（深良）

第一章

昔、現在の町田の東側辺りにあった古い伝説です。川の向こう側（東）には二軒の家がありました。一軒にはいたずらばかりしている息子が、もう一軒にはとめという娘がいました。息子は悪いことばかりして困るのでどこかに連れ

2

1

写真4－55　音女ヶ淵（深良）
1　淵
2　音女大神

ていかれてしまいました。それから何日かたった後に、娘が川の淵のそばを歩いていたらカッパに足をつかまれてみるみるうちに淵にひきずりこまれ、死亡しました。二人の両親はいなかったために両家はほろんでしまいました。

第二章

何百年か後に淵のそばに石屋の一家が引っ越してきてからのことです。嫁のおりよが子宮ガンにかかり苦しみました。それがとめの霊だとわかったので、主人のかめ吉や息子たちはなんとかしようとして一生懸命でした(とめの霊は誰も供養してくれなかったからだと言われます)。そして、かめ吉は自分が石屋だったので自ら墓を作り、とめの霊をまつり、なんとか成仏させたのです(これは昭和九年八月二六日のこと)。墓には音女大神(おとめだいじん)と書いてあるが、とめという名前から後に音女となったと思われます。子宮ガンの手術をしたおりよは無

事に治り、幸せに暮らしました。

（淵や墓は今でも残っている。石屋の子孫は今もかめ吉の家に盆だけ帰ってくる。）

（平成二年度裾野市立深良中学校一年『深良の伝説〜その調査記録〜』）

5　天　狗

①　炭焼小屋の怪物（須山）

ここの奥の堂上に小枕という地名の処がある。そこには愛鷹神社の小さな祠があって、その森には昔は天狗が居るという噂で、山伏たちはよくここへ行に来ていた。明治四十年頃のことであるが、その近くに私の炭焼小屋があって夏の間は使わずにいたから村の宮崎貞吉が貸して呉れ、というので貸していた。或晩宮崎がフト眼を覚すと自分の傍らに毛ムジャラの小僧のような者が抱かれるように寝ていたので驚いて、起きて火を燃して見ると足の方にも一人居て、どちらも火を燃しても熟睡していた。それで貞吉は一生懸命に火を燃して勇気付けていたら外にももう一人居て、それが火の付いた棒を手に持って「この野郎っ。火を燃すと小屋を焼払って仕舞うぞ！」と怒鳴ったので、其後は夢中に小屋を飛出し、山を駈け下りて家へ逃げ帰った。家に着いてからも「そこ迄天狗が追っかけて来た。」と暴れるので家の者が取押え寝かせたら三日の後に正気づいた。

以前は富士郡の法印（山伏）たち数名は八月二十八日の「仕舞い山」（最後の登山日）に登り、数日山頂で行をしてから下り、二日は印野の北畑で護摩を焚き、三日は印野本村で焚き四日須山に馬でやって来る。そのとき村の子供らは十丁先きの大野原に一行を出迎え、法師たちが来ると皆道に這って法印に跨いで貰う。それは法印に跨いで貰うと病

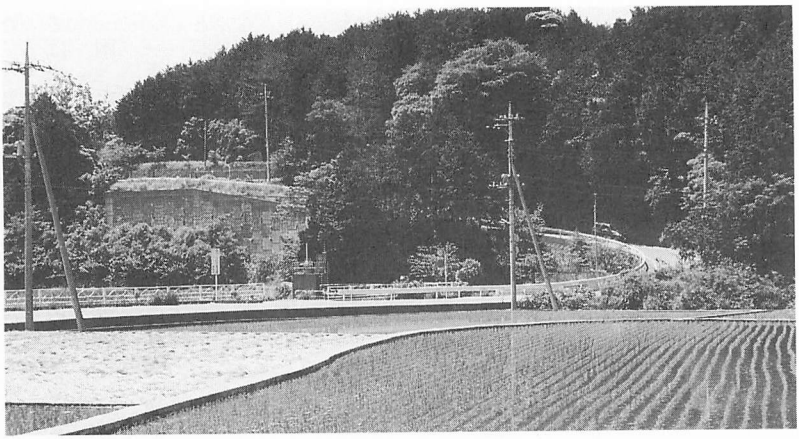


写真4－56　欅　　坂（大畑・桃園境）

気しないと伝えられているからである。私も子供の頃そこで這っていたら法印の一人は馬から降りて一々子供を跨いで行った。七日観音堂で護摩を焚く前の日、六日にこの「堂上」に来て護摩を焚き、おこわの握飯を森の中で上へ拋り上げる。むすびが落ちて来なければ天狗の御気嫌がよいこととされ、落ちて来たら気嫌が悪いというのであった。そして落ちた場合はあわてて急坂を後しざりに下りていた。

（杉山広「炭焼小屋の怪物」『史話と伝説　駿東の巻』）

② 小天狗のしかえし（大畑・桃園境）

むかし、千福に、横山豊後守という、たいへん武芸にすぐれた侍が住んでいた。豊後守は強い弓を引くことでも有名だったが、そのころめずらしかった鉄砲を使わせても名人といわれ、このあたりでは、豊後守のことを知らない人は一人もいなかった。

千福の南に大畑というところがある。ここを流れる黄瀬川に、山がつき出たような地形があり、欅坂と呼ばれていた。この欅坂には、昼なお暗く木の生い茂った森があり、そこには、一人の天狗が住みついていた。この天狗は、毎日毎日することがなくて、たいくつでしかたがなかっ

た。そこで人里へ出かけて行っては、となりどおしの家の馬と牛を入れかえたり、人をおどかしたり、いたずらをしては楽しんでいた。そのため人々は、安心して夜もおちおちねむることができなかった。

困った村人は集まって相談をした。そして、豊後守に天狗退治をたのむことになった。豊後守は、

「天狗など、ものの数ではないわ。まかせておけ。」

と二つ返事でひきうけた。

欅坂についた豊後守は、

「さあ、どこからでもかかってこい。天狗め！」

と、ゆだんなく鉄砲を構えた。しかし、天狗の姿は見当らない。どこかにかくれているのか、豊後守がこわくてにげたのかー。

ついにしびれを切らした豊後守は、

「出てこい、いたずら天狗。この豊後が相手にしてくれるわ。」

と、森に向って大声でわめきたてた。だが、どこからも音ひとつ聞こえてこない。

がまんできなくなった豊後守は、鉄砲を構えると、一きわ高い欅のこずえめがけて、

「ズドン。」

と一発、うちこんだ。

そのとたん、

「ぎゃあ。」

というさけび声が尾をひいて、欅のあの枝、この枝をゆすりながら、天狗がさかさまにおちてきた。天狗は髪を乱し、息たえていた。

鉄砲をかたづけて、帰りじたくを始めたそのとき、豊後守は、後ろでざわざわとものすれ合うような音がするのに気づいた。あわててふり返ってみると、どうだろう！　死んだばかりの天狗の髪の毛がざわざわと動いているではないか。——天狗が息をふき返したのか——ぞうーとしながら見つめていると、髪の毛の一本一本が、みんな小さな天狗になって、そこらを走りまわりはじめた。

頭から水をかけられたような気もちになって、豊後守がものも言えないでいると、小さな天狗たちは、口々に、

「親のかたきをとらねば……。」

「親の無念をはらすは、小天狗のつとめ……。」

とさけび走り出したのだ。

われに返った豊後守は、あわてて小天狗たちの後を追い、一人、二人とつかまえていったが、あまりの数の多さに、もうどうにも手がつけられなくなって、鉄砲も何もかも放り出して、にげ出してしまった。

小天狗たちは、きみょうなわめき声をあげて、にげる豊後守を追って千福までおしかけてきた。そして豊後守のやしきまでくると、いっせいにたいまつに火をつけて、やしきめがけて投げつけた。たいまつの火は、次から次へと雨のようにふりそそいだ。

空高く黒いけむりをまきあげ、風をよんで、ゴーゴーともえさかる炎の中に、小天狗たちの、

「親のかたきをとらねば……。」

「親の無念をはらすは、小天狗のつとめ……。」

と、うたう声が、いつまでも聞こえていた。

（「小天狗のしかえし」駿東文園六十年記念誌編集特別委員会『ふるさと駿東』）

(三)　事件にかかわる伝説

①　十里木の赤もち(須山)

「おおつかれた。やれやれ、ここまで来ればもう安心だろう。」

「あの広い大野原を通って、こんな山の中まではこないだろう。」

「ああ寒い。それにおなかもぺこぺこだ。ちょうどいい、ここで休もう。」

などと、あたりに気をつけながらこそこそと話し合っている十数人の武士たちがいました。

相談がまとまったらしく、その武士たちは、ここで休んだり、昼食を食べたりすることになりました。

その日は十二月二十八日で、十里木の家々では、ちょうど楽しい餅つきの日でした。

武士たちは、昼食を食べながら餅つきのようすを見物していました。

「お正月のお餅つきですねえ。」

「旅のとちゅうではおつかれでしょう。お餅がつけたら、たくさんさし上げますよ。」

「それはうれしい。ぜひごちそうしてください。」

気をはりつめてにげてきた武士たちは、村の人たちのやさしい気もちにほっとして、（今ごろは、自分の家でもき

っと餅つきをしているだろうなあ)と、遠くはなれた家族のことを考え、涙ぐむ人もおりました。

そのころ大野原では、槍、刀、鉄砲を持った大勢の人たちが、大声で、

「おかしいな、見つからないぞ。」

「どこへにげてしまったのだろう。寒いし、ここまで来ても見つからないのだから、もう帰ろうか。」

などと話していました。その時、仲間の一人が、

「でも、この原をこした山の中に、十里木という小さな村があります。もしかすると、そこにいるかもしれませんよ。」

と言いだしました。帰りかけた人たちは、

「そうか。それでは元気を出してそこまで行ってみよう。」

と、気をとりなおし、十里木へ向って歩き出しました。

十里木へにげこんだ十数人の武士は、日本の政治のしかたについて、当時、政治の中心となって活躍している人たちと意見があわず、江戸(今の東京)にいると命があぶなくなったので、自分の郷里の滋賀県へにげていくとちゅうだったのです。ですから、なるべく人目のつかない道や、わざと人の通らない山の中の古いさびしい道をにげてきたのです。

やがて、後から追って来た大勢の人たちは、そうっと十里木へ入ってくると、そこで休んでいた武士たちを見つけてしまいました。

「あっ！　いるぞ、いるぞ。」

「ゆだんしているぞ。みんなつかまえろ。」
「むかってきたら殺してしまえ。」
「わあー、わあー。」
「ドーン、ドカーン。」
安心して休んでいた武士たちは、あわててにげたのですが、にげおくれた三人の武士が鉄砲でうち殺されてしまいました。そして、その時の血で、餅が赤くそまってしまいました。
それからというもの、十里木では、武士たちの死をいたみ、
「お正月に餅をつくと、殺された武士の血で餅が赤くなる」
と言って、正月の餅をつかなくなったのです。

（「十里木の赤もち」駿東文園六十年記念誌編集特別委員会『ふるさと駿東』）

② 頼朝の盃(須山)

源頼朝公が鎌倉に幕府を開いた次の年と言うから、今からおよそ八百年ばかりむかしのことになる。頼朝公がこの十里木のあたりで、大巻き狩りを行った。
幕府の基礎がすっかりかたまって、将軍という地位にも落ちついた頼朝公は、武士たちの訓練もかねながら、鎌倉をとり巻く国々の様子を視察しようと思ったのである。頼朝公は一万一千騎を従えて、堂々と富士の裾野にのりこんできた。

鹿を追い、うさぎを狩る日が幾日も続いたある日、その日も朝からたくさんのえものを追い立てていた。昼近くなってほら貝が鳴り、一休みすることになった。涼しい風が吹きぬけるブナの林の中でひと休みした頼朝公は、ひどくのどがかわいたので、近くの家来に声をかけた。

「だれか、水をもて。」

頼朝公の声を聞いた侍の一人が、あわてて自分の腰の竹筒をさし出した。その水のおいしいこと。

「うまい水じゃ。どこでくんで参った。」

わき水であることを知った頼朝公は、これを流れのところで飲んだらもっとうまいであろうと考え、その侍に案内を命じた。

そこは、岩の間から、ちょろちょろと水がわき出していた。そうっと両手ですくうと、手が切れそうに冷めたい。一口すると、全身にしみ通るような冷たさに、甘みまで感じられる。

「甘露、甘露。だれか盃を持て。」

頼朝公は、大ぶりの盃に何ばいも飲みほした。

夜になっても、頼朝公は、昼間飲んだ水のおいしさが忘れられない。もう一ぱい、あの水を飲もうと、思い立った頼朝公は、わき水のところへ案内した侍にたいまつを持たせて、泉のところへ出かけていった。

岩の間から流れる清水は、そこに池ともいえない小さな水たまりを作っている。頼朝公はこのおいしい水がいつまでもかれないようにという願いをこめて、持ってきた大盃を水の底に沈めたのである。と、ふしぎや、わき出している水の量が少しずつ増えて、そこは池のようになったという。

それから何十年かが過ぎた。村には頼朝の盃の話を知る人も少なくなって、わずかに言い伝えとして年寄りの間に残るだけとなった。

ある年、沈んでいるはずの頼朝公の盃が、ときどき水面に浮かんでくるというわさが、村のあちこちでささやかれた。村人たちは、どういうわけだろうとふしぎに思ったが、人のうわさも七十五日のたとえのとおり、やがて気にもとめなくなった。そんなある日、とつぜん、ドスンと大地の沈むような大きな音が、村中にひびきわたった。村人が驚いて外にとび出すと、北の空がまっ黒で、富士の山はだから何本も火柱が立っている。富士山の大噴火である。命からがら逃げのびた村人たちが、噴火のおさまった村にもどって来たのは、それから何か月もたってからだったが、あのおいしい水は、相かわらずすずしい音をたてて、緑の下でわき出ていた。

それからまた、何年か過ぎた。平和なくらしが続いている村に、〝池に盃が浮いている〟のを見たという人が現れた。うわさはうわさをよんだが、日がたつと、人々は、またこのことを気にしなくなっていった。

そこへ大地震がやってきた。山が裂け、川はあふれ、家々は倒れて、けむりをあげてもえはじめた。

こんどこそ人々は、池に盃が浮かんでくるわけが、はっきりわかったのだ。

「盃が池に浮くのは、天変地異の前ぶれだ。」

「そうだ。村人を災難から救おうと、頼朝さまがお知らせくださるのだ。」

それを信じない人は、だれ一人いなかった。

そして、今でも人々は、そう信じているという。

（横山智子、横山礼子、横山真子、横山幸子「頼朝公の盃」駿東文園六十年記念誌編集特別委員会『ふるさと駿東』）

③　今里の大淵・刀石（今里）

大淵　小地名なり。里人の伝に云、往古は此処淵なりしが、富士野の御狩の時、頼朝卿の乗馬を此淵に引込て取喰ものあり。よつて淵をかへ水を干す。後代水尽て今は名のみ残るを云。

刀石　かたなを掛たる如き文あり。里俗頼朝卿の刀石と呼なり。西条の俗談今俗によつてこゝに載。

（『駿河記』下巻）

④　葛山城の伝説（葛山）

私の祖母の言い伝えでは、私の十一歳ごろ（祖母七十五）私の家は葛山備中守四天王の家臣とやらで、荻田、岡村、河内、半田の四天王だそうで、当時葛山城は仙年寺の山頂に、現在もその跡はあり、敵は現在の深良におり、葛山城ありと攻め入ったそうです。備中守、城にたてこもり、武士の一念、数日間の戦闘をしたそうで城より白米をさらさらと流して敵に滝に見せかけたとか、敵は、滝があって攻めこむことも不可能と思ってうら山の間道を通って攻め、たちまちのうちに城はおち備中守以下全将兵とも切腹したとか。

その時備中守が武士に命じて小判を土中にうめたとのこと、又朱も同時にカメに入れて一緒にうめたとのことで、そのような文書もあったとかです。また作り話か、真偽のほどはわかりません。

（河内好美「葛山城の伝説」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第二号）

写真4－57　毘沙門天大祭（公文名）

⑤　光明寺の不動（公文名）

昔、豊臣秀吉が北条の小田原城を攻めるときに、光明寺に火をつけてそのあかりで箱根山を越えた。当時、光明寺は大きな寺で、そこにお不動さんがまつられていた。このお不動さんは、秀吉に火をかけられたときに自分で逃げて深田に入ったとか、寺の坊主に担がれて深田に隠されたとかいわれ、難を逃れたという。公文名では深田のことをハダイといい、ハダイは水が冷たくて一毛作しかできない水田だった。しばらくすると、深田の中で

「いたい、いたい。」

という声がするので、掘り出してみると光明寺のお不動さんだった。このとき、毘沙門さんもともに埋められていたという。

茶畑の田んぼにはヒール（蛭）がいて吸い付くが、公文名の田んぼのヒールは吸い付かないという。それは、かつてこの田んぼにお不動さんが埋められていたからだ、といわれている。

（公文名　渡辺よしゑ〈一九二二年生〉、室伏礼子〈一九一六年生〉、中野美津枝〈一九一三年生〉）

⑥　茶畑の十三塚（茶畑）

茶畑平松の界にあり。建武二年乙亥十二月十二日足柄合戦官軍戦死の地なり。大小の塚二つあり。小塚は先年里人塚を発しに、石櫃に片石の蓋あり。内に朽骨計りにて分明ならず。また元の如く埋置しと云。古五輪あり。村老は中将為冬卿の御塚なりと云伝へたり。親塚と云はあまたの亡卒を集て埋たるを見ゆ。総て不浄の者あたりへ行へば必祟をなすと里人恐れあへり。又俗に座頭塚と云。此辺をむかしは佐野原と唱へしにやあらん。

（『駿河記』下巻）

(四)　信仰にかかわる伝説

① 伊豆島田の薬師堂（伊豆島田）

伊豆島田の薬師さんは霊験あらたかだというので知られていたが、或日旅人がこのお堂にはいって、本尊の方に足を向けて寝たが、朝になって見ると向きが変って本尊に頭を向けていた。その話を聞いてから益々人の信仰を集めたという事である。

（植松春雄「島田の薬師堂」『史話と伝説　駿東の巻』）

② きゅうりの伝説（深良）

今から二五〇年前の徳川時代、南堀で疫病（伝染病）がはやり、もうきゅうりを作らないので疫病が治るようにお願いした。きゅうりを作らない訳＝きゅうりを切るときゅうりの切り口が天神様の紋に似ているのできゅうりを食べると良くないことがおこると思っていたから作らないようにしている。南堀では昔から三軒の農家がきゅうりを作っていない（野際さん・広瀬さん・小見山さん）。他の農家の人がはつなりをくれるので、そのきゅうりを天神様にそなえ

る。

（平成二年度裾野市立深良中学校一年『深良の伝説〜その調査記録〜』）

③　不動の滝の行者（茶畑）

いつの時代のことかわからないが、あるひとりのさむらいが、金持の人をころし、そこの金をうばったということです。

ところが、自分に生まれた子が、赤ん坊なのに、うまれてすぐ、

「おとうさん、こんな夜だったね、人をころしたのは。」

と言ったということです。

その赤ん坊のうまれた夜は、しのつくような、どしゃぶりの雨の降る夜だったといいます。

さむらいは、そのことばにはっとして前におかした自分の罪の深さにおののき、前非を悔い、愛する妻も子もすてて旅にでて、各地をさまよいあるき、その金持の冥福をいのるべく修行をつみました。

そしてたどりついたのが、茶畑、滝頭、不動の滝だったということです。さむらいは、滝の東方に今もある、たたみ一枚ほどの広さの岩穴にすみ、滝の水にうたれて、その金持の冥福をいのりました。そしてせめてもの追善供養にと滝つぼの中に一つつきでている岩はだに

「南無妙法蓮華経」と経文をきざみつけました。

今も水のかれたとき、滝つぼの岩に、水のためにすっかり磨滅してしまった経文のことばをかすかに読みとることができます。

それから平松の芹沢新吾さんは、滝つぼの近くの岩の間から小さな石仏が落ちていたのを拾っているということです。

その後、このさむらいは、そこで亡くなったのか、また雲水の旅にでたのか、あの滝の音にかき消されたように杳としてその後のうわさは伝えられていません。

（清水重雄「〈伝説〉不動の滝の行者」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』創刊号）

④　雷山の雨乞い（葛山）

今から五七〇年程以前の事ですが鎌倉幕府では北条時頼の時代の頃でありました。当時関東一円及東海道地方一帯大旱りに見舞われ田の表面は地割れして稲は枯死寸前に有り村人は井戸の水を汲みせっせと田に運び水をかけ続けて居りましたが井戸水も涸れた所が多く唯雲を眺めて雨が降るのを待ち望むより他ありませんでした。

雷山に行った村人は雨乞のお祈りを如何に続けても一滴の雨も降らず諦めて下山して来てしまったのでした。

此の地方の城主葛山備中守は御館の中の水も不足し武将の屋敷では水が無くて大騒ぎをして居るのを見て城主は皆を集めて会議を行いました。

其の中で一人の武将が語るところによると

「大山阿夫利神社に居る修験者にて峰の行者と申す者が居り火の神を鎮め雨を降らせ悪疫を封じて人々の難儀を救う事再三、関東地方に於ては役の行者の再来とまで云われて居る」

と申されました。

城主は

「其の様な尊い行者が居るのは有難い、今すぐお迎えに行って来い」

と申したので一同は使者をたて大山神社に登らせる事にしました。

当時鎌倉では日蓮と忍性の布教上の闘争が続けられて居て特に五、六、七月と関東地方には雨が無く幕府は極楽寺の良観忍性に命じて雨乞いの祈禱を始めたのであったが其の結果は九月に日蓮が佐渡に流されることで終りました。

峰の行者は鎌倉からの乞いに対してこの二者の闘争の中に巻込まれるのをさけて山を下って当地に来たのは生き仏の日蓮や忍性より賢かったのかもしれません。

葛山公の要請に答えて下山した峰の行者は其の日の内に葛山館に到着し城主に拝謁して雨乞いの行をお請けする事を申上げたのであります。館を出た行者は待って居た村人を集めて仕度くに取りかかりました。

第一に今より雨乞いの行事が終了するまで米の御飯は一切断つ事。

第二天竜王の命は臍(へそ)饅頭が一番の好物である。各家百個の小麦饅頭を作り山へ持って行く事。

第三陣笠に身を固めて雨が降っても大丈夫の様にし水は三日分そば粉一升(二リットル弱)持って行く事。

第四祈禱の途中で如何なる事が有ってもお祈りは中止してはならぬ。皆さんがお祈りする言葉は「雨降らせ賜えな天竜王の命」を一心に唱えて下さい。以上であるとおっしゃいました。

修行者に従って雷山に出発致しました。

峰の行者は法螺貝を吹きならし雷山の祠の前に着きました。

雷山の峰から見下ろす村々は旱りに灼けて枯死寸前の田が黄味がかって見え山の樹々は至る所立枯の木が見えて居

りました。

箱根山上に赤い月が燃え出て実はこの世とも思われぬ有さまでした。行者の指図により祭壇を作り小麦饅頭を山と積み其の下に護摩壇を設けました。

修験者の衣に更えて行者は祭壇の前に座し祈禱を始める事になり村人は皆護摩壇の下に座しお祈りを始めたのでした。

行者の声は山々にこだまし、草も木もなびく程朗々たる声を張り神々しい様でした。

ひと時の祈禱も終り行者は立上がり池の方へと参りました。そして行者の指し示す方を見ました。

「村の衆見なさいこの山の神泉が涸れて居るのは誰かが山に来てこの水を汲み又は汚した為に神罰をうけ又池は涸れ竜神は天城の八丁の池に行ってしまわれた。今其の怒りを鎮めこの池に水が再び湧き出る様にお願いした。」

行者は錫杖を持って涸池の底目掛けてエイッと突き入れ呪文を唱えながらその錫杖を抜きましたら不思議なことに其の穴から澄切った古泉が吹き上げて来たのでした。

行者は其の神泉を汲み神前に供えて愈々雨乞いの行に入る事を申渡しました。

村の人々が如何に雨乞いをしても雨の降らなかった訳を

「この神泉を涸らす者が居ると竜神は天城の八丁の池に行ってしまい雨乞いしても駄目であるから注意して神泉にふれぬ様に」

と話してくれました。

さて雨乞いの行に入る護摩壇に行者は座して呪文を切って護摩を焚き始めました。

護摩の煙りは空高く立ちこめ空一面に広がり始め真夜中を過ぎ夜も白々開けはじめる頃富士の嶺は茜色に染まり出して来ました。

行者は護摩を焚き続け村人は声を張りあげて「雨降らせ賜えな天竜王の命」と唱え続けて居りました。

明けゆく山々に普通なら沼津の海を目下に美しい見晴らしのよい峰で有りますが、今は違い旱りの為め暑さに大地は涸れた如く日の登るにしたがって祈る村人の顔から油汗が日に光って見えるのです。段々と声もかすれ口だけが動いて居りました。

行者は火の前に座し焚く護摩に顔は朱の如く声は少しも衰えません。今の時で五時、夏の日はまだ輝いて居ります。其の時刻でした。護摩の煙りが愛鷹山上に広がり其の煙りが雲に変って行きました。

其の雲を目がけて天城山の方から雲の一片が近よって来ました。

雲は次第に大きく山の上に来た時は積乱雲の如く見えました。

峰の上に来た雲は渦を巻き次第に黒雲は下って峰を包む様に覆い雷山は見えなくなってしまいました。

護摩壇の行者はやおら立上り黒雲に被われた中で神前の榊を持って神泉池にと参りました。池の中に榊を浸し呪文を唱えながら四方に向かって振りますと榊から露となって飛び散った水は光を発し四方に輝き稲妻となって雲の中を駆け廻り出したのでした。それも消えた後再び行者は護摩壇に向かい振りますと燃盛って居た火はつと消え其の一瞬にして闇となりました。

而し不思議にも消えた護摩壇から火柱が立って天地が裂けるかと思われる響きと共に滝の様な雨が降り出して来ました。

百獣の吠え狂う足音の様な雨脚の音が全山をゆり動かして降り出したのです。

雨が降って来た村の衆の喜びは大変でした。嬉泣きに泣きながらも「天竜王の命」を祈り続けて居ります。雨は朝になっても休みなく降り続き村人の目の前を火の玉が飛廻って居りました。

村の方では大騒ぎです。夕べから降り出した雨に城主も村の衆も手で戴く様にして濡れながら喜びあって居りました。朝が来ても寝る人は居りません。山から帰って来る行者を待って居るのでした。

山の方では雷や稲妻の物凄い時も過ぎ峰の上は爽やかな真昼の光が指して来ました。水の流れの音も小鳥の囀りの声も谷の方から聞えて参りました。

一同は急に空腹を覚え行者に小麦饅頭でもと神前を見ますとあの山の如き饅頭が一つも有りません。驚いた村人は行者に聞きました。

「あの饅頭は竜神が戴いてしまった。臍饅頭と云って竜神が一番好物として居る。雨乞いの時はこれから先神前に上げて戴きたい。これを喰べてない時は不在か何かお気にめさぬ事があった時で雨乞いも駄目である」

と申されました。

村の衆はなる程と思い持参したそば粉を団ごにして焼く事にしました。而し火が焚けないのでどうするかと考えて居りますと行者は

「護摩の上に乗せれば焼ける」

と申されました。

行って見ますとあの雨で表面はすっかり消えてしまったのに、行者が錫杖で十字を切るとぱっと燃え出しました。

そば団ごはどしどし焼け腹の空いた為に実に美味しく喰べられます。行者は「これは何より好物だ」と申され喰べて居りました。

皆腹一ぱい喰べて愈々山を下る事になりました。

雨もいつしか上り夏の昼の光がまぶしく照り輝いて居ります。

行者の吹く法螺貝が山から山へ木霊し村の方へ響き渡って行きました。

そうら下山の知らせのお告げだと村人は途中迄お迎えに来て居りました。

村人の感激の渦の中を城に向って行きました。

葛山公は行者の好む物を伺いましたらそば粉であると申されました。それではと云うので、銭百貫とそば俵を馬に着けてお礼の印とし毎年、其恩に報いる為に村人はそばを背負って大山に礼参りをする事になりました。

行者の帰る道々各村の代表は送り迎えをして大山の庵までお送りしたのでした。

（杉山道彦「雷山の雨乞い」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第五号）

㈤　愛鷹山、富士山にまつわる伝説

①　愛鷹山の由来

私たち郷土の西側のどっしりとしたお山を愛鷹山と呼んでいます。その名の由来をお話しましょう。

山麓の夕暮れは早い。麓につくられた巣の中で雀の親子が仲むつまじくさえずっていました。

ある時、雀の親はエを探しに行ったままついにもどりませんでした。

子雀たちは泣きました。

風にうたれ、雨にうたれ、空腹で死にそうでした。

鷹は、足高山の上空を輪をえがいて飛んでいました。鷹は雀の巣を見つけさっと下りて食べてしまおうとしました。だが鷹は、小さな雀たちが余りにもかわいいので巣までエを運び子雀たちを育てたのてす。やがて小さな雀たちは巣立っていきました。

幾年か経って鷹も老いて思うように飛べなくなりました。山麓は富士おろしに氷った。老いた鷹の寿命も間近に迫りました。すると雀の一群が飛んできて鷹にエを運んだのです。その光景を見た村人たちは鷹の心根を思い〝愛鷹〟という名をつけたそうです。

（語り手すぎやまひろみち　記録せりざわみつひろ「愛鷹山の由来」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第九号）

② 富士山の雪だるま

昔。ずっと昔。

富士山は天にそびえていました。

雲の上に天上の庭があってあどけないかわいい子どもたちが遊んでいました。

子どもたちは庭の隅に、雪におおわれた富士山のてっぺんを見つけたのです。いたずら好きの子どもたちは、雲の上で雪合戦をはじめたのです。

雪をとっては投げているうちに、てっぺんのお鉢の底までかいてしまいました。そして雪団子はころころところが

り、だんだん大きくなり、裾野でとまりました。それが鐘子山・双子山となったそうです。

（語り手すぎやまひろみち　記録せりざわみつひろ「富士山の雪だるま」裾野郷土研究会『裾野郷土研究』第九号）